

Nickel Yellow

ニッケルイエロー

Vol.1

2012年夏号

「来週」姉崎あきか
「フローラの追憶 第一部」ブルーアイリス

エンターテイメント系文芸同人誌「ニッケルイエロー」創刊です

表紙イラスト
mm(ミリ) <http://miriyellow.web.fc2.com/>







来週

文 姉崎あきか

E-mail: akika_54@yahoo.co.jp` twitter: アカフント・@akika\_a`

ライター・記者・書評家。金融関係のオシゴトが多い、駆け出しライター。書籍の代筆、ウェブサイトのキャッチコピー、業界新聞などを手がける。自分の名前で本を出すのが夢。ジブリ映画とJポップが好き。写真の勉強中。愛犬のシーズー、モモが宝物。

イラストレーション たかはしいちこ

URL <http://strawberry-11.jp/bindste.jp/>
E-mail: ichiko.taka@gmail.com

専門「学校卒業後、イラストグループ展を中心に活動中。今春より、イラスト入り旅行エッセイも執筆開始。

荷物を流すベルトがいつせいにとまった気配。ダンボール箱を抱えたまま仰げば、頭上ではオレンジ色のランプがくるくると明滅している。

——停止ラインに載った箱をどけなさい。危険です。次の荷物を送れません。

機械の音がそんな意味のことをまくしたてる。

「うっせえな」

空のカゴ台車をひっぱりながら、トヤマさんが走ってきた。わかってんだよ。やかましい女だな。くちやくちやとガムを噛んでは、警告の声色をなじる。

現場の緊張がふいに緩んだ気がした。

薄暗い屋内には、いくつものベルトコンベアが走っている。天井ちかくのベルトから僕らの作業台へ、細長いレーンが伸びている。そのレーン上をなめらかに降りて、伝票のはりついたダンボール箱が登場する。それをさばくのが僕らの仕事だ。

伝票の番号にしたがって、荷物を台車に積み、セマさんは緑区。僕は旭区。はじめて見る顔の、十代らしいバイトくんは青葉区。

いっぱいになったカゴ台車はトラックに乗って、各地へ旅立つ。それがそのまま家庭に届くのか、あるいはまたどこかで仕分けられることになるのか、僕らは知らない。

すべり台の着地点には、黄色い線が描かれている。荷物が一定時間ラインの上から動かないと、機械が文句を言うのである。

もっとも、作業台には筒状の滑車がついている。常であれば、荷物は停止ラインを素通りし、すべってきたままの速度で卓の端へたどり着く。ところが今日は台の上が箱で埋めつくされている。降りてきた新しい荷物の行き場がないのだ。

あふれた箱は床に落ち、重なり、僕らの足場を奪っている。汚れた緑色の床が見えなくなって久しい。

いったん鳴りやんだブザーがまた騒ぎだした。

「だから。うるせえんだよ」

いちいち機械相手に口げんかをするトヤマさんがおかしくて、僕はひそかにほくそ笑んだ。

いいぞ。もっと言ってやれ。心のなかで指笛を吹き、ガム好きな金髪中年をはやしたてる。

「ヘルプ呼んできたよ」

誰に向けてでもなくつぶやくトヤマさんに、僕は返した。

「すごいですね、お歳暮ラッシュって」

「こんなもんじゃねえよ」

ピーク時はもっとひどいらしい。

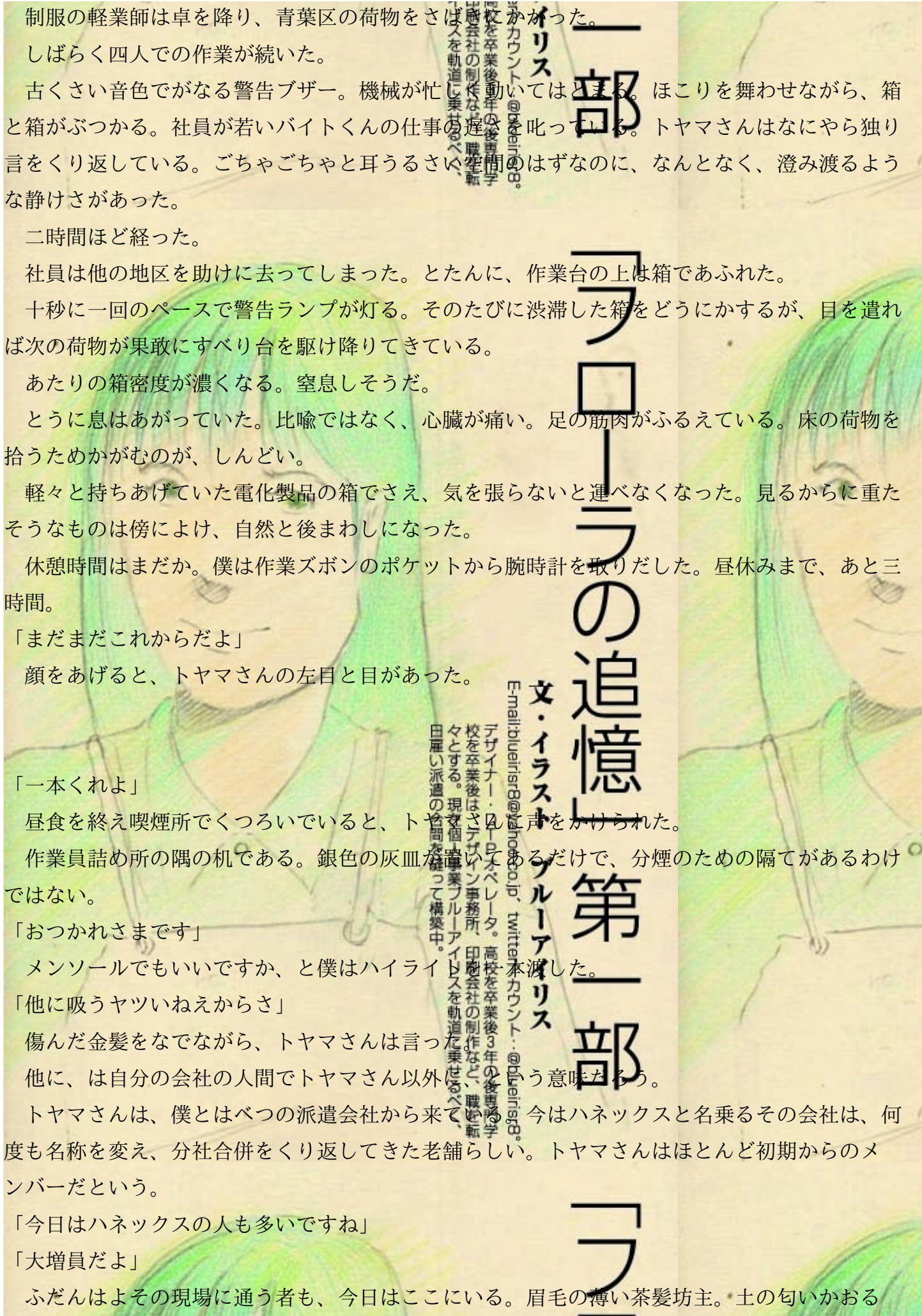
ベージュの制服を着た社員が走ってきた。箱をかきわけて、作業台に跳び乗る。

すべり台につっかえているダンボール箱を、僕もあつかうみたいにたやすく、脇に重ねていく。ベルトがふたたび流れはじめた。

さすが社員。僕は思う。ベテランのトヤマさんよりも目をみはるが、“社員”にはかなわない。

の追憶 第一部

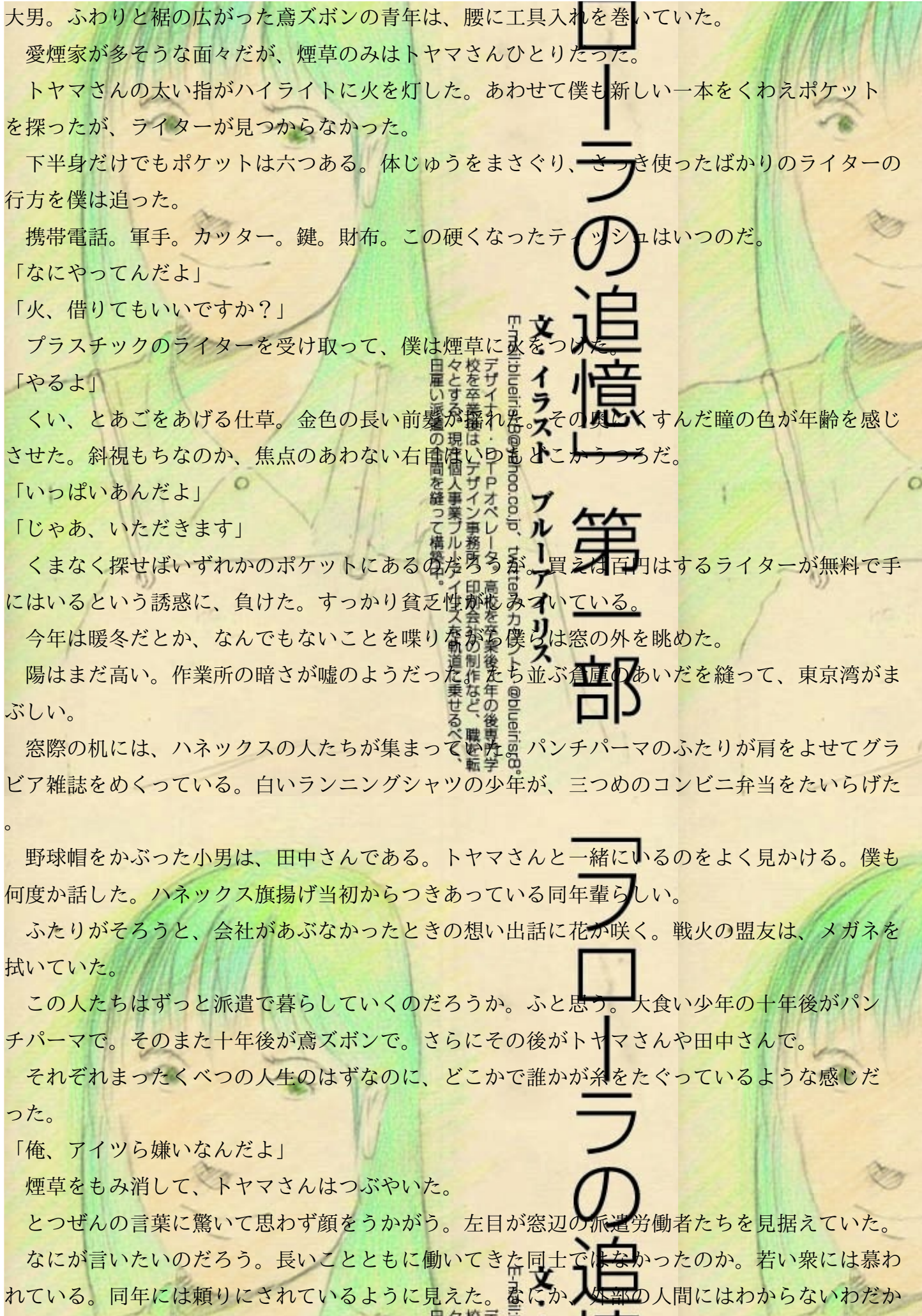
文・イラスト ブルリア
E-mail:blueiris10@yaho.co.jp twitter:blueiris10
デザイン・イラスト ブルリア
校を卒業後は、デザイン事務所勤務。高橋の仕事を卒業後3年の勤務を経て、職転出。
々とするが、現職の個人事業主として、印刷会社の制作など、職転出。
日雇い派遣の合間を縫って構想中。



第一部 フロアの追憶 第一部

制服の軽業師は卓を降り、青葉区の荷物をさばりかかった。
しばらく四人での作業が続いた。
古くさい音色でがなる警告ブザー。機械が忙し動いてはとまる。ほこりを舞わせながら、箱と箱がぶつかる。社員が若いバイトくんの仕事の遅さを叱っている。トヤマさんはなにやら独り言をくり返している。ごちゃごちゃと耳うるさい空間のはずなのに、なんとなく、澄み渡るような静けさがあった。
二時間ほど経った。
社員は他の地区を助けに去ってしまった。とたんに、作業台の上は箱であふれた。
十秒に一回のペースで警告ランプが灯る。そのたびに渋滞した箱をどうにかするが、目を遣れば次の荷物が果敢にすべり台を駆け降りてきている。
あたりの箱密度が濃くなる。窒息しそうだ。
とうに息はあがっていた。比喻ではなく、心臓が痛い。足の筋肉がふるえている。床の荷物を拾うためかがむのが、しんどい。
軽々と持ちあげていた電化製品の箱でさえ、気を張らないと運べなくなった。見るからに重たそうなものは傍によけ、自然と後まわしになった。
休憩時間はまだか。僕は作業ズボンのポケットから腕時計を取り出した。昼休みまで、あと三時間。
「まだまだこれからだよ」
顔をあげると、トヤマさんの左目と目があった。
「一本くれよ」
昼食を終え喫煙所でくつろいでいると、トヤマさんの声がかけられた。
作業員詰め所の隅の机である。銀色の灰皿があるだけで、分煙のための隔てがあるわけではない。
「おつかれさまです」
メンソールでもいいですか、と僕はハイライを渡した。
「他に吸うヤツいいえからさ」
傷んだ金髪をなでながら、トヤマさんは言った。
他に、は自分の会社の人間でトヤマさん以外に、もう意味だろう。
トヤマさんは、僕とはべつの派遣会社から来て、今はハネックスと名乗るその会社は、何度も名称を変え、分社合併をくり返してきた老舗らしい。トヤマさんはほとんど初期からのメンバーだという。
「今日はハネックスの人も多いですね」
「大增員だよ」
ふだんはよその現場に通う者も、今日はここにいる。眉毛の薄い茶髪坊主。土の匂いかおる

文・イラスト
デザイナー・フロアベレータ。高校を卒業後3年の後、専門学校を卒業後はデザイン事務所、印刷会社の制作など、職を転々とする。現在個々人作業ブルーアイトスを軌道に乗せるべく、日雇い派遣の仲間を雇って構築中。
E-mail:blueiris8@nifty.jp, twitter:blueiris8p.



大男。ふわりと裾の広がった鳶ズボンの青年は、腰に工具入れを巻いていた。

愛煙家が多そうな面々だが、煙草のみはトヤマさんひとりだった。

トヤマさんの太い指がハイライトに火を灯した。あわせて僕も新しい一本をくわえポケットを探したが、ライターが見つからなかった。

下半身だけでもポケットは六つある。体じゅうをまさぐり、さっき使ったばかりのライターの行方を僕は追った。

携帯電話。軍手。カッター。鍵。財布。この硬くなったティッシュはいつのだ。

「なにやってんだよ」

「火、借りてもいいですか？」

プラスチックのライターを受け取って、僕は煙草に火をつけた。

「やるよ」

くい、とあごをあげる仕草。金色の長い前髪が揺れた。その奥にくすんだ瞳の色が年齢を感じさせた。斜視もちなのか、焦点のあわない右目はどこかうつろだ。

「いっぱいあんだよ」

「じゃあ、いただきます」

くまなく探せばいずれかのポケットにあるのだろう。買えば百円はするライターが無料で手にはいるという誘惑に、負けた。すっかり貧乏性な僕が、窓の外を眺めた。

今年は暖冬だとか、なんでもないことを喋りながら、僕は窓の外を眺めた。

陽はまだ高い。作業所の暗さが嘘のようだった。ち並ぶ倉庫のあいだを縫って、東京湾がまぶしい。

窓際の机には、ハネックスの人たちが集まって、パンチパーマのふたりが肩をよせてグラフィック雑誌をめくっている。白いランニングシャツの少年が、三つめのコンビニ弁当をたいらげた。

。

野球帽をかぶった小男は、田中さんである。トヤマさんと一緒にいるのをよく見かける。僕も何度か話した。ハネックス旗揚げ当初からつきあっている同年輩らしい。

ふたりがそろろうと、会社があぶなかったときの思い出話に花が咲く。戦火の盟友は、メガネを拭いていた。

この人たちはずっと派遣で暮らしていくのだろうか。ふと思う。大食い少年の十年後がパンチパーマで。そのまた十年後が鳶ズボンで。さらにその後がトヤマさんや田中さんで。

それぞれまったくべつの人生のはずなのに、どこかで誰かが糸をたぐっているような感じだった。

「俺、アイツら嫌いなんだよ」

煙草をもみ消して、トヤマさんはつぶやいた。

とつぜんの言葉に驚いて思わず顔をうかがう。左目が窓辺の派遣労働者たちを見据えていた。

なにが言いたいのだろう。長いことともに働いてきた同士ではなかったのか。若い衆には慕われている。同年には頼りにされているように見えた。なにか、外部の人間にはわからないわだか

Illustration by Blue Iris
Email: blueiris@blueiris.jp, blueiris@blueiris.jp, blueiris@blueiris.jp

まりがあるのだろうか。

おそろおそろたずねた。

「どうしてです？」

「俺、来週就職するんだよ」

「おお。おめでとうございます」

めでたいが、まるで理由になっていない。のなかでは筋が通っているふうだった。

仲間たちと別れるさみしさが、彼をあまのじやせている。そう勘ぐってみたけれど、ずいぶん的外れのような気がした。

「どんな業界なんですか？」

「知り合いが会社はじめたんだよ」

「なんの会社で……」

「五反田のちっせえオフィスでさ」

よほど嬉しいらしい。僕の質問をさえぎって、トヤマさんは喋り続けた。額のしわがしゃくとり虫みたいに伸びては縮む。斜視の右目が盛んに泳ぐ。

中学のときの友人が独立した。来週からその事務所にお世話になるという。トヤマさんのことだからてっきり力仕事かと思いきや、内勤で働くような話しぶりだった。パソコン覚えなきゃなんねえんだよ、と楽しげに嘆いている。なにを扱う会社なのかは、最後までわからなかった。

「来週からスーツで通勤ですね」

ふっと笑顔が抜け、トヤマさんは意外そうな表情をつくった。

「もしかして用意してないんですか、スーツ」

「ネクタイはあんだよ」

凶星らしい。

知人が立ちあげたちいさなベンチャー企業である。しばらくは私服で働くつもりなのだろう。

煙草を灰皿に押しつけ、僕はもらったライターで次の一本に火をつけた。吸いますかとトヤマさんにもすすめたが、断られた。

「おまえは就職しねえの？」

「実は、サラリーマンだったんです」

「なんだよ。辞めちゃったの」

「筆で食べていきたくて」

今度は僕が語り手になった。

学生の頃から物書きになりたかった。氷河期なんでも構わない。妥協の就職をしたが、夢をあきらめきれなかった。サービス残業と、仕事を持ち帰る日々。会社で寝泊りするひと月もあった。ろくに本も読まない一年が過ぎ、この駄目だと意を決した。

「だから今は仕事抑えめにしてるんです」

生活費を節約し、浮いた時間で全集をひもとく。ぐうと腹の虫がうるさいときも、物語の世界にはいれば飢えを忘れられる。本が僕の常備食だ。

イラスト ブルーアイリス
blueiris@yahoo.co.jp, twitter:blueiris8
デザイナー・DTPオペレーターを卒業後は、デザイン事務所や印刷会社の制作など、職を転々とする。現在個人事業ブルーアイリスを軌道に乗せるべく、日雇い派遣の合間を縫って構想中。

文・イラスト ブルーアイリス
Email:blueiris@yahoo.co.jp, twitter:blueiris8
デザイナー・DTPオペレーターを卒業後は、デザイン事務所や印刷会社の制作など、職を転々とする。現在個人事業ブルーアイリスを軌道に乗せるべく、日雇い派遣の合間を縫って構想中。

「追憶」第一部

「役者やバンドマンはいたけど、作家ってのはほめだな」

「小説で食べていきたいんです、いつかは」

そのいつかって、いつだろう。僕はひそかに自問する。離職したての頃は、それがとても近い将来だと思っていたのに。

ここ半年、読むばかりでなにも書いていない。

ひき続く筋肉痛と空腹感のなか、すこしずついろいろなものがすり減っていた。千円で買ったスニーカーの靴底。口座の残り。原稿用紙に向かう気力。

「まあ、男なんだからやり通せよ」

トヤマさんは僕の背中を勢いよく叩いた。ばちん、とおおきな音がする。まわりの喫煙者が驚いてこちらを見た。これは手形が残るだろう。痛い。

男だから。そんな理由で、どこまでもふんばれる気がした。

一週間が過ぎても、トヤマさんは作業所に通っていた。

お歳暮のピークは去り、僕はクールサービスの現場にまわされることが多くなった。冷えきった倉庫で生鮮などの荷物を分ける仕事である。

トヤマさんの方は相変わらず横浜地区のベル・アイリスと絡み合っているようだ。休憩のタイミングがずれるので、自然と顔をあわせることが少なかった。

就職の話はどうなったのだろう。

トヤマさんの代わりに、おなじくクールサービスに田中さんと昼休みを過ごすようになった。野球帽の小男は今日もシャケ弁当である。

箸を割るなり田中さんは言った。

「昨日、風俗行っちゃった」

「へえ。吉原ですか？」

「錦糸町」

何日ぶんの労働を散財させたのだろう。適当に打ちつつ、トヤマさんの話を切りだすきっかけを僕は探った。

「ところで」

らちがあかなそうなので、強引に話題を変える。

「トヤマさんって、就職するんですよね？」

田中さんは不意をくらったような顔を見せた。まさか盟友が知らないはずはないだろうが。

メガネの奥の視線が天井に向かう。ひと間おいて、あれか、と声がもれた。

「五反田の会社でしょ」

「もしかして、ダメになっちゃったんですか？」

「十年も前からずっと言ってるね」

僕は言葉を失った。

文・イラスト
デジンスクール・DOTDオペレータ。高校を卒業後3年、就職専門学校の卒業後は、デザイン事務所、印刷会社の制作な相手を、日雇い、現在の個人事業主として活動中。

E-mail: deirin8@yahoo.co.jp, twitter: @deirin8

フロロラの追憶 第一部

辻斬りに遭ったみたいだった。目の前にぽっかりと穴があいた。
「彼、ちょっとおかしいんだよ」
田中さんは箸を持っていない方の手を耳にかざした。手首を何度もひねり、頭にささったねじをまわす仕草をする。抜いたねじをつまむようにして僕に示し、得意げな表情をつくった。
腹の底が熱くなった。肌の粟だつ感覚が体じゅうの皮膚をなでる。向かいに座る小男のしたり顔が、ひどく醜く見えた。
来週就職する。トヤマさんはおそらく本気で信じている。信しながら何十年も肉体労働を続けきた。孤独なその歴史を、誰が笑えるものか。
田中さんはきつと、就職なんて考えてもいない。単純作業と風俗通いをくり返し、野球帽をかぶったまま老いていくんだろう。おかしいのは、
「田中さんとは違うんですよ」
僕は小男を見据えた。
ふだんおとなしい青年からあらわれただしめ、田中さんはうろたえた。笑顔を保とうとつとめているのがわかる。メガネの奥の瞳に、おびえの色があった。
理不尽だろう。自分でも、よくわからなかった。田中さんを蔑んでまでトヤマさんを守らねばならない義理が、どこかにあるのか。
いや、ある。僕は思いあたった。トヤマさんは、
。それでじゅうぶんだ。

気まずい昼食を終え喫煙所に行くと、作業を終えた集団が階段を降りてくるところだった。汗の匂いがせまる。詰め所の湿度がぐんとあがった。
いくらか憶えのある顔があった。横浜地区が休憩にはいったようである。見慣れた金髪も目にはいった。
「最近見ねえな」
トヤマさんは灰皿の前で立ちどまって、僕に声をかけた。
「クールサービスにいるんです」
「どうだクールの方は」
マイナス温度を保つ巨大な冷蔵庫で、仕分けを行う作業である。
ベルトの両脇に作業員が並んで、流れてきた荷物から担当の番号のものを拾い足もとに落とす。あとは社員がコンテナに積みこんでくれる。
ベルトはものすごい速さで動く。動体視力が追いつかずはいめはとまどったが、すぐに慣れた。クールサービスと比べれば、お歳暮ラッシュの横浜地区はさながらフルマラソンだった。おなじ時給とはとても思えない。
「女の子も多くて」
「華があっていいな」

「ブルーアイリス」の追憶 第一部

「ブルーアイリス」の追憶

文・イラスト
Email: keiris8@yahoo.co.jp, twitter: @blueiris
デザイナー・DTPオ
校卒業後は、デザ
タとする。現在個人事業
日雇い派遣の合間を縫

文・イラスト
Email: keiris8@yahoo.co.jp, twitter: @blueiris
デザイナー・DTPオ
校卒業後は、デザ
タとする。現在個人事業
日雇い派遣の合間を縫



ほとんど力仕事ではない、女子作業員もいる。華がある。そう考える方がよほど健全な気がした。

「そうですね」

すると、トヤマさんはうつろな右目をまばゆ

「俺、来週就職するんだよ」

楽な現場だと伝えたかったのだけれど。華

細め、

Twitterアカウント: @blueiris8.

ベータ。高校を卒業後3年の後専門学

ン事務所、印刷会社の制作など、職を転

る。ブルーアイリスを軌道に乗せるべく、

つて構築中。



「フローラの追憶」第一部

文・イラスト フルーアイリス

E-mail:blueiris8@yahoo.co.jp` twitterアカウント: @blueiris8`

デザイナー・DTPオペレータ。高校を卒業後3年の後専門学校を卒業後は、デザイン事務所、印刷会社の制作など、職を転々とする。現在個人事業ブルーアイリスを軌道に乗せるべく、田雇い派遣の合間を縫って構築中。



ブルーアイリス
を卒業
会社を
軌道に

「それでは行ってきます」

「おう、しっかりな。導入は、今まで一年見

「はい、わかりました。頑張ります」

アシスタントデザイナーの青島真は襟を正して、部屋のドアを開けた。

仕事を初めて任され、これから打ち合わせに出る。

緊張の中、青島はビルの階段を下りていった。

外に出ると綺麗な青空が広がっていた。春日部駅東口の三階建ての小さなビルの三階に真が所属するデザイン事務所、ワンダースケープがある。

「やれやれやっと一年経ったか、まだまだだなあ」と一人言をつぶやきながら、春日部駅の横断地下道に向けて歩き出す。

季節は春だ。古利根川の桜吹雪の余韻を感じながら、真は自分の中に沸き立つ絵心を抑えきれないでいた。

「あー油絵描きたい、いや描かなくちゃ」などと思いながら、程なく横断地下道を潜り抜けて、春日部駅西口に出た。これから何をしに行くか？というところ、チラシとWEBデザインの打ち合わせに出る。店の名前は「花の店 フローラ」だ。西口のロータリーを抜けて、春日部郵便局の前まで歩く。郵便局の向かいにフローラはある。花屋にしてはかなり大きな店で、新規の事業を起こすために、今回チラシとWEBデザインの相談をワンダースケープに入れていた。今日はまずチラシの打ち合わせがメインで、WEBデザインの話は次回になるだろう。

真はデザインの見習いを始めてから、一年が経った。去年の今頃は右も左も分からなかったが、アートディレクターの墨田についていろいろなことを学べた。名刺にはdesignerの肩書きがついているが、実質アシスタントデザイナーだった。一年経って墨田はそろそろ真をステップアップさせようと、フローラの仕事の打ち合わせに出るのだ。

程なくして、真はフローラの前に立った。店先の花の並びを見て綺麗だな、と青島は思った。

「こんにちは、ワンダースケープの青島です。チラシの打ち合わせにやってきました」

店先には女性一名と男性が一名、それぞれにアレンジメントをやっていて、結構忙しいそうだった。

「ワンダースケープさんですか。チラシの件ですね。社長は奥にいますので、どうぞ」

店の奥にはたして社長は机に向かって帳簿を整理しながら、座っていた。

「はじめまして、ワンダースケープ、デザイナーの青島真と申します」

緊張の中青島はそう挨拶すると、社長が返してきた。

「お待ちしていましたよ、早速打ち合わせに入りましょう」

「はい」

「まずはね、春先のフラワーアレンジメントの売りに出したいのと、花の苗のセール品、ウチは結婚式場にフラワーアレンジメントを納品しているからその辺もチラシに入れたいんだよね」

「はい、わかりました」

「チラシをうつのは随分久しぶりなんだけど、青年会議所で墨田さんと話して、うって見ようか、って気になってね。それで。」

社長の外見は多分50歳くらいに、真には見えた。落ち着いた初老の男性という雰囲気、人をリラックスさせる何かを持っているように、青島は感じた。

「なるほど、デザインはどうしましょう。何かサンプルとかはありますか？」

「うーん、コレとってないんだよね。大体花屋はあんまりチラシうたないからね。デザインは任せるよ。原稿は今考え中で、あとでワンダースケープさんにファックスするからさ」

「はい、分かりました。ではお待ちしております」

「チラシの配布日はゴールデンウィークまでにはないけど、詳細はまだ固まっていないんだよね。ああ、あととうとうウチもインターネットホームページで宣伝するか、ということになってきてるので、どうかな、導入の相談にしてくれるかな」

「はい、ホームページの事をWEBって言いますが、WEBデザインもやっていますので、よろしくをお願いします」

「ああ、頼むよ。うちらアナログ人間ばっかりだよ。ようやく最近テレビをデジタルに変えたばかりでさ。パソコンも使った事無いんだよね」

「お任せください。あああとになっちゃいます。名刺渡します。青島です。よろしくをお願いします」

「おっと、そうだね、ウチも名刺渡しておこさないとね。墨田さんには渡しといたけど、早瀬です」

「はい、それでは、原稿お待ちしております。それからラフデザイン起こしますので起こしたら持ってきますので」

「分かった、ファックスするわさ」

「それでは、これで」

「ああ、それじゃあね」

真は席を立ち、机に広げた参考資料を畳んで鞆に入れ、出口へ向かう。出口を出れば若い女性がフラワーアレンジメントを男性店員に教わりながら、多分結婚式場に納品するであろうブーケを作っていた。真は足を止め、興味本位で女性の手つきを観察した。その時真は心臓がドキンとなるのを感じた。女性の雰囲気がとても大人びていて、興味の対象がブーケから女性自身へと移っていった。

「はー」

心の中でため息をつき、女性の顔を眺めている。

「オトナっぽいなー、オレより年上かな。でも綺麗だな、あの長い髪。いいなー」

などと心の中でつぶやき、声を掛けてみようか、と思いついた。

「うん？涼子に興味があるのかな？」

うしろから社長が間髪いれずに突っ込みを

「はあ、まあその、長い髪が綺麗ですね」

文・イラスト
Blue Iris
Email: teirib@blueiris.jp, twitter: @blueiris8

文・イラスト
Blue Iris
Email: teirib@blueiris.jp, twitter: @blueiris8

「チラシの追憶」第一部

わせに行ってくるさ。」

そういうと墨田は鞆を提げて、出て行っただ。

「青島くん、花屋で何かあった？、なんか違う。いつもの青島君じゃない！」

同僚の西園寺恵子が直感的なものの言い方で、真の中に芽生えた恋心を見抜いてきた。どつきりした真は慌てて否定する。

「いえ、自分はなんでもないですよ、いつもの青島です、いやだなあ女の勘ですかね」

西園寺と青島はおない年だが、西園寺は高校卒業後すぐに二年制の専門学校に入ったので、キャリアは青島より一年上だ。女に弱い青島はタメ口は聞けずに敬語で話すことが通例になっていた。恵子は仕事は出来る、青島は先輩の実績を観察しながら自分の糧にすることを心がけていた。真は、自分の机に立ち、椅子に座りMacを起動した。

「さて、明日までに4ページでしたっけか、楽勝ですかねえ。西園寺さん」

「そうねー、ウチのルーティン・ワークだから大事にね。それにしても」

「はい？それにしても、なんででしょうか」

「なんかいい人見つけたかな？私の直感がそう告げているんだけど」

「え？はあ、まあいい人っていうか、スゲー出会いはありましたよ、正直言って」

「いい人ね。電話番号とか聞いたりしてる。でも、元々、勇気は無いが。彼女いない暦22年だっけ。そろそろ何とかしないとね。周りはミンナ大人になっちゃったのに。」

「あーまたその話ですか、自分はいいんですよ、いい人いない……って今日いましたっけが」

「ほうーどんな人？ワタシよりか魅力的かなあー？」

「西園寺さんに話すんですか、なんか調子狂う所がある」

「なんで、興味あるわ、話してよ」

「いや、花屋のフラワーデザイナー見習いの21歳で、ロングヘアが綺麗でしたよ。胸がキュン
 となったんですよー」

「ふーん、美人だった？」

「いや、ため息が出るほどの美人でしたよ。でも、グーケ作ってる手つきはぎこちなかったですけど。入社してまだ一週間って話だから、まあねえ」

「青島君でも恋に落ちるんだ。ワタシ心配してたのよね。ホモなのかオタクなのか、色恋には縁が無かった人生でしょ、それじゃやっぱりツマラナイと思うわけね」

「へーい、へい。すみませんね、男子校だったし、芸大目指してたし、デザイン始めちゃったらMacが面白くなって、女の子には興味なかったんですよ、そんな私ですけどね。さてさてエロ本の割付始めますよ。西園寺さん、いつものカット頼みますよ。」

「はいはい、そうね一私も花屋に興味でたから、次回の打ち合わせには一緒に行くわよ。なんか楽しみ」

「えー、まいっか」

真は一抹の不安を感じたが、すぐに仕事に夢中になった。明日は休みだから、久しぶりにキャンパスに向かうつもりだった。絵を描くことは彼には習慣となっているのだった。そうこうし

てるうちに午後8時を回った。雑誌レイアウトはほぼ完了し、データを出版社のサーバーにアップして、ひとまずは仕事は終わった。墨田は打ち合わせから直帰するとの連絡があり、西園寺と青島は二人で事務所の戸締りをしてから、事務所の電気を消した。鍵をかけ、二人で階段を下りていった。西園寺が陽気な声で青島に話しかける。

「どうだ？今日はいつもの飲み屋で一杯やっただけで卒業を卒業して、明日は休みです。金曜の夜か。墨田さんいらないからお金掛かるけど、はい」

「いつもは社長のおごりだからねえ。よし、

春日部駅の東口の高層マンションの裏手に、店主の趣味の園芸で一杯の庭を持つショットバー「ラウンドアバウト」がある。かなり古くからある店で、墨田や西園寺の行きつけの店だ。去年から青島も一緒に飲むようになった。変わってきているといえば電気ブランがメニューにあって、浅草の神谷バーまで行かなくても春日部で電気ブランが飲めることだろうか。

「マスター、電気ブラン二つ、あとチーズ盛り」

マスターは手馴れた手つきでグラスを用意し電気を注ぎ込む。チーズの盛り合わせも、西園寺の好物だった。出された電気ブランを軽く飲んで西園寺は真の顔を見てニンマリしながら語りかける。

「青島真22歳、彼女いない暦も22年、こうしてみると結構いい男なのにね。不思議よねー、彼女どころか恋愛したこと無いっていうのは」

「はあまあその話はいいいじゃないですか。そんなこと言ったら西園寺さんだって、彼氏いないんじゃないですか？いいんですか？折角の青春なのに」

「いーのよあたしは。専門学校で出来ちゃったけど、卒業でなんか会う気力なくなっちゃってさ。相手も仕事が忙しかったみたいでね会わなくなって一年経つけど、あまり気にならない。自分も仕事が面白かったし、覚えることは山のようにあるし」

「うん、うん」

「そういう訳だから、ま、とにかく、モノにしてみなさいよ」

「どうでしょうね、恋愛したいような、遠くに置いておきたい様な、複雑な気分なんですけどね」

そうつぶやくと、青島は電気ブランを一気に飲み干した。

「明日は休みだけど、何するの？」

「そうですね、油絵が自分の生業ですから、油絵でも描いてますよ、後はオートバイの免許取ることですかね、そろそろお金たまったので、高校生からの夢なんですよええ」

「今日の事はブログに書くの？結構あなたのブログが楽しみなんだよね」

「ええ、そうですね、ま日記ですから、書きます。ほのかな転換点ですからね」

「ま、いいか、今日は軽く一杯って感じで、月曜からまた頑張りましょう」

そういうと西園寺は電気ブランを飲み干し、マスターに精算を頼んだ。

「まあ、今日も割り勘ですね。はい、わか

「そういうこと、じゃあ行こうか」

二人は店を出て、そこで別れた。

題名 青島真の日記 4月9日

<今日は初めて仕事を任されて、チラシデザインの練習に合わせに花屋に行った。仕事は先輩のやるのを見ていて、まあ無難に終わった。今日、自分は恋に落ちる、という人生初の感覚を味わったような気がする。髪の毛の長い、とてもキレイなフラワーデザイナー見習いの女性に恋をしたらしい。瞳と瞳が合わさった瞬間のあの胸のドキンとなる感覚は、自分ではじめて体験した。会社の先輩には「モノにしろさい」といわれているが、自分は何をした方がいいのか分からない。とりあえずチラシのデザインを起こそう。なにせお任せなんだから>

その日、真が帰ったあと、早瀬涼子は、結婚式場に納めるブーケ テーブルフラワーの作成に苦心していた。この道10年の先輩の熊田が手取り足取り教えていた。この仕事で人生を進んでいくしかない、と涼子は思っていた。そこへ社長がやってきて話かける。

「どうだ？今の男の子、なかなか好男子だったじゃないか。涼子さんもそろそろ次の人生を歩んでみたらいいんじゃないか」と静かに言った。

涼子はうつむき、顔をこわばらせながら返事をする。声は震えていた。

「やめてください。今はそんな気にはなれないです。それよりおじさま、フラワーデザイン、難しいです、今後やっていけるか不安なんですけど」

「まあまだ始めて一週間だろうに。慌てる必要はないんだよ。涼子さんはまだ若いし、それより何より何もしていないよりはマシじゃないか。仕事を一人前になってみようじゃないか。キミの成長を楽しみにしているよ」

先輩の熊田が合いの手を入れる

「そうそう、人生前向きにさ。過去に縛られるのはキミはまだ若いんだって思うんだよ」

熊田は年の頃30代半ばで、いまだ独身だった。花屋の裏で、野暮ったいメガネをかけていた。風采の上がらない感じだったが、フラワーデザイナーとしての腕は一流で、東京のホテルからの仕事のオファーを貰うほどなのだが、熊田がフロアに居ついて10年になる。

「前向きですか。でも……」

「人生、ヤマあり谷ありだしね。キミの場合にはと特殊だけど、そのうち未来を見るようになるだろうとも思えるけれどねえ」

「はい、それより熊田さん、5時までにテーブルフラワー5組作って、コサージュ作って、ブーケ作ってって、間に合うんですか」

「あああ、そうだね、早くやないとね。大事な取引先の仕事だからね、しっかりやらないとって、キミもやるんだよ」

「はあ、はい」

「オアシスを半分に切って、トレイに乗せて5個並べてくれ」

アイリス
はアカカント・@dundun
高校を卒業後3年の後門学
印刷会社の制作など、職を転
アイリスを軌道に乗せるく、

キミは一人前になってみようじゃないか。キミの成長を楽しみにしているよ」
先輩の熊田が合いの手を入れる
「そうそう、人生前向きにさ。過去に縛られるのはキミはまだ若いんだって思うんだよ」
熊田は年の頃30代半ばで、いまだ独身だった。花屋の裏で、野暮ったいメガネをかけていた。風采の上がらない感じだったが、フラワーデザイナーとしての腕は一流で、東京のホテルからの仕事のオファーを貰うほどなのだが、熊田がフロアに居ついて10年になる。
「前向きですか。でも……」
「人生、ヤマあり谷ありだしね。キミの場合にはと特殊だけど、そのうち未来を見るようになるだろうとも思えるけれどねえ」
「はい、それより熊田さん、5時までにテーブルフラワー5組作って、コサージュ作って、ブーケ作ってって、間に合うんですか」
「あああ、そうだね、早くやないとね。大事な取引先の仕事だからね、しっかりやらないとって、キミもやるんだよ」
「はあ、はい」
「オアシスを半分に切って、トレイに乗せて5個並べてくれ」

一部 フラ の追憶 第一部 フラ

オアシスというのは、保水性能の高い花の装飾に使うベースになるスポンジみたいなものだった。熊田は手早くテーブルフラワーをアレンジしていく。その手つきを涼子はじっと見ていた。時間にして15分で5個のフラワーアレンジメントは完成した。

「はやーい、それにキレイに出来てますねえ」と涼子は感嘆した。

「注文は以上だな、今日納品だから車に積んで、一緒に納品に行こう」

「はい、了解です。何もかもが初めてで、緊張しますね」

「始めはみんなそんなものさ、さて行って帰って店じまいだ」

「二人とも行っておいで、後片付けはオレがやっておくから。帰ってきたら三人でメシでも食おう。おごるから」

「はい、それでは行ってきます」

「よし、準備がオツケー、行こう」

二人は配送用の軽トラックに乗り込むと、大通りを出て南へ向かい2つ目の信号を右に曲がった。得意先の結婚式場、インペリアルズはフロアからキロと離れていない。毎日定期でフラワーアレンジメントの仕事をくれる、フロアの人で得意だった。

「さて、納品だ。」

トラックを降りて、裏手の通用門からトレイに兼ねたアレンジメント一式を抱えて、熊田と涼子は中へ入っていく。警備員が軽く会釈をし、中に入るように手を振って指図している。

「ほへー、コレが結婚式場……。やっぱり素敵な雰囲気ですね」

「ま、こうゆうところなんだよ。今度は一人で来るようにね。早く仕事に慣れてもらうよ」

「はいはい。」

中ほどに、営業のスーツ姿の社員がいたので、^{「おはようございます。」}
 一室を置いて、熊田が挨拶する。

「それでは納品いたしましたので、よろしくお願いします」

「ああ。ありがとうございます」

「それでは失礼します」

熊田は軽く挨拶をし、涼子も頭を下げて、そそくさと部屋を出て行った。車に乗ると、熊田はため息をつきながらつぶやく。

「やれやれ、今日も終わったよー」

「はい、また明日ですね」

「社長とメシだ、涼子君、まあ軽くビールでも飲もうじゃないか」

「社長がおごってくれるのは、えーと初めてです、なんか特別なことでもあるのかしら」

「ないない。ああ、でもあるとしたらインターネットで広告を打つという構想がどうもあるらしいから、その辺の話なんじゃないかな」

「いんたーねっと、ですか。すみません私には縁が無かったです。メールも打てないんですよね」

「あー、そう、メールくらい打てるようじゃなきゃ現代人とはいえないぞ」

文・イラスト・ブックデザイン
E-mail:bluebird8@nifty.com
デザインから意匠まで、印刷業務、3年後の進学
校を卒業後、得イン事業、印刷会社の乗作など、商
々と通。現在個人事業主、中、敵、乗せるべく、
日雇い派遣の合間に縫って縫製中、素人
で、

ちイラスト ブルもアイヌのいゝ客に
るが、最近マスコミで、
らしいんす。文
ビールを飲みな
が、最近マス
らしいんす。文
ビールを飲みな
が、最近マス
らしいんす。文

「まずはチラシでワンドースケープと仲良くしたい。あの墨田って社長と話しをしたんだけれど、インターネット導入の相談はできるな。青年会議所で話したよ」

「ははあ今日来て彼が先生になるんですかね」
「うん、青島君っていったかな。インターネットは詳しいらしいから、また来週チラシのデザインが上がったら、いろいろ相談してみようと思う。涼子さんも携帯電話、そろそろ持たないとな。ウチの看板娘になって欲しいから、ツイッター担当になってもらうよ」

「エー、私メールも使ったこと無いのにですか」
「まだ若いんだから、なんとかなる。今時めずらしい、ケータイも持ってないなんてなあ」
「はあ、親が許してくれなかったんですよね。」
「なにはともあれ、来週、彼が来るのが楽しみです」
「うん、5月までには光回線引いて、店先にパソコンを一台置くことにするからね」
「パソコンは高校の授業で習ったので、ホームページ見ることくらいはできます」
「それでいい、オレもパソコンは初めてだけど、みんなやってることだしな」
「おっと、刺身と焼き鳥が来ましたよ、食べましょう」
「おう、がつつり食って明日も頑張ろうか」

三人は、とりとめなく話をしながら食べ、飲んだ。三人とも新しい挑戦にココロが弾んでいることが分かり、なんとなく楽しい気持ちになっていた。程なく全部食べきったあと、三人は店をでて、それぞれの家に帰っていった。

1週間が過ぎた。真はこの一週間、かなり苦しんだ。フローラのチラシのデザインを完成させた。要素は全部原稿どおりに入れた。アートディレクションにしたがって、直しもし、自分のアイデアも入れた。参考作品が少なくて、彼の力量にデザインは掛かっていた。

「墨田さん、フローラのチラシのキャンプ、」
「よし、出来たか？ちょっと見せてみろ」
「はい」

真はプリントアウトされたB5サイズのチラシのキャンプを墨田に渡す。どう評価されるか、真は不安だった。初めて主体的に進めた仕事だから、自分が問われるような、そんな感覚を持ちながら、キャンプを眺めてる墨田の方を見ていた。

「うん、いいだろう、これで行って見ようか、」
「うん、いいだろう、これで行って見ようか、」

OKが出た。青島は、内心ほくそえみながら、キャンプを渡されて、机の上に置いた。さて後はやることは一つ、もちろんフローラの社長にキャンプを渡すために出かける必要はなかった。

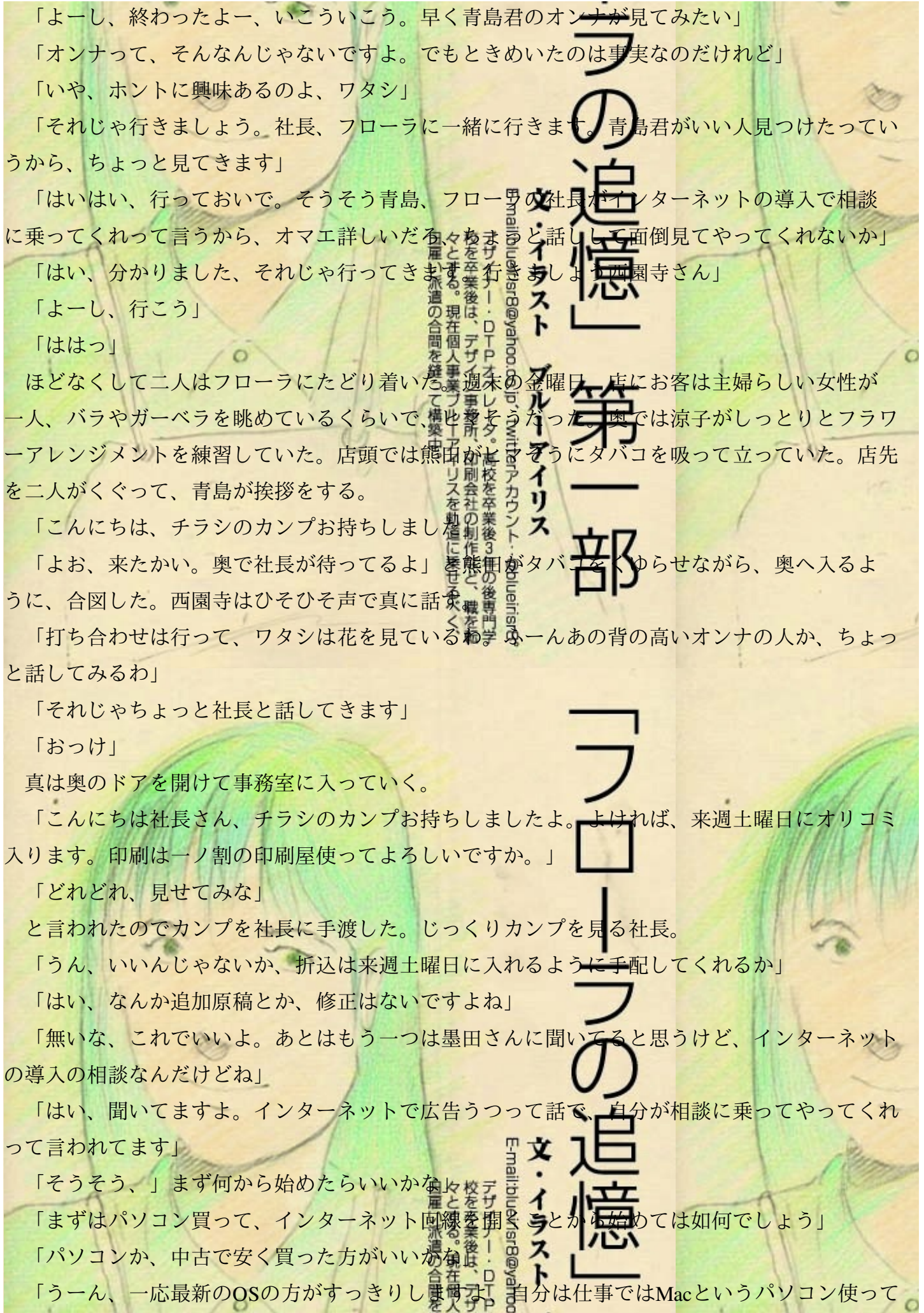
「青島君、行くの？じゃ約束通り、私も行くからね。ちょっと待ってて、コレちょっとやってから、行くから」

「はあ、まあ待ってますよ」
「待つだよ」

西園寺は、マッキントッシュに向かい、ディスカウントストアのチラシの写真の切り抜きをやっていた。コレもルーティーンワークの一つなのだが、単価の安い儲からない仕事だった。

後専門学校の職を転々とする。現在個人事業主としてフリーランスで活動中。
Email:bluebird@bluebird.jp, twitter:bluebird, @bluebirdjp

フローラの追憶 第一部



「よーし、終わったよー、いこういこう。早く青島君のオンナが見てみたい」

「オンナって、そんなんじゃないですよ。でもときめいたのは事実なのだけれど」

「いや、ホントに興味あるのよ、ワタシ」

「それじゃ行きましょう。社長、フローラと一緒にいきます。青島君がいい人見つけたっていうから、ちょっと見てきます」

「はいはい、行っておいで。そうそう青島、フローラの社長がインターネットの導入で相談に乗ってくれって言うから、オマエ詳しいだから話して面倒見てやってくれないか」

「はい、分かりました、それじゃ行ってきましたよ西園寺さん」

「よーし、行こう」

「ははっ」

ほどなくして二人はフローラにたどり着いた。金曜日。店にお客は主婦らしい女性が一人、バラやガーベラを眺めているくらいで、奥では涼子がしっとりとフラワーアレンジメントを練習していた。店頭では熊田がタバコを吸って立っていた。店先を二人がくぐって、青島が挨拶をする。

「こんにちは、チラシのカンプお持ちしました」

「よお、来たかい。奥で社長が待ってるよ」

「合図した。西園寺はひそひそ声で真に話さなく」

「打ち合わせは行って、ワタシは花を見ている」

「うーんあの背の高いオンナの人か、ちょっと話してみるわ」

「それじゃちょっと社長と話してきます」

「おっけ」

真は奥のドアを開けて事務室に入っていく。

「こんにちは社長さん、チラシのカンプお持ちしましたよ。よければ、来週土曜日にオリコミ入ります。印刷は一ノ割の印刷屋使ってよろしいですか。」

「どれどれ、見せてみな」

と言われたのでカンプを社長に手渡した。じっくりカンプを見る社長。

「うん、いいんじゃないか、折込は来週土曜日に入れるように手配してくれるか」

「はい、なんか追加原稿とか、修正はないですよ」

「無いな、これでいいよ。あとはもう一つは墨田さんに聞いてると思うけど、インターネットの導入の相談なんだけどね」

「はい、聞いてますよ。インターネットで広告うつって話で、自分が相談に乗ってやってくれて言われてます」

「そうそう、」まず何から始めたらいいかな

「まずはパソコン買って、インターネット回線」

「パソコンか、中古で安く買った方がいいかな」

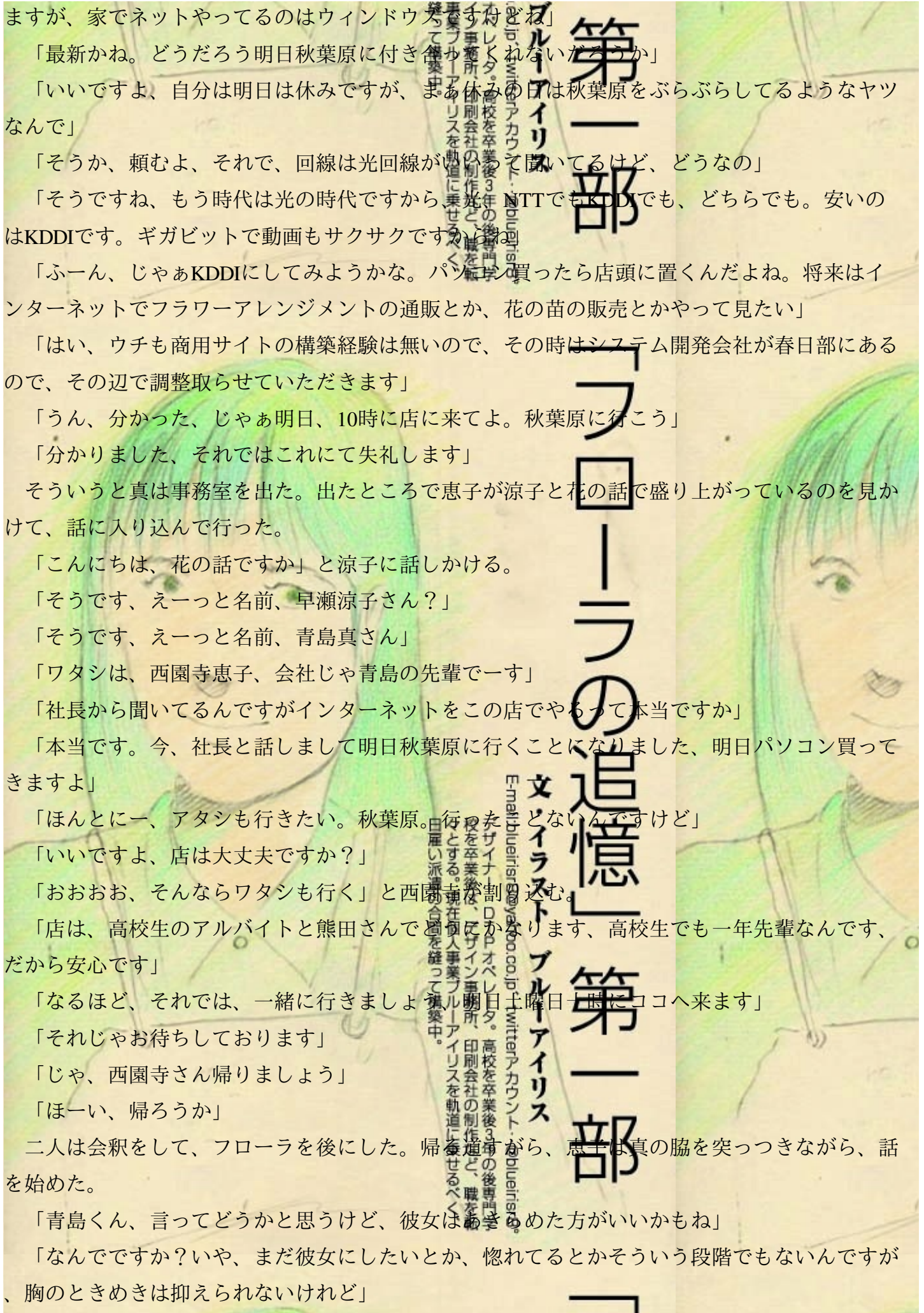
「うーん、一応最新のOSの方がすっきりしよ」

「自分は仕事ではMacというパソコン使って」

フローラの追憶

文・イラスト
E-mail:blue13sr@yahoo.co.jp Twitter:blue13sr

文・イラスト
E-mail:blue13sr@yahoo.co.jp Twitter:blue13sr



ですが、家でネットやってるのはウィンドウ
「最新かね。どうだろう明日秋葉原に付き
「いいですよ、自分は明日は休みですが、ま
なんで」
「そうか、頼むよ、それで、回線は光回線が
「そうですね、もう時代は光の時代ですから
はKDDIです。ギガビットで動画もサクサクです
「ふーん、じゃあKDDIにしてみようかな。パ
インターネットでフラワーアレンジメントの通販とか、花の苗の販売とかやって見たい」
「はい、うちも商用サイトの構築経験は無いので、その時はシステム開発会社が春日部にある
ので、その辺で調整取らせていただきます」
「うん、分かった、じゃあ明日、10時に店に来てよ。秋葉原に行こう」
「分かりました、それではこれにて失礼します」
そう言うと真は事務室を出た。出たところで恵子が涼子と花の話で盛り上がっているのを見か
けて、話に入り込んで行った。
「こんにちは、花の話ですか」と涼子に話しかける。
「そうです、えーっと名前、早瀬涼子さん？」
「そうです、えーっと名前、青島真さん」
「ワタシは、西園寺恵子、会社じゃ青島の先輩で一す」
「社長から聞いてるんですがインターネットをこの店でやもって本当ですか」
「本当です。今、社長と話しまして明日秋葉原に行くことになりました、明日パソコン買って
きますよ」
「ほんとに一、アタシも行きたい。秋葉原。
「いいですよ、店は大丈夫ですか？」
「おおおお、そんならワタシも行く」と西
「店は、高校生のアルバイトと熊田さんで
だから安心です」
「なるほど、それでは、一緒に行きましょ
「それじゃお待ちしております」
「じゃ、西園寺さん帰りましょう」
「ほーい、帰ろうか」
二人は会釈をして、フローラを後にした。帰
を始めた。
「青島くん、言ってどうかと思うけど、彼女は
「なんでですか？いや、まだ彼女にしたいとか、惚れてるとかそういう段階でもないんですが
、胸のときめきは抑えられないけれど」

第一部 「追憶」 第一部

「どね」
「ふーん、じゃあKDDIにしてみようかな。パ
インターネットでフラワーアレンジメントの通販とか、花の苗の販売とかやって見たい」
「はい、うちも商用サイトの構築経験は無いので、その時はシステム開発会社が春日部にある
ので、その辺で調整取らせていただきます」
「うん、分かった、じゃあ明日、10時に店に来てよ。秋葉原に行こう」
「分かりました、それではこれにて失礼します」
そう言うと真は事務室を出た。出たところで恵子が涼子と花の話で盛り上がっているのを見か
けて、話に入り込んで行った。
「こんにちは、花の話ですか」と涼子に話しかける。
「そうです、えーっと名前、早瀬涼子さん？」
「そうです、えーっと名前、青島真さん」
「ワタシは、西園寺恵子、会社じゃ青島の先輩で一す」
「社長から聞いてるんですがインターネットをこの店でやもって本当ですか」
「本当です。今、社長と話しまして明日秋葉原に行くことになりました、明日パソコン買って
きますよ」
「ほんとに一、アタシも行きたい。秋葉原。
「いいですよ、店は大丈夫ですか？」
「おおおお、そんならワタシも行く」と西
「店は、高校生のアルバイトと熊田さんで
だから安心です」
「なるほど、それでは、一緒に行きましょ
「それじゃお待ちしております」
「じゃ、西園寺さん帰りましょう」
「ほーい、帰ろうか」
二人は会釈をして、フローラを後にした。帰
を始めた。
「青島くん、言ってどうかと思うけど、彼女は
「なんでですか？いや、まだ彼女にしたいとか、惚れてるとかそういう段階でもないんですが
、胸のときめきは抑えられないけれど」

「絵描きとしては観察眼が無いわね、キミは」

「なんで観察眼が無い、という結論になるんですか」

「彼女の手をよく見てないの？指輪してたよ、ありや結婚指輪だよ、早い。21歳で」

「えっ、結婚してるんですか、そうですか」

「うーん、性格はおっとりしてていい感じだけどね、背も高いし、顔もかなりキレイ。モデル並だけど、結婚している……」

真は恵子の観察眼に驚いたのと同時に、早瀬涼子が既婚者であることに、少なからず動揺した。21歳で結婚している、自分は彼女イナイ歴22年なのに、とも思う。彼女の顔を思い浮かべては、もしかしたら儚い片思いの恋で終わるのかもしれない予感が青鳥の胸を痛みとしてさす。二人は事務所へとテクテクと歩いていく。もう昼だ。二人とも空腹に気がつき、顔を見合わせて、同時に言った。

「なんか食べてこう」

「あ、やっぱりお腹すきましたよね」

「ご飯食べに行こう。アタシはラーメンで」

「自分は餃子定食がいいです。」

「よし、春来で食べ行きましょう」

春来とは春日部駅東口の公園通りに面したビルがある、中華料理屋のことだ。真も恵子も事務所の近くにあるので、よく通っていたが、今は帰り道で、足も無いから、久しぶりに寄ってみることにした。

「いらっしゃいませー」と春来の店員が声を掛ける。

「お久しぶりですね。」

「はいはい、久しぶりにきましたよ」と恵子が返す。

「アタシはラーメン、彼は餃子定食」

と席に着くなり注文をした。昼時、店は結構な混雑だった。

「それでね」と恵子は水を飲みながら青鳥に語りかける。

「彼女はかなりいいオンナだと思うけど、先約があるみたいだから、深入りするのは傷がつくだけかもよ」

「はいはい、いや結婚してるんだったら、まあ、あきらめる。いやあきらめる以前の話なんですけど」

「他をあたる？」

「他は今のところ考えられません。彼女みたいな、画家としての自分がひらめく存在ってそうはないですよ」

「ひらめき、そうバーブラ・ストライサンドの歌にもあるわね。スイートインスピレーションってか。ワタシの胸はすべりだすの、ソウソウそういう感じなのねえ、分かるけど」と遠い目をして恵子が語りだした。取り留めなく会話を続ける二人だが、その間にラーメンと餃子定食がや

文・イラスト

ブルー・アイリス

Email:blueiris@yahoo.co.jp, twitter: @blueiris0

デザイナー・DTPオペレーターとして、グラフィックデザイン事務所、印刷会社、制作会社などで勤務。現在個人事業主として活動中。イラストを仕事にせず、趣味として描く。

ブルー・アイリスの追憶 第一部

ってきた。二人ともとりあえずは食べることに集中した。食べ終わる頃恵子は明日のことを確認する。

「明日、一緒に行くことにしたけど、結構、今日はんな話して気まずいかな？だしたらごめんね」

「え、ああ、いや、いいですよ、人生いろいろあると思いますよね。彼女と出会ったのも偶然だけど、出会うことで自分のココロに広がりが出てきたようにも思うんですよね。彼女が結婚していても、していなくても、関係ない。彼女を見ていると幸せな気持ちになるのですよ」

「おー、大人なコトバだね。アタシもシンメルから脱却するべきかな。一人身も飽きたわけ。まあいいか、この話は。話題変えて明日フローアの社長とパソコン買うんでしょ、まさかマック買わせる気じゃないよね。デザイナーとしてはマックじゃないとダメだけど、ウィンドウズでいいんじゃないの？」

「ええ、ウィンドウズでいいんじゃないかと。使ってるし、自分たちみたいにDTPやってるって言うのは実はそんなにパイが大きいわけではないですからね。ウィンドウズだとネットやる分には十分ですから。それにウィンドウズDTPもソフトも揃ってるから、以前みたいにどうしてもマックってわけでもないのが実情ですよ」

「秋葉原か。墨田さんと去年行ったきりだわね。去年、キーボードか壊れたので、買い替えに行ったきり。アタシはオタクじゃないから、あんまり興味ないのよね。原宿・青山とか代官山が好きだけどねえ。マコトくんは代官山行ったことないでしょ」

「代官山は、浪人やってた頃渋谷から迷い込むように行ったことがありますよ。なかなか落ち着いたいい街なんじゃないですか」

「そうかーいったことあるのか」

「原宿も青山も絵の個展見に行って、それで素通りしたことはありますが、あまり面白いこと
ってなかったです」

「ふーん、自宅にこもって絵ばかり描いてるオタクちゃんではないわけね、わかったわ。明日秋葉原の案内、楽しみにしているわよ」

「まあ何とかなるでしょう。それにしても午後は今日は、ヒマですね。」

「ヒマだわよね。でもウチだけじゃないけど、景気はよくないからね」

「そうだな、自分絵描きとしての名刺作ってみようかと思うんですが」

「画家としての名刺ね。イラストレーター目指してたんじゃなかったっけ」

「えー、まあそうなんですけど、ブログのURLやTwitterのIDやら携帯の番号、教えるのめんどくさいから、名刺にして渡すと手っ取り早いかなって思っただんです。」

「じゃ、午後は名刺のデザインでもやってねば、ワタシはどうしようかな」

「何か仕事あるか、墨田さんに聞いてみま

「うん、それじゃ行きましょうか」

二人は店を出て、ワンダースケープへ戻った。

「ただいま戻りました」

追憶第一部

文
イラスト
ブリ
アリス

使
い
フ

文
イ
ツ
ス

ト
ブルーアイリ

はサイナ出ロ出Pをレら夕高校を卒業後3年の後専門学校を卒業後は、がザ鬼ノ事務所の印刷会社の制作など職を転々今とするが現在個人事業ブルーマイリヲを軌道に乗せべく、日雇い派遣の合機を襲って構築中。はとわね」

わね。去年、あんまりしたことない込むように

で素通りし

るオタクち

午後は今日ど、景気はてみようか

指とるが現在個人事業ブルーマイリスナUR日雇い派遣の合機を襲って構築中。

「どうだった。ネット関連の話はしたか？あせも社社長に頼まれてるわけだけど、オマエに任せたからな。今日は仕事のことにやること無いかな。上野に行き営業してくる」

「ああ、そうですか。じゃあ今日は個人の名刺を作って定時で土からしてもらいます」

「名刺、個人のか。まあ確かにオマエはこの会社の枠で収まらないからな、やってみるといいよ」

「ていうか。女の子に電話番号や携帯のメールアドレス教えるのめんどくさいんですよ」

「なるほどな。まあいいよプリンター使って」

「社長、青島君の彼女、見てきましたよ」と恵子が話に入ってくる。

「お、そうか、青島も彼女いない歴22年に幕をとじるか？もうそろそろオンナの話が出てもいい頃だとは思ってたけどな」

「すごい美人で背が高くて、性格はおっとりしてて、かなり上質でしたよ。青島君にはもったいないです」

「そうなのか、よかったな」

「でも結婚してるかもしれないので、その辺がわかんないんですけど」

「おいおい、人妻かよ、青島、アクロバティック過ぎるぜ」

「イエ、あの一まだ彼女にするとか、しないとか、そういうんじゃないんですけど、話すと胸がドキドキして、幸せな気持ちになるのです」

「油絵とパソコンが趣味の青島にはいい薬になるかなとは思って、まあがんばれ。それじゃ、上野に営業に行き営業に来る。またエロ本な。またま仕事あるか聞いてくるから。それで新橋で一杯やってきて直帰するから、あと頼むな」

「はい分かりました」

墨田は鞆にポートフォリオを突っ込むと、事務所を出て行った。上野のエロ本系出版社に飛び込み営業にいくのだ。かなりの数の出版社に顔が聞き、アポイントメントがなくても編集部遊びに行ける程度に業界の顔だった。

「さて名刺作ります。10枚位でいいかな。さ。明日涼子さんに渡します」

「ふーん、結婚してても渡すのか、不倫？いきなりやる訳ね。まあ温かく見守ってみます」

「はい、いや、不倫とかそういうのとか。自分はこの胸の高鳴りの命じるままに動くんです。もっと彼女に近づきたい、そういう気持ちです」

「ふーん、まあいいや、どうなるか、見もの。アタシは何しよう。まだ注文来てないけど、来月分のエロ本のカットでもラフ起こしておく。明日はゆっくり寝てられないわけだしね。秋葉原行くから」

「名刺作ります」

そういうと真はマックのイラストレーターを立ち上げ、手早く、名刺のデータを作っていく。入れる要素は名前、ブログのURL、ツイッターのID、携帯のメールアドレス、携帯番号だ。デザイン性は無くてもよかった、もちろん会社の名刺もあるし、暫定的な10枚を作ればいいと青島は思った。イラストレーターとして自立する時が来るかもしれないと思いながら、名刺のデー

タを作ったが、この名刺が後で真を悩ませる結果になることは、今の真には思い浮かばなかった。そこにあったのは、名刺を作って涼子に渡す、という思いつきを形にする喜びで一杯だったからだ。

そうこうしてるうちに時間は過ぎ、定時になったので二人は事務所を閉めて、今日は飲まずに帰った。

題名 仕事の発展があったよ 4月16日

<今日は花屋へカンプの提出をしてきた。気になるあの人は、変わらずに美しかった。仕事では新機軸の展開があった。花屋にパソコンやネット回線の導入のお手伝いをするようになった。ネットは詳しいけれど、実際、人の環境の世話をすることは初めてだ。明日秋葉原へ花屋の社長と彼女と同僚でパソコンを買いに行くことにした。それより気になるのは、彼女が結婚してるんじゃないかってこと。自分は気がつかないけど、どうも結婚指輪をしているらしい、ので明日それとなく確認してみようと思う。もし結婚してたらこの気持ちのやり場に困る。でも仕事ではこれからしばらくは顔をあわせることになる。あぁ、なんだか切ない今日この頃だ。>

真と恵子は約束の通り10時にフローラを訪ねた。花屋は開店していて、お客はいなかった。奥で熊田とアルバイトらしき若い女性がオケに水を取って、奥の店の花の整理をしていた。

「おはようございます」

「よう、来たな。涼子、準備は良いか？行く」

「はい。分かりました」

4人はフローラを出発すると、テクテクと春日部駅西口を目指す。500メートルと離れて ない距離だから大した時間は掛からなかった。歩きながら社長は真に話しかける。

「今日は20万円用意した、それで買えるよな」

「はい、大丈夫です。昨日の夜にネットで調べして、NECの一体型が15万円位なんでそれで。あと回線はKDDIのauひかりにしようと思います。電話番号控えてあるんで、秋葉原から戻ったら、フローラから電話入れて、回線引きます。1Gbyteの高速回線ですよ、動画もばっちりですよ」

「ふんふん、動画か、青年会議所で聞いたんだけど、新しくテレビ見たいに見れるサービスがあるそうじゃないか」

「ユーストリームのことですか。そうですね自分の春日部のツイッター仲間がやってます。といっても視聴者は少ないですけどね。最新のネットサービスですから、まだ一般的じゃないですよ、新しいですけど」

ネットの話になると俄然張り切る真だった。ツイッターで春日部周辺の付き合いが広がり、二週に一度、ミーティングがあつたり、ユーストリームでの放送の話も来ている。真も先端のネット事情に付いていくのが精一杯だが、春日部を盛り上げようという機運には乗ってみたかった。

「あの、インターネット詳しいんですか？携帯電話はどうですか？」と涼子が問いかける。

「携帯電話はそんなに詳しくないんだけど、iPhoneっていうの使ってますよ」

「iPhoneですか。テレビでコマーシャルやってますね。いいんですか？それ」

「いいか、どうか。ただ最新の携帯電話であることと、結構新し物好きなんですよ」

「まあ青島君はオタク趣味全開だからなあ。携帯電話なんて話せてメールでできればいいのよ」と今まで黙りこんでいた恵子が口をだす。

「そうですね、話せてメールでできればいいですね、私、親が急に厳しくて今まで携帯電話を持ったことが無いんです。それで、仕事始めてから親と離れたので携帯電話持ちたいんですよ」そこまで話して、春日部駅に着いた。

「おっと切符買わないとね。早瀬さん携帯の切符は後でゆっくりしましょう。iPhoneは良いですよ」

4人は切符を買い、秋葉原へ向かう。東武伊勢崎線の急行で北千住まで行き、そこで日比谷線に乗り換える。電車の中では4人は取り留めない世間話をしながら電車に揺られて行った。秋葉原に到着すると、フローラの二人は新鮮な感動で驚きの声を上げる

「ほー、ココが秋葉原か、随分昔に来たことはあるけれど、随分変わったなあ」

「ウタシは初めて。おいしそうな店の看板が一杯ありますね」

「まあココが秋葉原です。でも買い物は、ポイントがもらえる駅前の量販店にしましょう。もちろん興味があるなら秋葉原の奥もご案内しますけど」

「まずはパソコン買ってからだな、駅前にあるのか便利だな」

「ココで大抵の買い物は出来ますよ。ポイントも一割付いてお得なんです。自分もココが出来てからあんまり秋葉原を探検しなくなりましたね」

「ふむ、まずはパソコンを買おう」

「それではご案内します」

「大丈夫なの？まあ調べたっていうなら、それでいいけど」と恵子がつっかかる。

「大丈夫！社長コレです。この一体型がフローラにはベストです！」と真は量販店の一階のパソコン売り場で案内する。前夜ネットで調べて、通販や他の販売チャンネルも検討したが、結局量販店の国産メーカーを推奨することに決めたのだった。

「ふむふむ、なるほどな、テレビも映るのか、このほうがいいか、よし買おう」

「すみませーん、これくださーい」と真は店員を呼びつける。程なくして、出来上がった荷物を手に早瀬社長はご満悦の様子だった。4人は量販店を出るともう昼だった。

「昼だな、メシ食っていこう、青島君、どこか良い店知らないか」

「いいか、どうかは分からないけど、万世でスーなんかいいんじゃないですか」

「万世か。春日部の16号沿いにもあるな、あの本店か」

「そうです、そうです。万世橋を渡ってすぐ見晴らしも良いですし、まあまあ美味しいですよ」

「それじゃそうしよう。涼子はそれでいいかな、

「はい、いいですよ」

「恵子さんも肉で構わないですか？」

「アタシは腹に入ればなんでもいいのよ」

4人は駅の自由通路を抜け、ラジオ会館を通り抜け万世橋を渡り、万世の3階にたどり着いた。席についてみなサーロインステーキセットを注文した。今日は早瀬社長のおごりだった。

「ふう、買うもの買ったし、店に帰っていじるのが楽しみだよ青島君」

「そうですか、自分もはじめてパソコン触った時は楽しかったですよ」

「あの一ワタシ、パソコンは高校の授業でちょっと習ったくらいで、よくわかんないです」

「あら、そうなんですネ。ワタシたちデザイナーはもうマックなしじゃ仕事出来ないの、体の一部のようになっていますよ」と恵子は反応した。

「青島さん、こんどは携帯電話の買い物に付き合ってくださいね」と涼子は気楽な感じで約束を取り付けた。

「はい、いいですよ」

「ああ、涼子にはツイッター担当になってもらうから、携帯電話でツイッターやってもらおうと思ってるんだよ。社命で携帯電話持つことに決定なんだよね」

「あの、早瀬さんて年齢いくつなんですか。いろいろな人と出会ってきたけど、アナタほど謎めいて大人っぽい人って初めてなの」
涼子は真と共有していた涼子に対する疑問を問いかけた。そうすると涼子と早瀬社長は顔を見合わせ、少しクスリと笑いながら、涼子が答えた。

「21歳です」

「は？21歳ですか、随分落ち着いていらっしゃるね」

「はあ、でもワタシはワタシなんですけどね、人に驚かれます、でも21歳なんです」

「イエ、とても見えない、21歳には」と真も切ったように言葉を出していった。

「あの一自分にはとても大事なことなんです」
結婚はされているんですか？イエ、西園寺さんが結婚指輪してるっていうから、どうなのかなって思ってます」

涼子と早瀬社長は顔を見合わせながら今度は少し、うなずいたようにうなずいた。うなずいた後に涼子は少し気を張りながら凜として答えた

「結婚はしています、と言うかしていました」

「えー、やっぱり結婚してるんですかあ。なんだあ、そうだったんだ」と真は感嘆した。

「青島君、正確には結婚してたんだよね。指輪もしている。でももう独身なんだよ」

「は？」と恵子と真は狐につままれたように声を出した。

「あの一未亡人なんです。ワタシ」

「未亡人って、じゃあ旦那さんは亡くなられたの？まだ若いのに、そんな人っているのねえ」

「えーっとちょっと話すと高校一年で付き合い始めて、高校卒業と同時に入籍して、結婚して半年後に主人を亡くしました」

「えええええ、随分展開が速かったですね。随分勇気がいるわよ、そんな若くに人生決めちゃ

うなんて」

「初恋の人だったんですね。他の事って考えられなかったし、将来何かしたいってココロザシも無かったですし」

「19歳だとワタシは美大浪人やってて絵ばかり描いてましたけど、そんな人生もあるんですね。ちょっとショックです」

「もう2年になる、早いなあ。説明すると、俺の父貴は北千住で早瀬生花店ってやってて、まあ店頭売りで葬式の生花出してるんだけど、その父の長男、俺の甥、急性心不全で19で死んだ。だから涼子は俺の義理の姪になるんだ。毎日葬式の生花出すのじゃ辛いだろうから春日部で引き取って、フローラで祝いの花のデザインやらせて、兄貴と合意したんだよな、早いなもう2年経つ」

「はあなるほど、それだけ苦労してるからそう思うのねえ、聞いちゃまずかったかしらゴメンネ。」

「いいんですよ、カレを亡くしてからは半年泣いて過ごしましたが、もう泣ける涙はなくなっちゃうほど泣いたので。春日部で再会することにした」

「うんっと、じゃあミンナでステーキたべましょ、社長、帰ったら早速店にパソコン置いてセットアップします。それとKDDIの方に電話入れて光回線手配するようにしますね。涼子さんの携帯電話は来週ララガーデンのソフトバンクで買いましょう、それもお付き合います」

真が会話をまとめて4人はステーキを食べた。そして日比谷線に乗り、快速電車で春日部へと帰っていった。帰りの電車の中で真は少なからず動揺していた。相手は未亡人、そんなことってあるのかい、とも思うし、自分の弱点であるところの心理的に成長していない自分を引け目にも感じた。流れゆく風景の中で、涼子の顔を見るのが切なかった。

題名 恋の相手はオトナだった 4月17日

<今日は花屋さんと秋葉原へ買い物に行った。パソコンは自分のチョイスだったけれど、社長には気に入って貰ったようだ。ランチは万世でステーキ、社長のおごりでごつつあんでした。そこでの話は自分には荷が重いような気がする。自分の恋の相手は自分より年下だけど、自分よりはるか先を行く存在だったんだ。追いつくのには何年かかるんだろう、未熟な自分を恥ずかしく思う。来週は携帯電話の購入のお付き合いだ。>

第2章 アスター（信ずる恋）の章

「涼子さん、それじゃ行きましょうか、身分証はありますか」

「はい、免許証……」

「最新のiPhone4ですからね、時代の最先端じゃないかなあ、自分も新しいの欲しいですけど、まだ分割払いが残ってて」

そういうと真と涼子はララガーデンを目指して行く。今日はかねてからの約束だった携

携帯電話の買い物に付き合う真だった。もちろん会社の命令で涼子が持つのを知っているし、それでも自分と同じiPhone仲間が出来るのは、純粋に楽しい作業だった。

「iPhone4ですか、3とかあるんですか」

「まあまあ、新しい方が性能良いですから、嫌いな、iPhone仲間が増えるのは。会社の西園寺さんはWillcomeってPHS使ってますけどね、安いからってねえ」

「ワタシも安い方が良いんですけど」

「涼子さんの場合、他にネットやったり固定電話持って無いわけだから、月々6千円は安いと思います」

「社長にはツイッター担当って言われてるのですが、何を始めたらよいのか分からないです」

「まあ、いじってる内に覚えますよ。ツイッターは最初はずぶやいても誰も見ないんですけど、フォローとフォロワーの数が増えるとコミュニケーションの頻度が上がって面白くなります。春日部はツイッターで凄い盛り上がりになってますよ。一月に二回オフ会とかありますよ」

「オフ会ってなんですか？」

「オフはオフラインの略で、ネットを離れて実際にあってみる事です」

二人はかなり大きな声でララガーデンに歩いていく。建物に入ってエスカレーターを上がればすぐにソフトバンクのショップがある。二人はいろいろと話しながら、さっとiPhone4を購入した。二人はショップの向かいのマクドナルドで軽く食べながら、今後のことを話す。

「自分もツイッターやってるんですが、春日部のくくりで話すると凄い勢いでみんな反応するんですよ、ユーストリームって言うテレビ放映やら、春日部オンラインっていうWEBとか、まあ春日部は熱いですよ」

「ユーストリームって言うテレビですか、テレビでやるんですか」

「ええ、春日部のグルメ情報とかそういうのを放送してるんです。実験放送やってたりしますよ」

「へー、フローラの宣伝にもなるかしら、」

「面白いですね、涼子さんはかなりの美人だと思います、ただ、まあまだ自分もユーストリームは使いこなしていないので、範囲はブログを読むこと、WEBの検索、パソコンでのツイッター、iPhoneでのツイッターですかね」

「ふーん、帰ったら店のパソコンとつなげてやってましたね、早速やってみましょう」

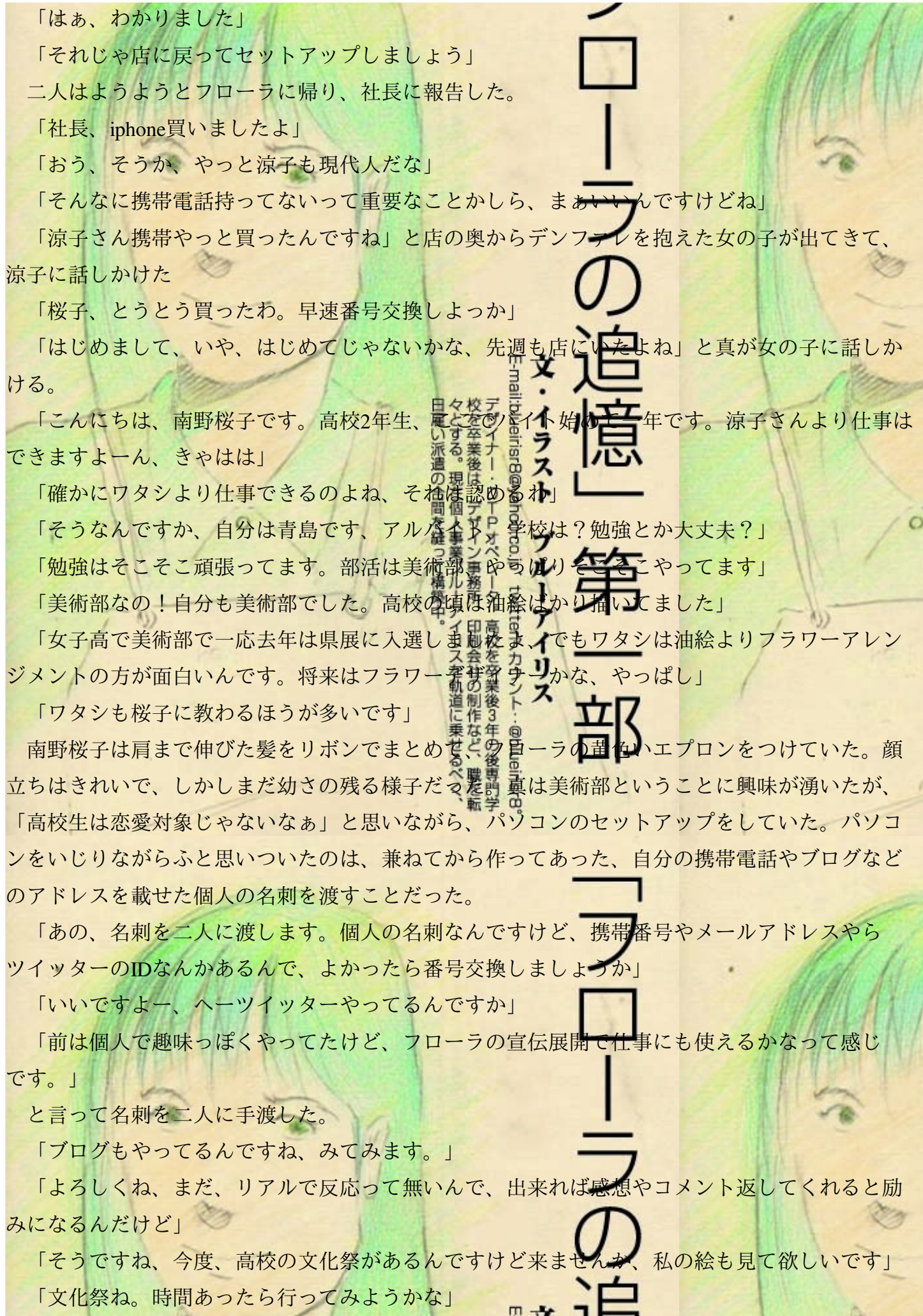
「そうですね、そうそう、IDやメールアドレスってメールするには名前が必要です。自分にいいアイデアがあるんですよ。」

「へー名前をつけるんですか、どんな名前ですか？」

「白雪姫みたいだから、snow whiteってどうですか」

「白雪姫……、なんかむずがゆくなっちゃいます」

「自分、ネーミングのセンスあるとおもったりします。いいでしょsnow white」



フローラの追憶 第一部

「はあ、わかりました」

「それじゃ店に戻ってセットアップしましょう」

二人はようようとフローラに帰り、社長に報告した。

「社長、iphone買いましたよ」

「おう、そうか、やっと涼子も現代人だな」

「そんなに携帯電話持ってないって重要なことかしら、まあいいんですけどね」

「涼子さん携帯やっと買ったんですね」と店の奥からデンフアレを抱えた女の子が出てきて、涼子に話しかけた

「桜子、とうとう買ったわ。早速番号交換しよっか」

「はじめまして、いや、はじめてじゃないかな、先週も店にいたよね」と真が女の子に話しかける。

「こんにちは、南野桜子です。高校2年生、デパートのパートで一年です。涼子さんより仕事はできますよーん、きゃはは」

「確かにワタシより仕事できるのよね、それは認められ」

「そうなんですか、自分は青島です、アルバート学校は？勉強とか大丈夫？」

「勉強はそこそこ頑張ってます。部活は美術部やったりもしてます」

「美術部なの！自分も美術部でした。高校の頃は油絵ばかり描いてました」

「女子高で美術部で一応去年は県展に入選しましたよ、でもワタシは油絵よりフラワーアレンジメントの方が面白いんです。将来はフラワーかな、やっぱし」

「ワタシも桜子に教わるほうが多いです」

南野桜子は肩まで伸びた髪をリボンでまとめ、フローラの紺色いエプロンをつけていた。顔立ちはきれいで、しかしまだ幼さの残る様子だが、真は美術部ということに興味湧いたが、

「高校生は恋愛対象じゃないなあ」と思いながら、パソコンのセットアップをしていた。パソコンをいじりながらふと思いついたのは、兼ねてから作ってあった、自分の携帯電話やブログなどのアドレスを載せた個人の名刺を渡すことだった。

「あの、名刺を二人に渡します。個人の名刺なんですけど、携帯番号やメールアドレスやらツイッターのIDなんかあるんで、よかったら番号交換しましょうか」

「いいですよー、ハーツイッターやってるんですか」

「前は個人で趣味っぽくやってたけど、フローラの宣伝展開で仕事にも使えるかなって感じですよ。」

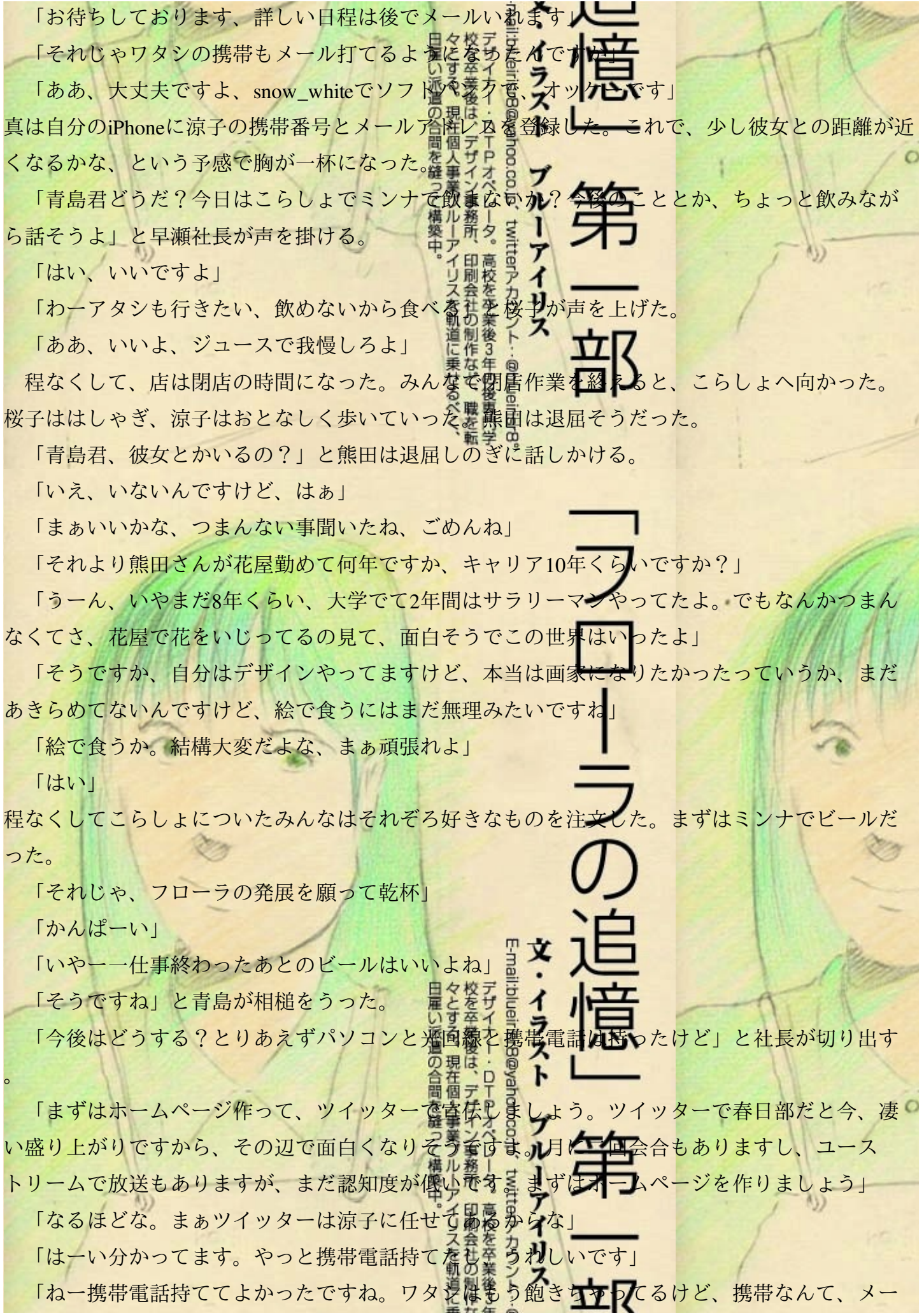
と言って名刺を二人に手渡した。

「ブログもやってるんですね、みてみます。」

「よろしくね、まだ、リアルで反応って無いんで、出来れば感想やコメント返してくれると励みになるんだけど」

「そうですね、今度、高校の文化祭があるんですけど来ませんか、私の絵も見て欲しいです」

「文化祭ね。時間あったら行ってみようかな」



「追憶」第一部

「お待ちしております、詳しい日程は後でメールいたします」

「それじゃワタシの携帯もメール打てるようにしてください」

「ああ、大丈夫ですよ、snow_whiteでソフトバンクのメールアドレスを登録した。これで、少し彼女との距離が近くなるかな、という予感で胸が一杯になった。

「青島君どうだ？今日はこらしよでミンナで飲んで帰るか？今後のこととか、ちょっと飲みながら話そうよ」と早瀬社長が声を掛ける。

「はい、いいですよ」

「わーアタシも行きたい、飲めないから食べたい」桜子が声を上げた。

「ああ、いいよ、ジュースで我慢しろよ」

程なくして、店は閉店の時間になった。みんなはこらしよへ向かった。熊田は退屈そうだった。

「青島君、彼女とかいるの？」と熊田は退屈しのぎに話しかける。

「いえ、いないんですけど、はあ」

「まあいいかな、つまない事聞いたね、ごめんね」

「それより熊田さんが花屋勤めて何年ですか、キャリア10年くらいですか？」

「うーん、いやまだ8年くらい、大学でて2年間はサラリーマンやってたよ。でもなんかつまなくてさ、花屋で花をいじってるの見て、面白そうでこの世界はいったよ」

「そうですか、自分はデザインやってますが、本当は画家になりたかったっていうか、まだあきらめてないんですけど、絵で食うにはまだ無理みたいですね」

「絵で食うか。結構大変だよな、まあ頑張れよ」

「はい」

程なくしてこらしよについたみんなはそれぞれ好きなものを注文した。まずはミンナでビールだった。

「それじゃ、フローラの発展を願って乾杯」

「かんぱーい」

「いやー仕事終わったあとのビールはいいよね」

「そうですね」と青島が相槌をうった。

「今後はどうする？とりあえずパソコンと携帯電話は持ったけど」と社長が切り出す。

「まずはホームページ作って、ツイッターで宣伝しましょう。ツイッターで春日部だと今、凄く盛り上がりですから、その辺で面白くなりそうじゃないですか。月に一回会合もありますし、ユーストリームで放送もありますが、まだ認知度が低いので、まずはホームページを作りましょう」

「なるほどな。まあツイッターは涼子に任せよう」

「はい分かってます。やっとならう」

「ねー携帯電話持ててよかったですね。ワタシはもう飽きちゃってるけど、携帯なんて、メー

ルが出来て話せばいいって思うけどお」と桜子が冷めた様子で話す。

「まあいいや、飲もう」と社長はビールをグクリと飲み干していく。宴もたけなわで真も大分飲んで酔いが回って、気分は大きくなった。ふと見ると涼子の横顔が美しい。思わず口に出てしまう言葉があった。

「涼子さん、キレイですね。自分、涼子さんのことが好きです」

涼子は飲みかけたビールをゴクリと飲み干すと、動揺していた。

「あ、あの一、ワタシ、未亡人ですよ」

「そんなこと関係ない、自分は涼子さんのことが好きなんです」

桜子がちゃちゃいれをする。

「あれれ、酔った勢いで告白するんだ、いいなー、じゃあアタシもコクっちゃう。青島さーん、ワタシと付き合ってえ。きやはは」

「はい？」真は真に受けてしまい返事に困った。返事に困ったのは涼子も同じだった。いまだ夫のことは忘れられないし、死者に囚われていては前進は無いのだけれど、涼子は泣いて暮らした半年間の心の傷はまだ癒えていなかった。

「ワタシ、新しい人ってまだ探せません、フラワーデザイナーの仕事も半人前だし、まだまだ恋愛って気分じゃないんです」

「まあそういうなよ、涼子さん、過去は踏み越えて前に進むほうがいいんじゃないかなあ」と熊田が諭す。

「ココロの傷ってあると思うんです。傷は深くワタシの中に横たわっていて、それを埋めるには時間がいると思うんです」

「わかりました、自分もそんなに焦らないで、自分は22年間彼女無しなんです、まあ焦ってもいいことなさそうですね、涼子さんには。涼子さんを見ていると幸せな気持ちになれるんです。」

「ふむふむ、まあ青島君とは長い付き合いになると思うし、ギクシャクせずに、また来週、ネット関係のことを教えてくれるようにね。」

その晩、飲み会は10時まで続いたが、桜子を遅くまで拘束するのはまずかろうという社長の判断で、こらしよで終了し2次会はなかった。真はかなり酔ったが、涼子の前で醜態は見せられないという気持ちの張りは残していたので、店の前で別れた後、ゆっくり春日部駅西口まで歩いて、タクシーで帰った。その日はブログの更新はしなかつたが、日曜日、二日酔いの頭でブログの更新をした。今までほとんど誰も見ることの無かったブログだが、今日からはフローラの面々が店でブログを見ることになるので、慎重に内容を決めて書いていった。

題名・告白しちゃったよ 4月25日

<昨日、花屋の人たちと飲んで、酔った勢いで彼女に告白してしまった。断られたけど、あきらめるって言うよりは、この恋はペースを落として、気長に成長を待つ、そういうタイプの恋になるんだろう。でもこの気持ちの高鳴りは抑えられない。抑えられないけど、彼女を想うエネルギー

一は創作の原動力になりそうだ。イメージがたくさん湧いてくる。女性はセンスをインスピレーションを与えてくれる。それはさておき、金がたまったら、高校生の頃から夢だった、オートバイの免許を取ろうと思う。午後から教習所に行って、申し込みをしてくる。ヘルメットやブーツを買わないといけない。まあ急がないさ、時間は沢山あることだし>

「そうそう、そうです。大分タッチに慣れてきましたね」と真は涼子にiPhoneでのツイッターの講習を行っていた。告白から一週間、涼子との距離は縮まらないかったが、ギクシャクしたものでもなく、涼子はオトナの女の対応をしていた。真は涼子と、同級生にたくさん女の子は居たが、真はその成熟してない女性群には囚われなかった。彼女いない歴は22年なのだったが。

<snowwhite みなさん初めまして。花の店フラワー担当のsnow_whiteがお送りします。#kasukabe>

「ってこんな感じでよいですか？青島さん
「んーそうですね、とにかくフォロワーを増やそう。フォロワーが増えれば、コミュニケーションの濃度が上がって面白くなります」

<sakurako_m はーい、snowさん、やっとツイッターデビューですね、それより青島さんはそこに居るかしら？今日が文化祭だって言ってください！>

「あー、やべえ、今日は女子高の文化祭だっけ。」
真は慌てて自分のiPhoneを取り出して、桜子に電話をかける。電話よりメールの使用頻度が高い真だったが、緊急なので電話をかけた。

「ごめんなさい、今行きます。30分で行くから」
「それじゃ30分たったら門の前に立ってますから、声かけて下さいね」
「はーい」
電話を切った真は涼子に文化祭の旨を伝えて、店の自転車を借りることにした。自転車なら15分でいける距離だった。

「あらあら、それじゃ行ってらっしゃい。ワタシはもう少しツイッターで遊んで見ることにします」

「よろしくお願いします。南野君の油絵見たら帰ってきますので」
「わかりました」

そう会話を閉じると真は自転車に乗って西口のバス停の角を曲がって地下通路を通って東口に出た。高校はそこから少しある。快調に自転車を転がして、真は、好奇心で一杯だった。男子校だった真は女子高というのは初めてで、縁の無いものかなあと思っていたのだった。国道4号

を渡り、交差点から800メートルのところに女子高があった。門の前で桜子が腕組みしながら、制服でつつたっていた。

「青島さん、やっときたかあ」

「ごめんねー、ツイッターの授業に夢中になっ

「いいですから、自転車は自転車置き場に置いてください。喫茶店もありません。これは文化祭のパンフ。美術部だけじゃなくいろいろな見てってください。喫茶店もありません」

「はい、しかし自分あれですよ、女子高は初めてで、なんか興奮します」

「さーワタシはそんなに変わったことも無く女学生やってますけどね」

真は桜子に連れられるままに玄関で靴を脱ぎスリッパに履き替えた。美術部は玄関のある2階にあるそうで、今時の女子高生はどんな絵を描くのかに関心がある真は、勇んで美術室に入っていた。美術室に入ると、自分には慣れた油絵の具の匂いや石膏や粘土の匂いなど、懐かしい香りで真は嬉しかった。

「はい、アタシの油絵、F30号で一す、去年県展の入選作です」

と言われて、真はその絵を見た。上手い！上手すぎる、と真は思った。自分の高校生の頃の作風と記憶の中で比較して、真は驚いた。その絵は女性と花で構成されていて、その描写力は他の美術部のメンバーの作品と比べると、遥かに高いレベルでまとまっていた。17歳でこれだけ描けるのは天才じゃないか、と真は驚いた。思わず声にでる。

「上手い、これだけ描ければ、芸大も遠くないじゃないか」

「えへへ、上手いでしょ、エヘン。種明かしするとアタシの父は兼業画家なの。子供頃から絵筆握ってて、油絵は飽きるほど描きました。でもワタシ芸大に行く気はあまり無いです。就職も難しいみたいだし、学芸員なんかになってみたいって思ってるけど、このままフローラに就職してフラワーデザイナーになってもいいかなって思ってる。はい、ワタシの絵についてはこの位にして、美術部のミンナの絵も見てね、その後はお茶屋でお茶しましょう」

「なんか、自分、ショック百万倍なんだけど、真は橘子の才能に、自分が負けていることを感じて、何か居心地の悪さを自分の中で膨らませていた。その後、真は美術部の、それなりの作品を見て、ほほえましく思った。そこにはキラキラの楽しさが伝わって、上手い下手より、若い情熱のかけらを見出して、自分の糧にしよう」と眺めていった。

やがて、一般教室の御茶屋で桜子とお茶を飲みながら、高校生活のことや、将来のことをおしやべりした。そこでやっぱり話題に出たのは、恋のこと。真は乃子に告白して桜子もそれを目撃していたわけだから、それでもやっぱり桜子はチンチンを入れてきた。

「涼子さんはむずかしーですよ。ワタシなら簡単なんですから。純粋な女子高生です
からー。ワタシを選んで、きやはは」

「うーん埼玉じゃ18歳未満に手を出したら犯罪なのだよ、その辺わかってください」

「ばれなければいいじゃないですか、親にも内緒でしておきますから、なんて」

「うーん。いややっぱり南野君は恋愛対象じゃないっすよ。ごめんね」

「あちやーふられた、ワタシ、でもあきらめません、なんて。きやはは」

桜子がホンキなのかふざけているのかも、真にはよく分からなかった、一つ言えることは図抜けた才能の持ち主がフローラで土日はアルバイトしているってことだった。ワンダースケープはイラストレーターの外注をやっているので、桜子に仕事出したら面白いんじゃないだろうか、とも思った。ともあれ、初めての女子高の見学は真には有意義なものになった。祭りの余韻に浸るまでもなく、フローラに戻って、涼子がツイッターの勉強をしているかどうか、が気になっていた。

「南野君、今日は楽しかったよ、ありがとう。今日はフローラには来ないのかな？」

「今日は最後まで居て、美術室の展示の片づけやらなにやらでフローラには行けないです。今日はお休みです。明日は出勤します。青島さんは明日もフローラで授業ですか？」

「いや、日曜日は自動二輪の免許取るんで、教習所にいきますよ」

「バイクに乗るの！カッコイイ、アタシも乗りたいっていうか、乗せてくださいってのも校則でだめか、しょほほ」

「タンデムは一年間禁止だったような気がする。高校生は乗せられません。一人で風を感じたくてのるんです。高校生の頃憧れてようやく金が貯まったので免許とるですよ。バイク買う金はまだ無いけど中古で250ccなら安く買えるから買おうって思ってます」

「ふーん、まあ頑張ってくださいねえ」

「それじゃフローラに戻ります。またね」真は自転車にまたがりフローラへ帰っていった。涼子がiPhoneを持って待ってる。でもふと、「オレは何をやっているのだろう、金にもならないのになあ」とも思ってしまった。でも、情熱が真を動かしていた。

題名 凄い才能を発見した 5月1日

＜今日は女子高の文化祭を見に行った。美術部のSさんの招待だった。Sさんの絵はずば抜けて上手かった。自分の自信がなくなるくらいに若さがある。自分の会社はイラストのエージェントもやってるわけだから、その辺で、この才能を上手い上げることは出来ないものか真剣に考える。今日はツイッターの授業は上手くいった。明日は教習所だし。自分もそろそろ公募に向けて油絵描こうか、考えるところ＞

季節は巡っていく。フローラにパソコンが導入されてから、2ヶ月が経った。7月の日差しは夏の強さに、街は陽炎のように揺らめく。

真は北春日部にある自動車教習場の玄関に立っていた。オートバイに乗りたいという気持ちは高校生の頃からあった。中学の同級生はバイク乗りたさに栃木県の高校まで通った、なんていう話も聞いている。それでも高校生の頃は油絵に夢中だったが、街を走るオートバイやコンビニの雑誌売り場のバイク雑誌を立ち読みするたびにバイクに乗りたいという願望が沸いていた。就職して一年経ち、貯金もまあまあ出来たので、バイクの免許を取ろうと決意したのは4月のはじめ、フローラとの付き合いが出来てからだった。週に一回、日曜日に教習所に通うのは真にはいい気分転換になっていた。今日も午前中から来て一回目の教習を終えて一服していたところだ。ボン

やりしていると、脇をヘルメットを持ってブーツを履いた若い女性が脇をすり抜けていく。先週も真は見かけた。

「あ、こんにちは、先週もいつらっしゃいましたよね」
「は？あ、そうですか。」と女性はちょっと驚いて返事をした。

「女性でバイクの免許とる人って珍しいと思っ
「そうですね、仕事も順調で前々からバイクに乗りたいと思って、やっと始めましたけど」
「そうですか、自分も高校生の頃から免許欲しんですが、進学や就職で後回しにしていて、やっと教習所に通い始めました」

「父親がバイク乗ってて子供の頃よく後ろに乗せてくれた影響が大きかったです。あらもう時間です、教習受けないと、ささ、行きましょ

「あー終わったら、お茶でもいかがですか」
うなんてことは真は一回もやったことが無いが、女性の容姿に引かれて、誘ってしまった。

「いいですよ、いい喫茶店知ってますから、一ヒールでも飲みましょうか。どうせヒマですからねえ」

「はい、お願いします」

そうすると二人は教習所の中に入って行った。2時間の教習を終えて二人が出てきたのはちょうど昼くらい。夏の太陽は容赦なく輝いていた。入り口で真は女性を待つ。

「お待たせしました、行きましょ

「いえ、電車で歩いてきたんで、喫茶店まで乗せてもらえますか」

「ふーん、車は持ってないんですね」

「親の車借りて乗る程度であんまり必要がないので、お金もそんなにないし」

「そうね、自己紹介すると、私は北川理子っていいます、アナタの名前は？」

「青島、青島真って言います。いい喫茶店ってどこですか？自分春日部のうまい店には興味あるって言うか、ちょっとツイッターの繋がりで、春日部のうまい店を探してるんです」

「大沼の夕暮れ楽団って喫茶店ですよ、最近出来たばかりでコーヒーが美味しいです」

「夕暮れ楽団ですか、知らないなあ」

「まあまあ、行って飲んでみれば良いですよ。美味しいですから、車はこっち」

真は駐車場に案内されて理子の車に乗った。BMWだった、その車で、若いのに高級車に乗る理子の境遇を想像した。車で国道16号に出て、線路を越えて、バイクショップののある交差点を左に曲がった。大沼公園の脇を抜け、武道館の横は喫茶店、夕暮れ楽団がある。車の中では二人は取り留めなく春日部の話をしていた。喫茶店に着くと二人はテーブルに座り、真は本日のコーヒーを、理子はキリマンジャロとケーキを頼んだ。二人の会話はギクシャクしながら、話すうちにスムーズになっていく。

「ワタシの職業はフライトアテンダント、オーストラリアです。大学卒業してすんなり希望の職に就けてラッキーです。もう一年、国内線の仕事をやってて、そろそろ国際線に移るかど

うかって感じなんで、そうなりとかなり忙しく、バイクの免許取るヒマなくなりそうだから慌てて来たって感じなんですよね」

「スチュワーデスですか。自分には知らないです。自分は春日部のワンダースケープって言うデザイン事務所でデザイナー見習いです、えーっと名刺渡します。会社のと、個人の名刺2枚.....」

そういうと真は財布から会社の名刺と個人の名刺を理子に渡した。

「はいはい、そうか一名刺2枚ですか」と理子は名刺をしげしげ眺めて言った

「あ、ブログやツイッターやってらっしゃるんですね。ふーん、アタシはブログもツイッターもやってないんですが、今度見てみます。ああ、あっとそれじゃ、アタシの携帯の番号とメールアドレス、欲しい？」

「え、番号交換ですか、いいんですか」

「いいですよー。はいプロフィール」そういうと理子は携帯電話のプロフィールを表示させて真に渡した。真はiPhoneを取り出し、アドレス帳に名前と電話番号とメールアドレスを登録した。二人の会話は続いていく。

「アタシは、今は親元で暮らしてるから、生活に困ることは無いのだけれど、国際線乗務に移動になったら、東京に出て一人暮らししないと間に合わないかもしれないのよ」

「東京に引っ越すんですか。自分も親元なんですけど、就職が春日部で決まったから、親元離れることはないけど一人暮らしはしてみたいけど、家賃払うより貯金していた方がいいかなって思います」

「青島さん、年いくつ？ワタシとそんなに違わないでしょう？」

「22歳です。北川さんは大学出て一年でことばすか、自分よりイッコ上ですね」

「まーそうゆうことになるわね、ワタシはそんなんにはあまり興味が湧かなかったけど、青島さんは別ねー」

そこまで聞いて真の直感も涼子に出会ったとき時の感触と似たものを感じていた。恋になってしまうかもしれない。真は涼子の顔を思い出しながら内心戸惑いながらコーヒーをすすった。

「ワタシは今のところ彼らしい人は居ないわ。大学の時付き合ってた人は居たけど卒業で離れちゃうと、ワタシも仕事が忙しかったし、自然消滅した感じ」

「自分はえーっと、恥ずかしながら彼女いない歴22年ですが、この春に片思いの女性は見つけたけど、どうなるか、ちょっと難しい相手なん

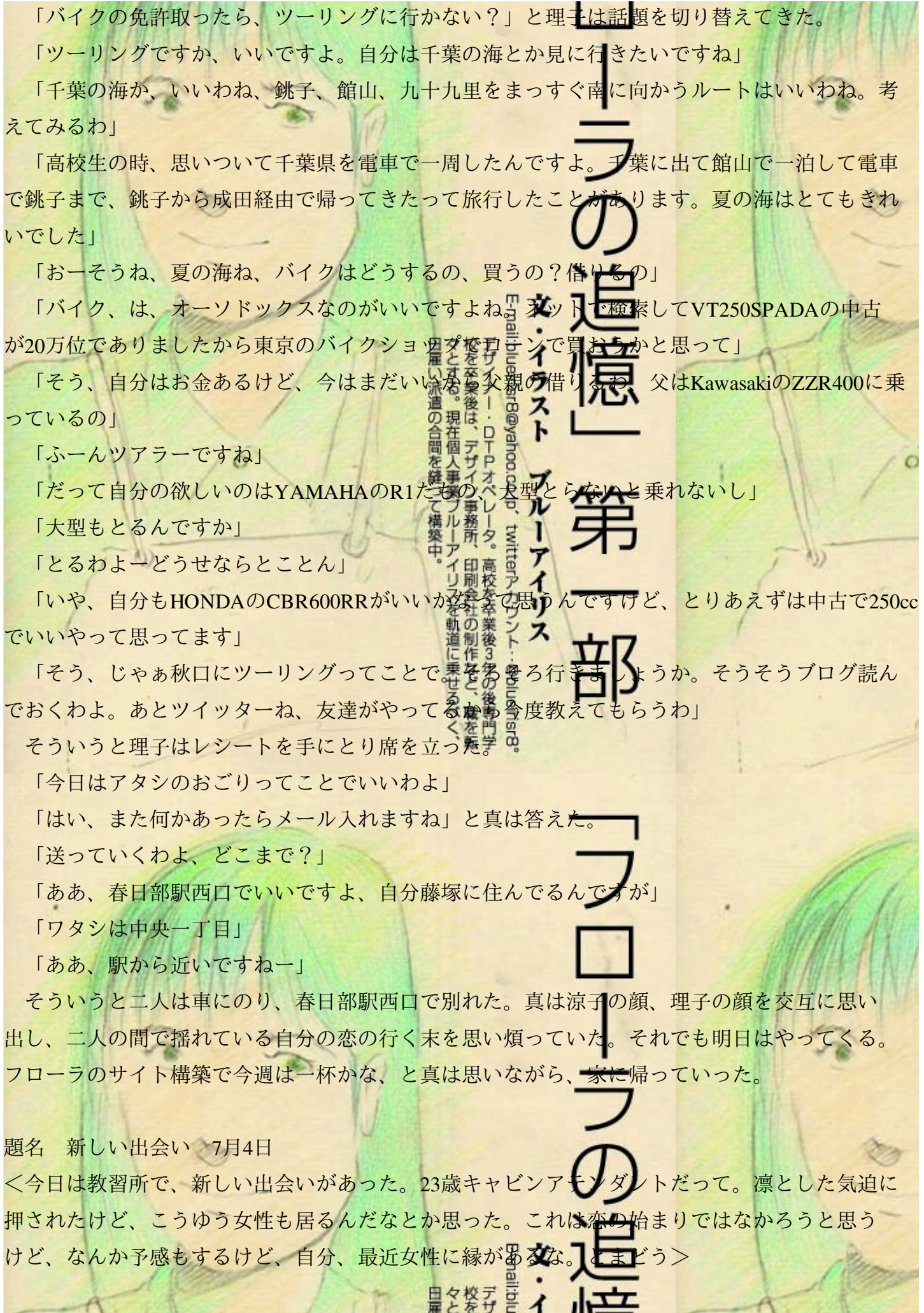
「そっかー童貞かー、まあ人それぞれだからしょうがないの、片思いで難しいって、どうい

「いえ、あの一21歳で結婚してて、未亡人っていう」

「あらら、それは大変。一筋縄ではいかなさそうね」

「そうなんですよねー、っていうか、この恋は時間が掛かる、という直感があります。人を亡くした心境っていうのは自分は分からないんですけど」

「そうね、でも結局彼女いない訳なのね」というと理子はコーヒーを飲みケーキをつまんだ。



「バイクの免許取ったら、ツーリングに行かない？」と理子は話題を切り替えてきた。

「ツーリングですか、いいですよ。自分は千葉の海とか見に行きたいですね」

「千葉の海か、いいわね、銚子、館山、九十九里をまっすぐ南に向かうルートはいいわね。考えてみるわ」

「高校生の時、思いついて千葉県を電車で一周したんですよ。千葉に出て館山で一泊して電車で銚子まで、銚子から成田経由で帰ってきたって旅行したことがあります。夏の海はとてもきれいでした」

「おーそうね、夏の海ね、バイクはどうするの、買うの？借りるの？」

「バイク、は、オーソドックスなのがいいですよね」

「そう、自分はお金あるけど、今はまだいいわ」

「ふーんツアラーですね」

「だって自分の欲しいのはYAMAHAのR1だもの、大型とらないと乗れないし」

「大型もとるんですか」

「とるわよーどうせならとことん」

「いや、自分もHONDAのCBR600RRがいいかなーと思うんですけど、とりあえずは中古で250ccでいいやって思ってます」

「そう、じゃあ秋口にツーリングってことで、そろそろ行きましょうか。そうそうブログ読んでおくわよ。あとツイッターね、友達がやってるから、一度教えてもらうわ」

「今日はアタシのおごりってことでいいわよ」

「はい、また何かあったらメール入れますね」と真は答えた。

「送っていくわよ、どこまで？」

「ああ、春日部駅西口でいいですよ、自分藤塚に住んでるんですが」

「ワタシは中央一丁目」

「ああ、駅から近いですねー」

「そう」と二人は車にのり、春日部駅西口で別れた。真は涼子の顔、理子の顔を交互に思い出し、二人の間に揺れている自分の恋の行く末を思い煩っていた。それでも明日はやってくる。フローラのサイト構築で今週は一杯かな、と真は思いながら、家に帰っていった。

題名 新しい出会い 7月4日

＜今日は教習所で、新しい出会いがあった。23歳キャビンアテンダントだって。凜とした気迫に押されたけど、こういう女性も居るんだなとか思った。これは恋の始まりではなかろうと思うけど、なんか予感もするけど、自分、最近女性に縁があるな。とまどう＞

「アンタの最近のブログ、面白くてしょうがない。席がとなりの恵子がニンマリと真を冷やかしている。突出したことは書いてないつもだが、女性は恋愛のキーワードには敏感なんだろうか、と真は女性に対して疑問を持った。

「なに？今度はオートバイで引っ掛けたの？恋多き男ね。それと高校生に手を出したら犯罪だからね。ウチから犯罪者出すわけに行かないから、その辺分かってるんでしょね」

「はいはい、南野桜子君のことですか。恋の対象というより、絵の才能がものすごいものがありますからウチのエージェントでイラストレータにできないかなって思ってるんですよね。恵子さんは彼女の絵見てないでしょう。今度ポイントオブリオ作って、出版社に持ち込みに行かせたらって思うんですけどね」

「ふーん、そんなに凄いの？」

「凄いですよ、自分は何で浪人したんだろうって思えるほど高校二年生で芸大確定ですが、本人は絵よりフラワーデザインを取るようですけど」

「ふーん、フローラのあの子ね。ポートフォリオは是非見てみたいわね。出版社に当たって、そこら辺で売り込んでついでにうちにも仕事転がってくれば面白いわね」

「そうですよ、ですから、そうだな、明日フローラに行きますから、話してきます」

「うんうん、それでフローラのWEBサイト、出来たの？」

「一応出来て、これからアップロードして、明日社長に見てもらいますよ」

「おお、出来たのか、ちょっとプレビューしてみろよ」と二人の話を仕事をしながら聞いていた墨田が話に入った。

「はい、これです」と真は出来たWEBページを見せた。

「なるほど、そつなくまとめてあるな、面白くはないが、真の実力じゃこんなものかな。おいおい商用サイトにするんだろう、真のスキルじゃ出来ないから、システム会社に構築は任せるしかないな、オレたちのやることはWEBのデザインラインの構築だけだな」

辛らつな評価を受けた真だが、WEBデザインも初めてやることなので、何をいわれてもしょうがないか、という気持ちになっていた。

「まだ、これからだな、どうだ、今日は飲むか」

「そうですね、一杯やって帰りましょうか、恵ちゃんもいくな。」

「もちろん」

ふと、真は明日フローラへ行く告知をツイッターでやっておこうと、iPhoneを取り出した。

<m_aosima @snow_white 涼子さん、明日また10時にお伺いします。ホームページが出来たのと、ツイッターのハッシュタグの使い方と、南野さんにもちょっと仕事の話なんかしたいです>

と打ち込むとしばらくして涼子から返信が入った。
 <snow_white @m_aosimaはい、わかりました。お待ちしております。ブログ見てますよ、お忙しいそうですね（笑）>

と返信が返ってきて、真は冷や汗をかいた。真にも自分のブログのURLは教えてあったので、涼子と桜子は、実際のところ毎日真のブログを見ている。真が書けば書くほど、自分のコ

コロの在りようが二人には伝わる。理子に傾きが、心を見抜かれているのかもしれない、そう思うと冷や汗が出てくる。

「ブログ……、まずいかもなあ」

と、そう思っても、毎日の習慣は止められない。内容をセーブして書いていくしか方法はないが、話して、すでに認知された言葉のやり取りが、真には面白くも感じていた。夕方6時になった、ワンダースケープの業務はあらかた終了し、ミンナ楽しみのラウンドアバウトでの一杯の時間になったわけだ。三人がまずは頼むのは中ジョッキのビールだった。乾杯の後、墨田は早速真の近況について意見する。

「さて、難しい恋愛に陥った真くんは、どうする、オレの見識だと、成長のチャンスだなんて思う。突破してみろよ」と励ます。

「はあ、涼子さんのことですか？自分恋愛したこと無いんですが、彼女は無理目なのかもとも思うし、アクロバティックな恋かなあと思うんですよね」

「恋愛のとっかかりなんて、ミンナアクロバティックだと思うけどな。二つの世界が交わる、そこに命の発展があるんだよ、まあでも21歳未亡人てのはマレなケースだけだな。オレも助言しにくい」

「時間掛かるかもねー、ワタシも温かく見守って言うか興味本位だけど、真くんのブレが面白いと感じているのね」と恵子が冷やかにボソキなんです。彼女ほどインスピレーションをくれる女性はそうそう居ないです。

「ブレ、てますか？やっぱ。ああでも涼子さんは、彼女ほどインスピレーションをくれる女性はそうそう居ないです。」

「インスピレーションね、確かに女性には、力みがない人っているよな」

「女の直感を舐めたらいけないよ」

「はあ。」

「明日、会うんだろう。メシー一緒に食うとか、してみたらいいんじゃないか。オマエの芸域も広がると思うんだが、オマエはデザイナーには必要だよな、22年彼女なしからは脱却しないと」

「うーん、焦る気持ちもありますが、なにせ相手は死人に縛られてる、死人だと無敵ですよ、変わることに無い記憶の中に永遠に生き続けるわけ、そういうの崩すのって容易じゃないと思うんですが」

「ま、たしかにな。それと教習所で知り合ったスチュワーズに転ぶのか」

「え、いや、それは多分無いと思うんですが。年がイッコ上ですし、性格が自分にはちょっとキツイかなあ。バイク仲間・バイク友達以上にはならないんじゃないでしょうか」

「オマエの顔だと結構母性本能くすぐる顔してるから、結構いい女引っ掛けられると思う」

「そうですかね、本人はまあ生まれついた顔なんで、なんとも。それにいい女は早瀬涼子さんで決まりで一す」

「おーおー言ってくれる、けど、まだなんにもないんだよね、告白してもスルーされちゃって、出会って何ヶ月？3ヶ月で、毎週会ってるのに何も進展がないのよね」

文・イラスト
ブルーアイリス
E-mail:blueiris@yahoo.co.jp, twitter: @blueiris

るサイナー、DTPオフレタ。高校を卒業後3年の後、印刷会社の制作など、職を転々とする。現在個人事業主ブルーアイリスを軌道に乗せるべく、フリーランスの業務所、印刷会社の制作など、職を転々とする。現在個人事業主ブルーアイリスを軌道に乗せるべく、フリーランスの業務所、印刷会社の制作など、職を転々とする。

コロラの追憶 第一部

「まあそんないじめないでくださいよ、恋愛初心者なんですからボクは」

「そろそろ若葉マークとらないとな」と墨田が笑う。

「はいはい、あ、それと天才の女子高生が居るんですけど、こんどポートフォリオ作ってあげようと思ってるんですが、墨田さん、見ていただけます？」

「天才ね。ブログに書いてた女子高生か。芸大目指したお前が言うなら、そうなのだろう、面白いなフローラって店は。社長も大分今の時代が分かってるみたいだしな。付き合って刺激になる店だよな」

「自分もやってみて、教えてみて発見するつもりです。今は店に並んでる花の名前覚えるのが結構楽しいです。デンファレとかかキレイです」

「まあいいさ、明日も教習か、金にはならんけど生きてくるから、やってみろ」

「はい」

三人はビールの後に、やっぱりいつもの電気屋で飲んで、ほろ酔い加減で店を出た。明日は休みだ。三人はそれぞれの予定を考えながら、それぞれの帰路についた。

題名 恋って難しいか 7月4日

＜会社の同僚は、自分のブログを面白いといっている。自分は日記として記録する、というただそれだけの姿勢なのだが、まあいいか。今日は飲んだ。飲んでるうちに、自分の顔のこと言われて、母性本能をくすぐる顔だっていう。本人は生まれつきのこの顔だからいいか悪いかあまり意識してないけれど。それよりも自分のこのココロの片隅で小さく燃えてる恋心をどうしようか、悩む。恋の相手は難しい人。そう難しいんだよなあ。＞

「そうそう、ハッシュタグつけるようになったんですね、大分上達しましたね」

「ええ、桜子さんがツイッターの参考書貸してくれたので、それ読んで勉強しましたから。フォロワー40人、フォロー20人まで来ました。この位仲間が増えると面白いですね」

とiPhoneをかざしながら、涼子は涼しい顔をしていった。iPhone購入から2ケ月経って、涼子は社長に任命されたとおりツイッター担当として、ネットで存在感を出していた。春日部にはカスカベ・コンシェルジュという春日部の情報を集めた立ち上げたばかりのサイトがあるのだが、そのサイト構築をしたカスコン（kasucon）という女性と相互フォローの関係を結び、カスカベ・コンシェルジュにフローラの情報が載ることになっていた。

「カスコンさんとフォローで連携しましたか、自分もカラオケオフに誘われているんですが、涼子さんはどうですか」

「ええ、カスコンさん主催でやるみたいですね。ワタシも行きたいです。インターネットで知り合った人と会うのは初めてです」

「ほー、おもしろそうじゃん、ワタシも行く。桜子が割って入ってきた。」

「カラオケで久しぶりに叫びたいんです」

「分かったよ。南野君はハッシュタグ・#kasukabeconでツイートしてないのかい」

「そうですね、あまり地元ネタには触れていないです。もっばら#flowerdesignとかそういうマ
イナーなものが多いです」

「オレと涼子さんはビジネス中心で#kasukabeで大分地元のフォロワーを増やしてる。かなり春日部のツイッターは盛り上がってるよ、その流れに参加してみないか」

「いいですよ、カラオケオフなんてあるんだ

「カラオケ、2年ぶりです。今までそれどころじゃなかったんで」

「まあ涼子さんは、そう、いろいろあるから、いろいろだあ」

「うふふ、まあそうですね、ところで青島さん、またオンナの人で来たんですか、もてるんですね」

「は？ああいえいえ、そういうんじゃないですけど、いえあのーバイク仲間なんですけど、秋にバイクで千葉に行く約束はしてしまいましたが」しどろもどろになる真だった。

「バイクでデートですか、ワタシともデートしてください！」と桜子も突っ込む。

「南野君の場合、あの一東京の出版社に作品持っていないか、というお誘いは出来る、つかしてください」

「はい？東京の出版社ですか？なぜに？」

「いや、キミは絵の才能あるから、イラストレーターになってみないかなあと思ってるんだ
けど」

「え、いえワタシはフローラでフラワーデザイナーになるのが志望ですけど」

「まあ花屋に勤めながらも絵は描けるでしょ、ウチで看板イラストレーターになって欲しいのだ」

「はあ」桜子はちょっとヘソが曲がったような顔をして、ダンファレの入った桶に水を入れ始めた。涼子は話を静かに聴いていたが、途中でiPhoneをいじり始めて、何気なくツイートしていた。

<white_snow @kasuconカラオケ大会の件、
みにお待ちしております>

と書いて、iPhoneを閉じて、会話に戻った。

「カラオケ大会の参加、OKしましたので。フリスビーから三人出ること、いいですね？」

「うっ、涼子さん仕事早いんですね」

「インターネット時代はスピードが命みたいですね。この2ヶ月参考書見ながらやってみましたけど、ユーストリームとか見ると、スピードが命ですね。すぐに反応しないとあっという間に置いていかれちゃいますね」

「そうですね、スピード……。あの一でもぶっちゃけ涼子さんとはスピード関係ないですね。時間がかかるような気がします」

「あはは、ワタシは当分、一人ですよ。一人が今は好きなんです。新しく恋人作る気力が湧かないです」

「うーん、まあまあ、ワタシもそんなに焦ってないです。でも自分のココロの中に、小さな炎が消えずに燃えている、そんな言い方します。失礼。」

「はい二人とも、シンミリ語ってないで、青島さんのデザインしたホームページ見せて、見せてー！」と桜子がじれたように、声高くない雰囲気壊して行く。

「あの一折角しんみりいい感じだったのに、わかいな一高校2年生は」

「いいから、パソコン！」

「分かったよ、えーつとじゃあ社長も呼んで来て、見てもらいましょう」

「社長ー！フローラのホームページ出来たってさー」と桜子が叫ぶ。

「んんーほうほう、そうか出来たか、早速見てみよう」と奥の事務所から社長も出てきた。真は、試験的にワンダースケープのサイトにアップロードしていた。見てもらって、OKなら、ドメインをとって、商用サイトとして、第一歩を踏み出す予定だ。真はURLをブラウザに打ち込んでいく。WEBページが表示された。

「社長、これです。でもまだ自分もまだまだですが、とにかくフローラのイメージを大切にしてみました。ネット通販もやりたいとの意図で、自分にはそこまではとても作れないので、付き合いのあるシステム会社にシステム構築を任せて、デザイン処理だけは私がやろうという計画です」

「ふんふん、こういう感じか」早瀬社長はマウスを軌道に導きながら見ていく。

「花の種類はたくさんあるので、その辺のイメージが弱いな。まあ、最初はこんなものかなとも思う。まあいいよ、これで行こう」

「ありがとうございます、それでは、早速ドメインとウェブホスティングを申し込みますね。flora.jpならまだ取れると思いますので、それで行きましょう」

「ふーん、青島さんホームページもデザインできるんだ、すごいねー」と桜子。

「そうそう、南野クンの絵の方、写真にとって、ポートフォリオ作って、出版社に営業に行きたいんだけど、作品はある？」

「えー、まあ絵は飽きるほど描きましたから、写真にとるんですか」

「うん、ポートフォリオって言うのはまあデザイン業界じゃ作品集って意味かな。それ持って出版社に営業に行きましょう、フラワーデザインとイラストレーションの二足のわらじでもいいじゃないか、若いんだし、やれるだけやってみよう、応援するから」

真は自分の及ばない高いレベルにある桜子の才能を出来れば形にしてあげたいという気持ちがあった。画家になることに挫折している真は、すでに高校生のレベルを超えた桜子の新しい作品を見てみたい、という好奇心ももちろんあった。

「それじゃ、店終わったら、今日、ウチに来て写真撮ってもらえますか」

「ええっと、そうだね、早いほうがいいかな。写真、デジカメは会社にあるから、ちょっと会

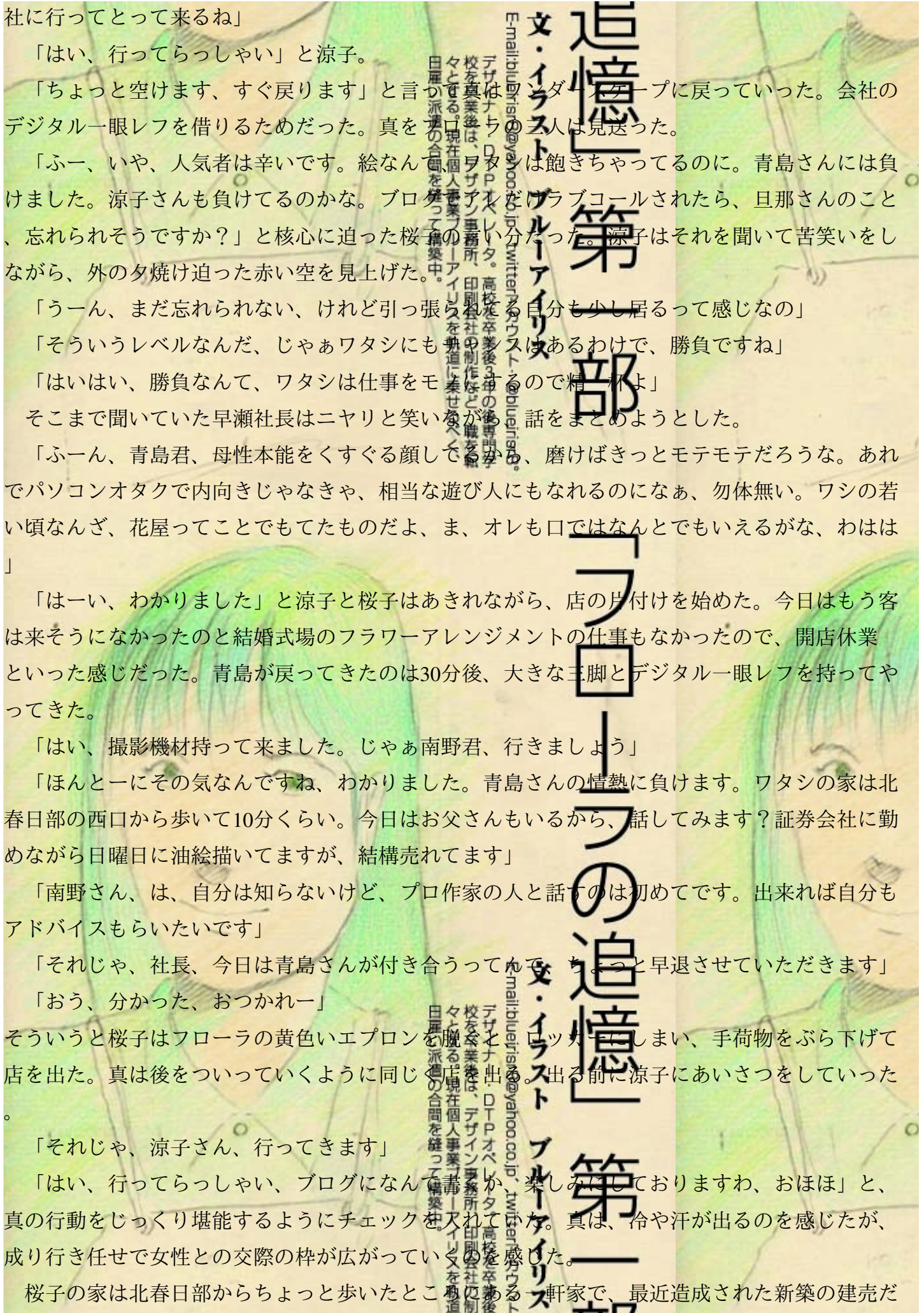
イラストレーター・デザイナー・DTPデザイナー
卒業後、フリーランスとして活動中。
現在、個人事業主として活動中。
白星の派遣の会社を離れて活動中。

イラストレーター・デザイナー・DTPデザイナー
卒業後、フリーランスとして活動中。
現在、個人事業主として活動中。
白星の派遣の会社を離れて活動中。

イラストレーター・デザイナー・DTPデザイナー
卒業後、フリーランスとして活動中。
現在、個人事業主として活動中。
白星の派遣の会社を離れて活動中。

「フローラの追憶」第一部

「フローラの追憶」第一部



社に行ってとって来るね」

「はい、行ってらっしゃい」と涼子。

「ちょっと空けます、すぐ戻ります」と言っただけで、涼子は戻っていった。会社のデジタル一眼レフを借りるためだった。真を置いて、涼子は見送った。

「ふー、いや、人気者は辛いです。絵なんかは飽きちゃってるのに。青島さんには負けました。涼子さんも負けてるのかな。ブログでラブコールされたら、旦那さんのこと、忘れられそうですか？」と核心に迫った桜子は、涼子はそれを聞いて苦笑いをしながら、外の夕焼け迫った赤い空を見上げた。

「うーん、まだ忘れられない、けれど引っぱる自分も少し居るって感じなの」

「そういうレベルなんだ、じゃあワタシにもあるわけで、勝負ですね」

「はいはい、勝負なんて、ワタシは仕事をモットーで精一杯よ」

そこまで聞いていた早瀬社長はニヤリと笑いながら、話をまとめたようにした。

「ふーん、青島君、母性本能をくすぐる顔して、磨けばきっとモテモテだろうな。あれでパソコンオタクで内向きじゃなきゃ、相当な遊び人にもなれるのになあ、勿体無い。ワシの若い頃なんざ、花屋ってことでもてたものだよ、ま、オレも口ではなんとでもいえるがな、わはは」

「はい、わかりました」と涼子と桜子はあきれながら、店の片付けを始めた。今日はもう客は来そうになかったのと結婚式場のフラワーアレンジメントの仕事もなかったので、開店休業といった感じだった。青島が戻ってきたのは30分後、大きな主脚とデジタル一眼レフを持ってやってきた。

「はい、撮影機材持って来ました。じゃあ南野君、行きましょう」

「ほんとーにその気なんですね、わかりました。青島さんの情熱に負けます。ワタシの家は北春日部の西口から歩いて10分くらい。今日はお父さんもいるから、話してみます？証券会社に勤めながら日曜日に油絵描いてますが、結構売れてます」

「南野さん、は、自分は知らないけど、プロ作家の人と話すのは初めてです。出来れば自分もアドバイスもらいたいです」

「それじゃ、社長、今日は青島さんが付き合うってんで、ちょっと早退させていただきます」

「おう、分かった、おつかれー」

そういうと桜子はフローラの黄色いエプロンを脱ぎ、手荷物をぶら下げて店を出た。真は後をついていくように同じように歩いた。

「それじゃ、涼子さん、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい、ブログに書いてもらえると嬉しいですわ、おほほ」と、真の行動をじっくり堪能するようにチェックを入れた。真は、冷や汗が出るのを感じたが、成り行き任せで女性との交際の枠が広がっていくのを感じた。

桜子の家は北春日部からちょっと歩いたところにある一軒家で、最近造成された新築の建売だ

った。真は下心は一切無く、ただ才能を世の中に送るべく、出した。きつと面白いだろう、という直感で動いていた。女の子の家に行くのも中学生の頃、久しぶりのことだった。やがて家に着くと桜子が案内する。

「はい、ここがワタシのウチで一す。まあ入って、入って、早く」

「はいはい、わかりました、おじゃまします」そういうと三脚とカメラを持って、玄関に入り、靴を脱いで上がった。

「おかあさんー、彼氏連れてきた、どう、ワタシもやるでしょー」と大きな声で桜子の母親を呼び出した。奥の台所から桜子の母が顔を出した。

「はいはい、あら、ついに桜子にも男の人できたの？ようこそいらっしゃいました桜子の母の葉子です」

真は彼氏と扱われるのが何か違和感があったのだが、桜子のいつものワルふざけだろうと、愛想笑いで対応した。

「いえ、カレシってわけじゃあないんですけど、絵の才能に一目ぼれはしていますが」

「まあまあ、どうです晩御飯これからなんですけど、一緒にいただいいていけます？」

「はい、桜子さんの絵の写真撮ったら、いただきます。あとそれと、自分も芸大目指して挫折した元画家志望なんですけど、旦那様は画家だそうで、その辺で少しお話できたら、って思うんですけど」

「ええ、主人は画家ですよ、日曜画家なんですけど、銀座で個展やったりしてます」

「青島さん、早くワタシの部屋にきてー」と桜子が階段から大きな声で真を呼び出す。

「今行きまーす」と言って階段を登って桜子の部屋に入ると、部屋に飾ってある数々油絵に驚いた。

「すごー、やっぱり凄い。合計10点はあるね。いいイーゼル使ってるな、マーベフの高級だよ、キミは」

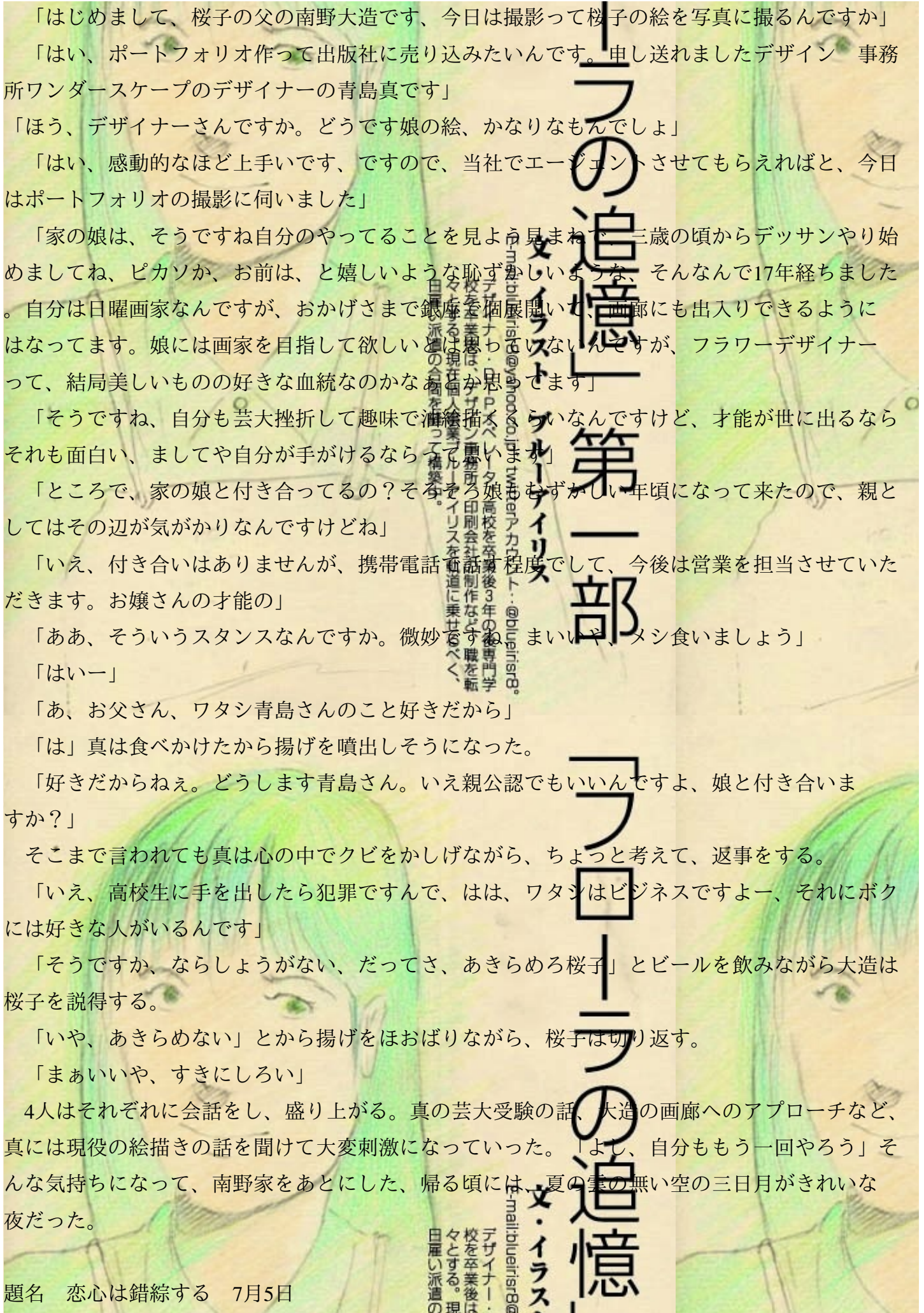
「父の指導のおかげなんです、さ、全部で10点と写真に撮っちゃいましょう」

「オーケー、まず、そこの端っこから撮ってイーゼルに掛けて、三脚をセットします」そういうと真はイーゼルの垂直に調整し、三脚を立てて、デジタル一眼レフをセットした。部屋の光量が気になったが、撮ったあとPhotoshopで調整すればいいやと思いながら、順に作品を写真に撮って行った。一通り撮影したら、桜子の机の上が気になった。油絵の具とパレット、筆が散乱してる、いかにも無頓着な芸術家の机に、自分と同類であることを、改めて確認した真だった。

「よーし、青島さん、全部撮った？終わったら、食事、晩御飯、おなかすいた」

「はい、じゃあご馳走になります」そういって二人は階段を下りてダイニングキッチンに向かった。晩御飯はから揚げ。味噌汁、お新香といたってシンプルだったが、から揚げは特製の醤油ダレが掛かってて、とてもおいしそうだった。先に桜子の父と母は食べていた。

「撮影おわりました？、是非食べてください」と葉子が声を掛ける。



「はじめまして、桜子の父の南野大造です、今日は撮影って桜子の絵を写真に撮るんですか」

「はい、ポートフォリオ作って出版社に売り込みたいんです。申し送れましたデザイン 事務所ワンダースケープのデザイナーの青島真です」

「ほう、デザイナーさんですか。どうです娘の絵、かなりなもんでしょ」

「はい、感動的なほど上手いです、ですので、当社でエージェントさせてもらえればと、今日はポートフォリオの撮影に伺いました」

「家の娘は、そうですね自分のやってることを見よう見まねで、三歳の頃からデッサンやり始めましてね、ピカソか、お前は、と嬉しいような恥ずかしいような、そんなんで17年経ちました。自分は日曜画家なんです、おかげさまで銀座を個展開いて、画廊にも出入りできるようにはなってます。娘には画家を目指して欲しいとは思ってないんですが、フラワーデザイナーって、結局美しいものの好きな血統なのかなあと思ってます」

「そうですね、自分も芸大挫折して趣味で油絵描くくらいなんですけど、才能が世に出るならそれも面白い、ましてや自分が手がけるなら」

「ところで、家の娘と付き合ってるの？そうそう娘もむずかしい年頃になって来たので、親としてはその辺が気がかりなんですけどね」

「いえ、付き合いはありませんが、携帯電話で話程度でして、今後は営業を担当させていただきます。お嬢さんの才能の」

「ああ、そういうスタンスなんですか。微妙です、ね、まいいや、メシ食いましょう」

「はいー」

「あ、お父さん、ワタシ青島さんのこと好きだから」

「は」真は食べかけたから揚げを噴出しそうになった。

「好きだからねえ。どうします青島さん。いえ親公認でもいいんですよ、娘と付き合いますか？」

そこまで言われても真は心の中でクビをかしげながら、ちょっと考えて、返事をする。

「いえ、高校生に手を出したら犯罪ですんで、はは、ワタシはビジネスですよー、それにボクには好きな人がいるんです」

「そうですか、ならしょうがない、だってさ、あきらめろ桜子」とビールを飲みながら大造は桜子を説得する。

「いや、あきらめない」とから揚げをほおぼりながら、桜子は切り返す。

「まあいいや、すきにしろい」

4人はそれぞれに会話をし、盛り上がる。真の芸大受験の話、大造の画廊へのアプローチなど、真には現役の絵描きの話を聞けて大変刺激になっていった。「よし、自分ももう一回やろう」そんな気持ちになって、南野家をあとにした、帰る頃には、夏の雲の無い空の三日月がきれいな夜だった。

く今日も彼女はそっけない仕草、でも、時間の流れは熟成何年になるんだろうか。今日は超高校級の絵の才能を写真に収めた。こちら営業して行こうと思う。イラストのエージェントも久しぶりっていうか、当事者にならぬ。でも負けないさ。今週はツイッターのオフ会もあるから、カラオケで歌いまくるぞ。

「それじゃ、これで全員集合かしら、じゃあ行きましょう」と、まとめ役のkasuconさんがリードする。ココは春日部駅西口の交番前夜7時の待ち合わせで、ツイッター仲間が7人集まった。涼子、桜子、真とあと4人。ツイッターで始めて出会う仲間だった。kasuconさんの主催するWEBページ、春日部コンメンティジェはまだ立ち上げて2ヶ月、情報量はマダマダだが、今後大いに発展するかもしれない予感皆が知っていた。桜子はワクワクしながら、カラオケ店に向かっている、涼子はいつものおとなしい様子で静かに真のとなりを歩いていた。今日も月夜で満月がキレイだった。春日部の町の喧騒はそれなりに賑わっていたけれど、真は涼子の顔を見るたびに、心臓がキュッとなるのを感じていた。さりげない会話をしようと涼子に話しかける。

「涼子さんはカラオケとかよく行くんですか？」

「え、アタシですか、そうですねー、店の人とはこらしよで飲んでその後ってあまり無くって。主人が生きてた頃はたまーに二人で行ってました、高校生の頃の話ですけど」

「そうですか、自分も会社の人とはラウンドアバウトで飲んで、飲んだきりでカラオケは無いんですよね」

「一人じゃ行けないですし、二人でもあんまり面白くないかも、こうやって大勢で行くのが楽しいですよ、カラオケ」

涼子は真と話をしていて、自分の中の何かが少しずつ崩れていく変化を感じていた、もしかしたら真を愛してしまうかもしれない、そういう予感を感じていた。涼子の内部は時を経るたびに複雑さを増していった。今日はオフ会を楽しむ、そう目標を定めて、オフ会にやってきた。

「はい、つきました」とkasuconさんが仕切。

「入りましょ」と真もあとに続く。

「7人お願いします、2時間ね」

「はい、202号室でお願いします」そういうと店員が202号室へ案内する。ミンナは談笑しながら部屋へ入って行って早速、料理、飲み物を注文し始める。

一人がカラオケのリモコンを手にコードを持ち込み歌い始める、最近の曲だ。

「うたいまーす」そういうと歌い始めた、結構早い。

真はカラオケのリストを見て、父親の影響で聞いた、昔のフォークソングを歌ってみることにした。涼子は歌うことはしなくて、にこやかに聴いている、というスタンスだった。やがて飲み物と料理が運ばれてくる。涼子はウーロン茶を飲みながら、ようやくリストを手にして、何を歌うか選び始めた。

「涼子さんは何を歌うんですか」

「えっと、どうしようかな」

「snow_whiteさんって涼子さんって言うんですか。」と初顔合わせのツイッター仲間が話しかけてきた。

「ええ、早瀬涼子っていいです。花の店フローラの宣伝担当です、ってそこまではもうご存知
 ですよ」

「えーっとそうですね、そうそうフローラのサイト見ましたよ、春日部コンシェルジェにも掲載するんですか、まだ情報量少ないですからね、発展を楽しみにしていますよ」

「どうもありがとう」

「じゃ、歌います」と真の番になって歌い始める。昔のフォークソングだ。

「あら、この曲知らないわ、でもいい歌ですわね」と涼子。

「えーっと父親の影響で昔のレコードとかで聞いてた曲です」

「へー、そうなんですか」

「南野桜子、歌います」と今までおとなしくしていた桜子が秋葉原に本拠を置くアイドルグループの最新の歌を歌い始めた。

「うーん、高校生らしい選曲だねえ」と静かに真が評価する。そうしてたら涼子が歌う番になった。涼子の選曲は3年前に流行った曲だった。やっぱり、涼子の時は2年前で止まってしまっているのかもしれない、と真は選曲を見て感ずる。愛するものを失う、という経験は真には無いものだった。挫折と言えど芸大入学をおさめたことくらいで、そのくらいなら毎日死と向き合う経験のある涼子には及ばなかった。そんな真に考えて、涼子に立ち入ることを少し遠慮している真だった。だが、距離を少しでも縮めたいとも思う真だった。

「snow_whiteさん、フローラの宣伝担当なんですよ、アタシのやってるカスコンに掲載しますか、今ならタダですよ。」とkasuconさんが話しかける

「えっと、タダなら、載せてください。社長も喜びますので」

「了解で一す、店舗情報で、アタマに持ってきますから、はーでも立ち上げたばかりだから認知度がね。#kasukabeではトップに来て、まだまだツイッターもユーストリームも発展途上って感じ。でもがんばろうねー」

「そうですね、がんばりましょう」

「青島さん、食べて！飲んでー！」と桜子がはちきれた。

「はいはい」

カラオケ大会は盛り上がり夜の10時まで皆歌い続けた。お開きになり、皆、それぞれの家路についた。フローラの三人は春日部駅西口まで一緒に歩き、そこで分かれた。雲ひとつ無い8月の夜空の満月はやはりキレイだった。月明かりに涼子の横顔を切なく見て、やっぱり好きなんだこの人のことを自分は、と思う真だった。

題名 カラオケで盛り上がり 8月7日

＜今日はツイッター仲間とカラオケオフだ。いとしのキミも、女子高生も交えて、かなり盛り

上がった。でもいとしのキミは2年間時が止まったままなんだって歌を聴きながら思った。時計の針を動かさなくてはいけないのだが、自分にはどうしたらいいのかが未だ分からない。自分には愛するものを失うという経験が無いのだ。こうしてブログに書きながら、想像する。想像するくらいしか出来ない。ボクは失って泣いたという経験もない。針の山を登るような気持ちなのだろうか。分からない。それにしても今日は満月が輝いた。夏なんだなあ>

第3章 ネリネ（また会う日を楽しみに）の章

<m_aosima 春日部東口なう。現在待ち合わせ中>

<sakurako_m @m_aosima 今日とはどんな用事なんですか>

<m_aosima 教習所で知り合った人と千葉の銚子にいます。バイクもやっと買えたよ>

<sakurako_m いってらっしゃい、お土産まってるね>

<m_aosima ちよくちよくツイートして実況します>

春日部駅東口のロータリーで真は理子が来るのを待っていた。今日は約束したツーリングの日だった。行く先は千葉県・銚子の犬吠崎を目指すことになった。理子との電話でなんとなく海が見たいという結論に達し、真も海を見るのを嫌がる理由は無かった。

約束の9時になった。理子がワインレッドのZZR400に乗ってやってきた。駅前の交番の前でバイクを止め、ヘルメットを脱いで、肩まで伸びた髪をほぐしながら、真に話しかけてきた。

「おはよう、待った？」

「おはようございます、いえそんなには待っていません」

「そう、犬吠崎、行ったこと無いけど、秋の海を眺めるのもいいものよね」

「そうですね。ああ、自分のバイク、やっと買いました、どうですVT250SPADAです。年式不明、20万円でした。」

真はフルフェアリングのレーサーレプリカも欲しかったが、その前に普通のバイクに乗っておこうと思った。インターネットで検索し、ホンダのVTシリーズに魅かれて、東京の中古バイクショップまで行き、そこで買った。タンクの色はグリーンだ。

「じゃあ、行きましょうか」

「はい、あ、その前にツイッター打ちます」

「中毒ねー、でもワタシフォロワー入れてるけど、ドキドキする時もあるわね」

<m_aosima 出発なう まずは16号で柏を目指します>

真はそう打ったあと、iPhoneをブルゾンのポケットに入れて、ヘルメットをかぶり、エンジンをスタートさせた。理子も発進の準備はととのけた。二人は軽く流しながら16号まで出て、柏を目指す。柏で国道6号線で我孫子まで行き、そこから右折して国道356号線をまっすぐ行く予定だ。真のVTはここから快調にエンジンんは回っていた。ガソリンも満タンで、準備万端だった。理子のZZRは父親から借りての搭乗だったが、その順応

性は大したもので、初めて公道を走る人間のようだった。

16号線は日曜の午前にしては緩やかに流れていて、少し緊張していた。法定速度を少しオーバーしながら、真は並んで柏の呼塚の交差点を目指す。空は雲が高く、秋の空、すがすがしかった。

やがて柏市に入り呼塚の交差点に差し掛かった。交差点は国道6号の水戸街道との交差で、ココを左に曲がって我孫子の市街入口交差点を目指す。二人とも運転を楽しんだ。理子は真見ながら、ゆっくりとアクセルを開ける。排気量の多少の差はあって、真は少々VTのトルク不足が気になったが、概ね二人のランデブーは快調だった。

我孫子の水戸街道の市街入口交差点を右に入り、国道356号線に乗った。あとは道なりに行けば銚子に出られる。真はまずは道に迷わないでよかった、と思っていた。

国道356号線は利根川に並行してはしっている道で、時折、雄大な利根川の姿を見ながら走れる。空は晴れ、水も潤う、この光景は、走ってみてよかった、と真に思わせた。

我孫子市、印西市、栄町、神崎町、香取市と抜けていく。銚子まであと少し。まだ11時30分で、途中佐原で道に迷った二人だった。

<m_aosima 佐原なう、なんだか道に迷った。ここ、分かりにくい>

<snow_white あらあら、大変、お気をつけて>

と、涼子からツイートが入った。今日、他の女と出かけている自分を涼子はどう思っているだろうか、真は不安になった。真の内面は複雑さを増していた。苦しい、恋ってこんなに苦しいものかとも思う真だった。

佐原駅前で一服することにした二人は、駅前にバイクを止め、自動販売機でジュースを買い、二人で飲んだ。汗をかいてヘルメットを脱ぐと、秋風がひんやり気持ちよかった。

「大分遠くまで来たわね、大体五分の三くらいで来たわね」

「そうですね、腹も減ったけど、銚子で何食べなすか」

「お寿司がやっぱり。銚子だものサカナ食べなす話にならないわよ」

「ああ、やっぱり。あーでもネットでチェック構案中。寿司でいい店は向こうで探さなきゃダメみたいです」

「ワタシも行き当たりばったりだから、とにかく犬吠崎に行けばなにかあるわよ」

そういうとジュースを飲み干し、ヘルメットを被った。

二人は、見失った国道356号線を探り出し、また単調なクラッシングに戻った。香取市、東庄市と抜け、銚子市に入った。真は潮風の匂いが、感覚を研ぎ澄ませながら風を感じていた。理子も始めてみる千葉の海の光景を想像し、アクセルを開けて行く。

銚子市に入った。銚子駅前を通り、一路犬吠崎を目指す。君ヶ浜という海水浴場には人はもういなかった。誰もいない海で、でも、その海のきれいさに二人はジンと来ていた。君ヶ浜を抜け、もうそこは犬吠崎の灯台が見える。到着したのだ。

「やーっと来ました」とヘルメット越しに大きな声で理子に声を掛ける真だった。

犬吠崎灯台の周囲には駐車場があり、売店や土産物屋がある。夏の盛りを過ぎて、静かなたたず

まいをしている。2人は駐車場にバイクを止め、ヘルメットを脱いだ。

<m_aosima 犬吠崎なう これから食事です>

真はツイッターに文章を放り込むと、理子と一緒に灯台に向かって歩く。みやげ物屋は2軒あったが、とりあえず海を見たかった二人だった。

「わあ、水平線、遠くに貨物船が見えるわね、すがすがしいわ、広い海を見ていると」

「そうですね、埼玉は海無し県ですからね、まあ田んぼが緑の海なんでしょうけど」

「そうね、私は毎日空を飛んでるから、いいんだけど、こうしてバイクで海を見に来るっていうのが結構目先が変わって面白いわ」

「写真とりましょうか、カメラ持ってきたんです」

「うん、記念にね。ちょっと撮ってもらいましょうかすみませーん、シャッター押して貰えませんか」

そういうと、土産物屋の店先でタバコを吸って、真の男性に声をかけて、2人並んで灯台をバックに写真を一枚撮った。

「ありがとう、ございます、ねえ海、もっと波を見たいからちょっとその階段を下りて浜に出てみない？」

「ええ、そうですね、海の匂いがいいですけど、真は素直に従った。

2人は公衆トイレの脇の階段を下りていった。波打ち際まで、降りて歩く。潮風がすがすがしい。周囲に誰も人はいない。

「海、海だわね」

「はい、海です、気持ちいいですね」

理子は海を眺めてボンヤリしている真を見て、薄笑いを浮かべて、話しかける。いたずらをしたような、そんな面持ちで真に一步近づく。

「ねえ」

「はい？」

「ブログ、さかのぼって読んだけど、好きな人がいるのね」

「えっええまあそうなんですが」

「どうゆう人なの？」

「どうって、そうですね、花の店フローラのフラワーデザイナー見習いで、ボクより一つ年下ですよ。あった瞬間、胸が痛くなったんですよ」

「ふーん」

「そうなんですが、まだ付き合ってるとは言えないっていうかいつ付き合えるかも分からない、ボクの片思いなんですけど」

「目をつぶって」と理子が優しく命令する。

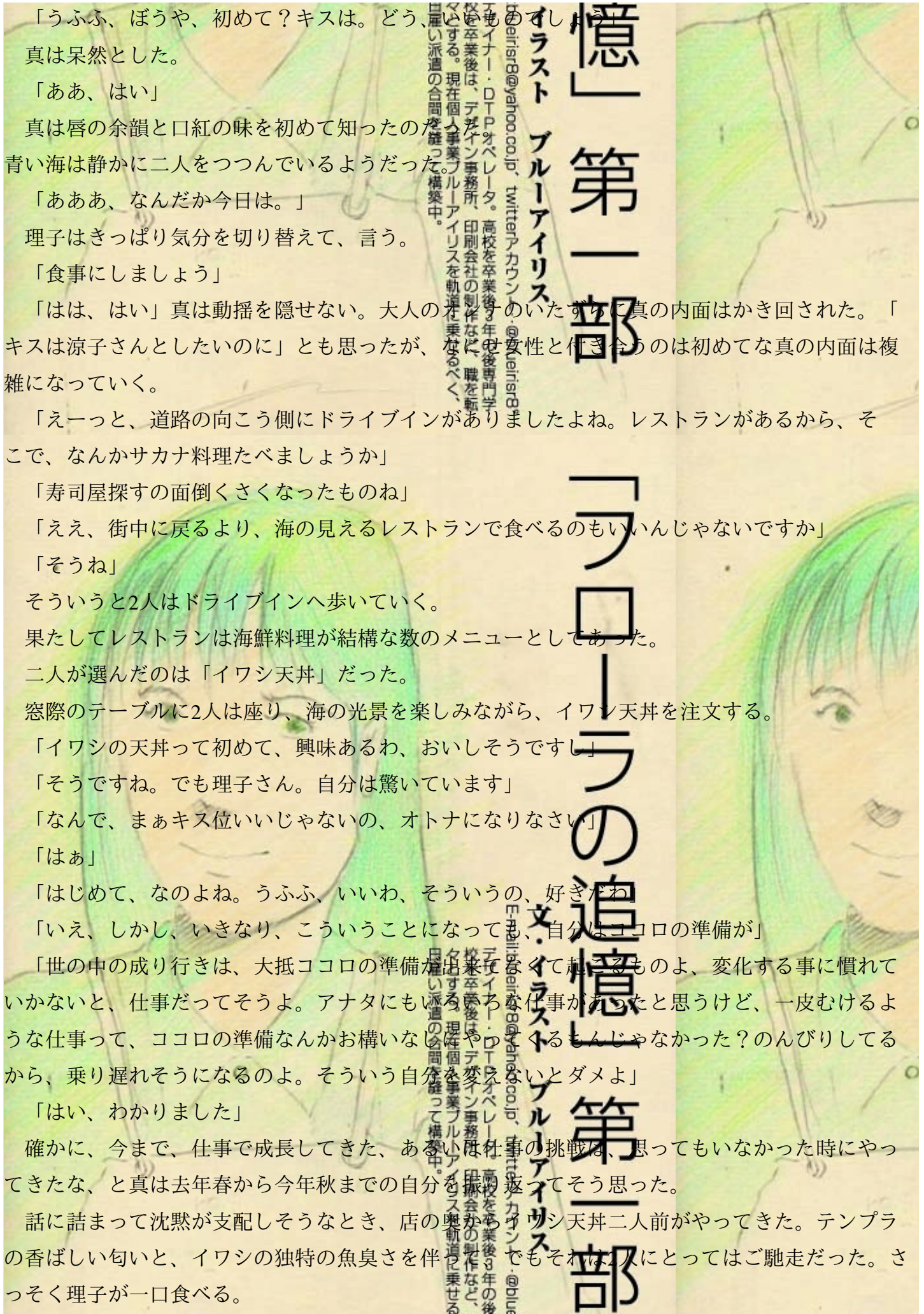
「は、何ですか」

「いいから早く」

真は目を閉じた、その瞬間に唇に温かいものを感じた。理子が直にキスをしたのだ。

イラストレーター
Email:blueirin@yahoo.co.jp, twitter:blueirin03
デザイン・DTOPイベレーター。高校を卒業後3年の後、専門学校を卒業後は、デザイン事務所に就職。印刷会社の制作など、様々な現場で活躍中。現在は個人事業主として活動中。

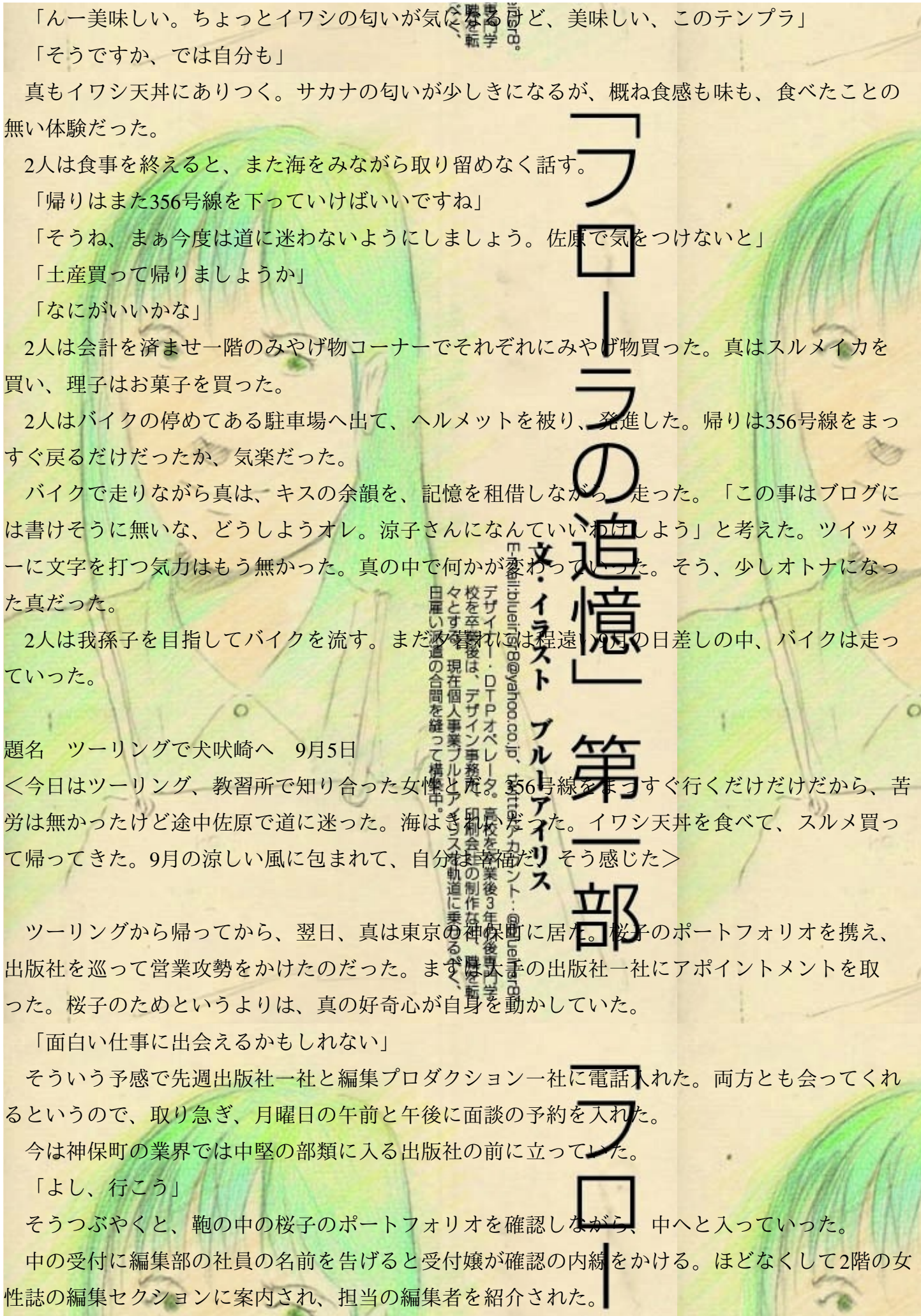
文庫



「うふふ、ぼうや、初めて？キスは。どう、
真は呆然とした。
「ああ、はい」
真は唇の余韻と口紅の味を初めて知ったの
青い海は静かに二人をつつんでいるようだった。
「あああ、なんだか今日は。」
理子はきっぱり気分を切り替えて、言う。
「食事にしましょう」
「はは、はい」真は動揺を隠せない。大人の
キスは涼子さんとしたいののに」とも思ったが、
複雑になっていく。
「えーっと、道路の向こう側にドライブインがあり
ここで、なんかサカナ料理たべましょうか」
「寿司屋探すの面倒くさくなったものね」
「ええ、街中に戻るより、海の見えるレストランで食べるのもいいんじゃないですか」
「そうね」
そういうと2人はドライブインへ歩いていく。
果たしてレストランは海鮮料理が結構な数のメニューとしてあった。
二人が選んだのは「イワシ天井」だった。
窓際のテーブルに2人は座り、海の光景を楽しみながら、イワシ天井を注文する。
「イワシの天井って初めて、興味あるわ、おいしそうだし」
「そうですね。でも理子さん。自分は驚いています」
「なんで、まあキス位いいじゃないの、オトナになりなさい」
「はあ」
「はじめて、なのよね。うふふ、いいわ、そういうの、好きがわ
「いえ、しかし、いきなり、こういうことになって
「世の中の成り行きは、大抵ココロの準備が
いかないと、仕事だってそうよ。アナタにもい
うな仕事って、ココロの準備なんかお構いな
から、乗り遅れそうになるのよ。そういう自分
「はい、わかりました」
確かに、今まで、仕事で成長してきた、ある
てきたな、と真は去年春から今年秋までの自分
話に詰まって沈黙が支配しそうなとき、店の
の香ばしい匂いと、イワシの独特の魚臭さを伴
さっそく理子が一口食べる。

「うふふ、ぼうや、初めて？キスは。どう、
真は呆然とした。
「ああ、はい」
真は唇の余韻と口紅の味を初めて知ったの
青い海は静かに二人をつつんでいるようだった。
「あああ、なんだか今日は。」
理子はきっぱり気分を切り替えて、言う。
「食事にしましょう」
「はは、はい」真は動揺を隠せない。大人の
キスは涼子さんとしたいののに」とも思ったが、
複雑になっていく。
「えーっと、道路の向こう側にドライブインがあり
ここで、なんかサカナ料理たべましょうか」
「寿司屋探すの面倒くさくなったものね」
「ええ、街中に戻るより、海の見えるレストランで食べるのもいいんじゃないですか」
「そうね」
そういうと2人はドライブインへ歩いていく。
果たしてレストランは海鮮料理が結構な数のメニューとしてあった。
二人が選んだのは「イワシ天井」だった。
窓際のテーブルに2人は座り、海の光景を楽しみながら、イワシ天井を注文する。
「イワシの天井って初めて、興味あるわ、おいしそうだし」
「そうですね。でも理子さん。自分は驚いています」
「なんで、まあキス位いいじゃないの、オトナになりなさい」
「はあ」
「はじめて、なのよね。うふふ、いいわ、そういうの、好きがわ
「いえ、しかし、いきなり、こういうことになって
「世の中の成り行きは、大抵ココロの準備が
いかないと、仕事だってそうよ。アナタにもい
うな仕事って、ココロの準備なんかお構いな
から、乗り遅れそうになるのよ。そういう自分
「はい、わかりました」
確かに、今まで、仕事で成長してきた、ある
てきたな、と真は去年春から今年秋までの自分
話に詰まって沈黙が支配しそうなとき、店の
の香ばしい匂いと、イワシの独特の魚臭さを伴
さっそく理子が一口食べる。

「うふふ、ぼうや、初めて？キスは。どう、
真は呆然とした。
「ああ、はい」
真は唇の余韻と口紅の味を初めて知ったの
青い海は静かに二人をつつんでいるようだった。
「あああ、なんだか今日は。」
理子はきっぱり気分を切り替えて、言う。
「食事にしましょう」
「はは、はい」真は動揺を隠せない。大人の
キスは涼子さんとしたいののに」とも思ったが、
複雑になっていく。
「えーっと、道路の向こう側にドライブインがあり
ここで、なんかサカナ料理たべましょうか」
「寿司屋探すの面倒くさくなったものね」
「ええ、街中に戻るより、海の見えるレストランで食べるのもいいんじゃないですか」
「そうね」
そういうと2人はドライブインへ歩いていく。
果たしてレストランは海鮮料理が結構な数のメニューとしてあった。
二人が選んだのは「イワシ天井」だった。
窓際のテーブルに2人は座り、海の光景を楽しみながら、イワシ天井を注文する。
「イワシの天井って初めて、興味あるわ、おいしそうだし」
「そうですね。でも理子さん。自分は驚いています」
「なんで、まあキス位いいじゃないの、オトナになりなさい」
「はあ」
「はじめて、なのよね。うふふ、いいわ、そういうの、好きがわ
「いえ、しかし、いきなり、こういうことになって
「世の中の成り行きは、大抵ココロの準備が
いかないと、仕事だってそうよ。アナタにもい
うな仕事って、ココロの準備なんかお構いな
から、乗り遅れそうになるのよ。そういう自分
「はい、わかりました」
確かに、今まで、仕事で成長してきた、ある
てきたな、と真は去年春から今年秋までの自分
話に詰まって沈黙が支配しそうなとき、店の
の香ばしい匂いと、イワシの独特の魚臭さを伴
さっそく理子が一口食べる。



「んー美味しい。ちょっとイワシの匂いが気になるけど、美味しい、このテンプラ」

「そうですか、では自分も」

真もイワシ天井にありつく。サカナの匂いが少しきになるが、概ね食感も味も、食べたことの無い体験だった。

2人は食事を終わると、また海をみながら取り留めなく話す。

「帰りはまた356号線を下っていけばいいですね」

「そうね、まあ今度は道に迷わないようにしましょう。佐原で気をつけないと」

「土産買って帰りましょうか」

「なにがいいかな」

2人は会計を済ませ一階のみやげ物コーナーでそれぞれにみやげ物買った。真はスルメイカを買い、理子はお菓子を買った。

2人はバイクの停めてある駐車場へ出て、ヘルメットを被り、発進した。帰りは356号線をまっすぐ戻るだけだったか、気楽だった。

バイクで走りながら真は、キスの余韻を、記憶を租借しながら走った。「この事はブログには書けそうに無いな、どうしようオレ。涼子さんになんていいわけしよう」と考えた。ツイッターに文字を打つ気力はもう無かった。真の中で何かが変わっていった。そう、少しオトナになった真だった。

2人は我孫子を目指してバイクを流す。まだ356号線は程遠い9月の日差しの中、バイクは走っていった。

E-mail:blueie108@yahoo.co.jp, twitter:blueie108

デザイナー・DTPオペレーター。高校卒業後3年、印刷会社の制作主任として勤務。現在は、デザイン事務所でフリーランスとして活動中。

日雇い労働者の仲間を結んで構想中。

「ツアリングで犬吠崎へ 9月5日」

「今日はツアリング、教習所で知り合った女性と356号線をまっすぐ行くだけだから、苦労は無かったけど途中佐原で道に迷った。海はきれいだった。イワシ天井を食べて、スルメ買って帰ってきた。9月の涼しい風に包まれて、自分は幸福だ、そう感じた」

ツアリングから帰ってから、翌日、真は東京の神保町に居た。桜子のポートフォリオを携え、出版社を巡って営業攻勢をかけたのだった。まずは大手の出版社一社にアポイントメントを取った。桜子のためというよりは、真の好奇心が自身を動かしていた。

「面白い仕事に出会えるかもしれない」

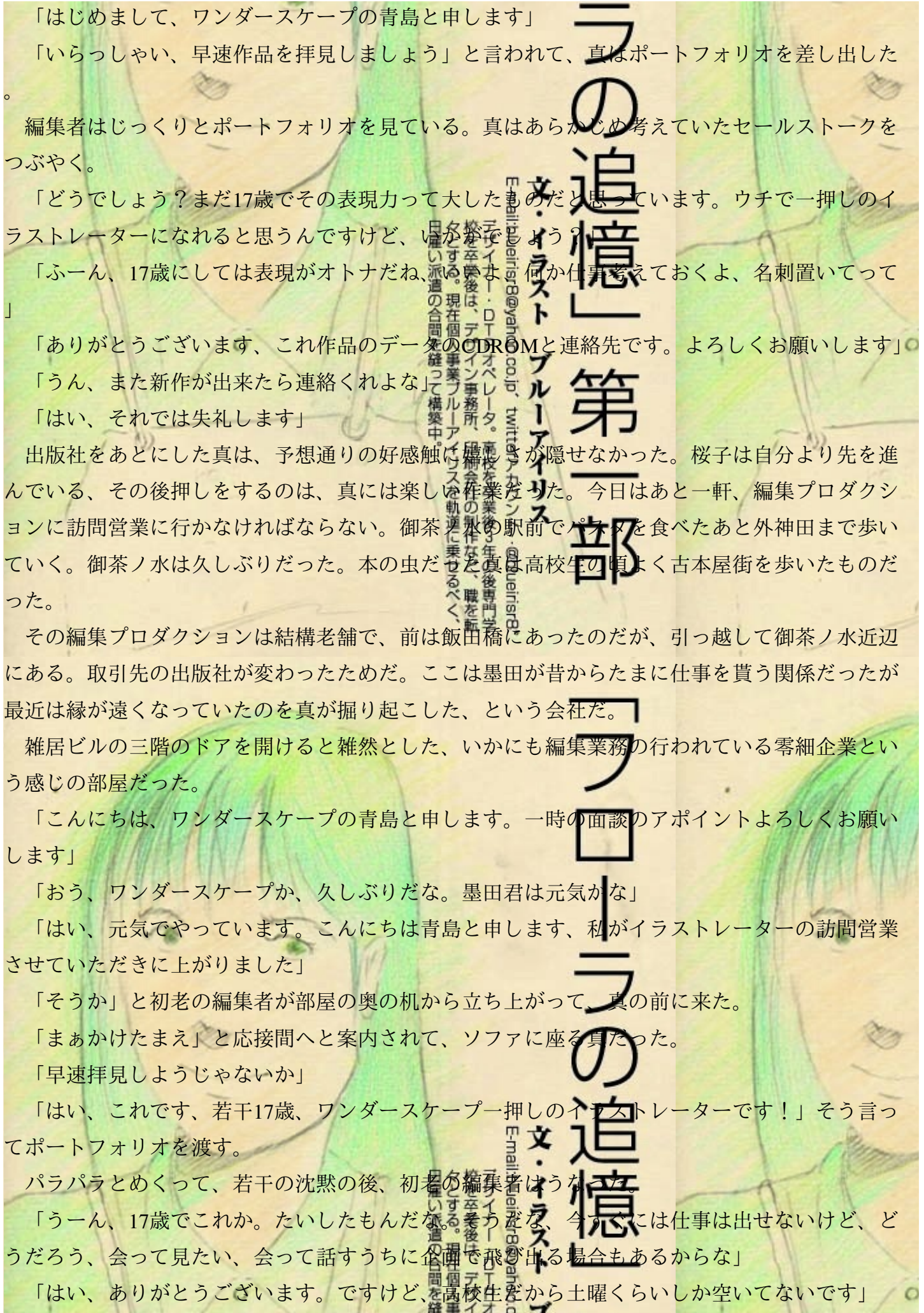
そういう予感で先週出版社一社と編集プロダクション一社に電話入れた。両方とも会ってくれるというので、取り急ぎ、月曜日の午前と午後に面談の予約を入れた。

今は神保町の業界では中堅の部類に入る出版社の前に立っていた。

「よし、行こう」

そうつぶやくと、鞆の中の桜子のポートフォリオを確認しながら、中へと入っていった。

中の受付に編集部の社員の名前を告げると受付嬢が確認の内線をかける。ほどなくして2階の女性誌の編集セクションに案内され、担当の編集者を紹介された。



「はじめまして、ワンダースケープの青島と申します」

「いらっしやい、早速作品を拝見しましょう」と言われて、真はポートフォリオを差し出した。

編集者はじっくりとポートフォリオを見ている。真はあらかじめ考えていたセールストークをつぶやく。

「どうでしょう？まだ17歳でその表現力って大したものだと思います。ウチで一押しのイラストレーターになれると思うんですけど、いかがでしょうか？」

「ふーん、17歳にしては表現がオトナだね、何か仕事考えておくよ、名刺置いてって」

「ありがとうございます、これ作品のデータのCDROMと連絡先です。よろしくお願いします」

「うん、また新作が出来たら連絡くれよな」

「はい、それでは失礼します」

出版社をあとにした真は、予想通りの好感触が隠せなかった。桜子は自分より先を進んでいる、その後押しをするのは、真には楽しい作業だった。今日はあと一軒、編集プロダクションに訪問営業に行かなければならない。御茶ノ水の駅前でパスタを食べたあと外神田まで歩いていく。御茶ノ水は久しぶりだった。本の虫だった。真は高校生の頃よく古本屋街を歩いたものだった。

その編集プロダクションは結構老舗で、前は飯田橋にあったのだが、引っ越して御茶ノ水近辺にある。取引先の出版社が変わったためだ。ここは墨田が昔からたまに仕事を貰う関係だったが最近縁が遠くなっていたのを真が掘り起こした、という会社だ。

雑居ビルの三階のドアを開けると雑然とした、いかにも編集業務の行われている零細企業という感じの部屋だった。

「こんにちは、ワンダースケープの青島と申します。一時の面談の appointments よろしくお願ひします」

「おう、ワンダースケープか、久しぶりだな。墨田君は元気かな」

「はい、元気でやっています。こんにちは青島と申します、私がイラストレーターの訪問営業させていただきに上がりました」

「そうか」と初老の編集者が部屋の奥の机から立ち上がって、真の前に来た。

「まあかけたまえ」と応接間へと案内されて、ソファに座る真だった。

「早速拝見しようじゃないか」

「はい、これです、若干17歳、ワンダースケープ一押しのイラストレーターです！」そう言ってポートフォリオを渡す。

パラパラとめくって、若干の沈黙の後、初老の編集者はうなづいた。

「うーん、17歳でこれか。たいしたものだな。今すぐには仕事は出せないけど、どうだろう、会って見たい、会って話すうちに企画で飛び出る場合もあるからな」

「はい、ありがとうございます。ですけど、高校生をから土曜くらいしか空いてないです」

「はじめて、ワンダースケープの青島と申します」

「いらっしやい、早速作品を拝見しましょう」と言われて、真はポートフォリオを差し出した。

編集者はじっくりとポートフォリオを見ている。真はあらかじめ考えていたセールストークをつぶやく。

「どうでしょう？まだ17歳でその表現力って大したものだと思います。ウチで一押しのイラストレーターになれると思うんですけど、いかがでしょうか？」

「ふーん、17歳にしては表現がオトナだね、何か仕事考えておくよ、名刺置いてって」

「ありがとうございます、これ作品のデータのCDROMと連絡先です。よろしくお願いします」

「うん、また新作が出来たら連絡くれよな」

「はい、それでは失礼します」

出版社をあとにした真は、予想通りの好感触が隠せなかった。桜子は自分より先を進んでいる、その後押しをするのは、真には楽しい作業だった。今日はあと一軒、編集プロダクションに訪問営業に行かなければならない。御茶ノ水の駅前でパスタを食べたあと外神田まで歩いていく。御茶ノ水は久しぶりだった。本の虫だった。真は高校生の頃よく古本屋街を歩いたものだった。

その編集プロダクションは結構老舗で、前は飯田橋にあったのだが、引っ越して御茶ノ水近辺にある。取引先の出版社が変わったためだ。ここは墨田が昔からたまに仕事を貰う関係だったが最近縁が遠くなっていたのを真が掘り起こした、という会社だ。

雑居ビルの三階のドアを開けると雑然とした、いかにも編集業務の行われている零細企業という感じの部屋だった。

「こんにちは、ワンダースケープの青島と申します。一時の面談の appointments よろしくお願ひします」

「おう、ワンダースケープか、久しぶりだな。墨田君は元気かな」

「はい、元気でやっています。こんにちは青島と申します、私がイラストレーターの訪問営業させていただきに上がりました」

「そうか」と初老の編集者が部屋の奥の机から立ち上がって、真の前に来た。

「まあかけたまえ」と応接間へと案内されて、ソファに座る真だった。

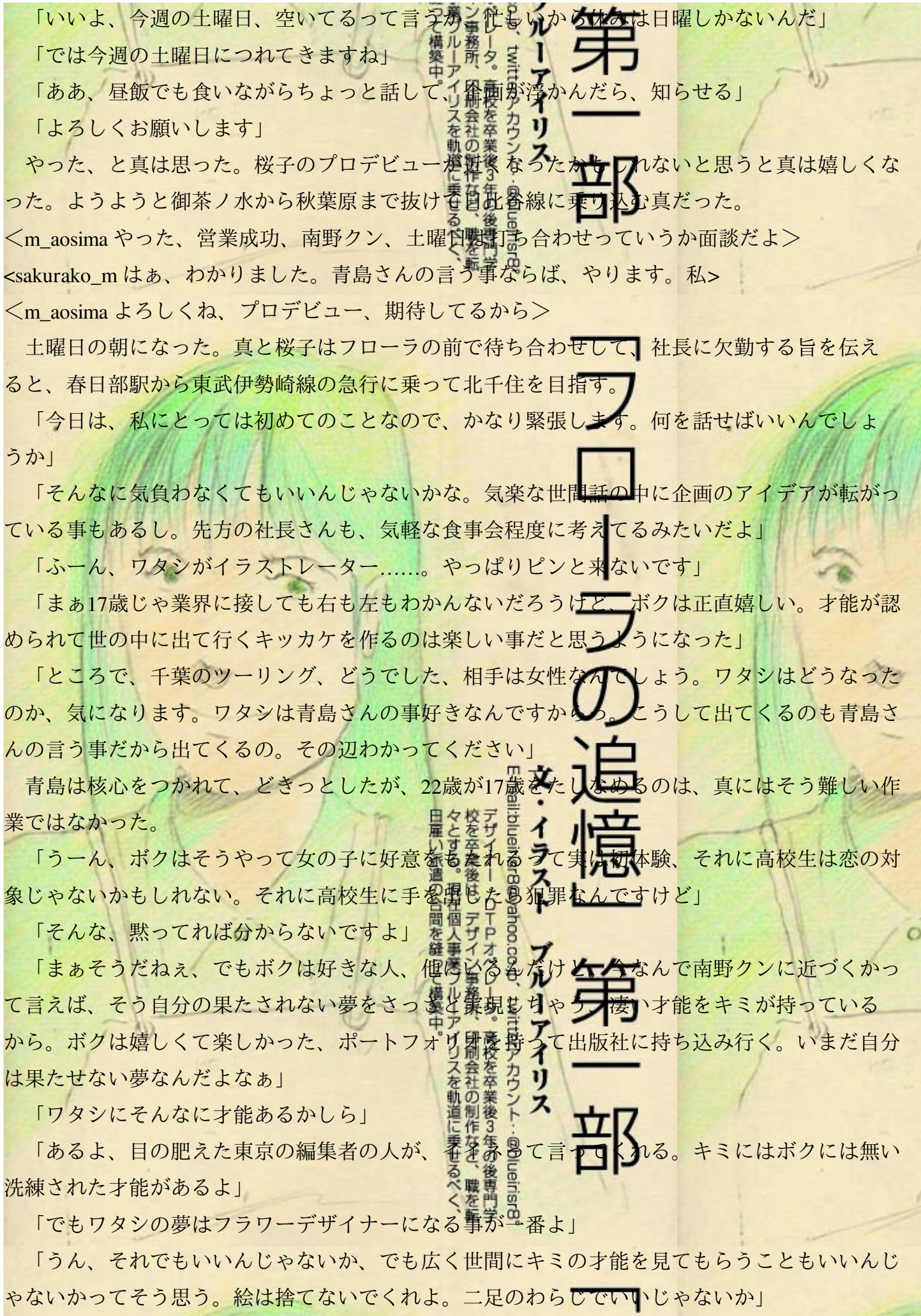
「早速拝見しようじゃないか」

「はい、これです、若干17歳、ワンダースケープ一押しのイラストレーターです！」そう言ってポートフォリオを渡す。

パラパラとめくって、若干の沈黙の後、初老の編集者はうなづいた。

「うーん、17歳でこれか。たいしたものだな。今すぐには仕事は出せないけど、どうだろう、会って見たい、会って話すうちに企画で飛び出る場合もあるからな」

「はい、ありがとうございます。ですけど、高校生をから土曜くらいしか空いてないです」



「いいよ、今週の土曜日、空いてるって言うから休みは日曜しかないんだ」

「では今週の土曜日につれてきますね」

「ああ、昼飯でも食いながらちょっと話して、お風呂も入って、寝るよ」

「よろしくお願いします」

やった、と真は思った。桜子のプロデビューが近づいたかもしれないと思うと真は嬉しくな
った。ようようと御茶ノ水から秋葉原まで抜け、各線に乗り込む真だった。

<m_aosima やった、営業成功、南野クン、土曜日、打ち合わせっていうか面談だよ>

<sakurako_m はあ、わかりました。青島さんの言う事ならば、やります。私>

<m_aosima よろしくね、プロデビュー、期待してるから>

土曜日の朝になった。真と桜子はフローラの前で待ち合わせして、社長に欠勤する旨を伝え
ると、春日部駅から東武伊勢崎線の急行に乗って北千住を目指す。

「今日は、私にとっては初めてのことなので、かなり緊張します。何を話せばいいんでしょ
うか」

「そんなに気負わなくてもいいんじゃないかな。気楽な世間話の中に企画のアイデアが転がっ
ている事もあるし。先方の社長さんも、気軽な食事会程度に考えてるみたいだよ」

「ふーん、ワタシがイラストレーター……。やっぱりピンと来ないです」

「まあ17歳じゃ業界に接しても右も左もわかんないだろうけど、ボクは正直嬉しい。才能が認
められて世の中に出て行くキッカケを作るのは楽しい事だと思うようになった」

「ところで、千葉のツーリング、どうでした、相手は女性なんでしょう。ワタシはどうなった
のか、気になります。ワタシは青島さんの事好きなんですから。こうして出てくるのも青島さ
んの言う事だから出てくるの。その辺わかってください」

青島は核心をつかれて、どきっとしたが、22歳が17歳をたしなめるのは、真にはそう難しい作
業ではなかった。

「うーん、ボクはそうやって女の子に好意を寄せられて実は初体験、それに高校生は恋の対
象じゃないかもしれない。それに高校生に手をかけるのは犯罪なんですけど」

「そんな、黙ってれば分からないですよ」

「まあそうだねえ、でもボクは好きな人、他にいないから、今なんで南野クンに近づくかっ
て言えば、そう自分の果たされない夢をさっさと集めて、凄く才能をキミが持っている
から。ボクは嬉しくて楽しかった、ポートフォリオを持って出版社に持ち込み行く。いまだ自分
は果たせない夢なんだよなあ」

「ワタシにそんなに才能あるかしら」

「あるよ、目の肥えた東京の編集者の人が、あて言ってくれる。キミにはボクには無い
洗練された才能があるよ」

「でもワタシの夢はフラワーデザイナーになる事が一番よ」

「うん、それでもいいんじゃないか、でも広く世間にキミの才能を見てもらうこともいいんじ
ゃないかってそう思う。絵は捨てないでくれよ。二足のわらじでいいじゃないか」

「二足のわらじ、絵は副業にしろってことかなあ。ワタシは子供の頃から絵描いてて、いまはそんなに面白いこととは思えないけど」

「まあそうだね、ボクの楽しみにキミを引きずりこんでいる、たとえばそうなんだけど、まあちよっと付き合ってくれよ」

「はい、それにしても、涼子さんが好きって、ワタシ負けませんよ」

「涼子さんが好きです。でも距離が縮まるのは時間が掛かるよ、きっと」

「元カレが忘れられない、からかしら。ワタシは大切な人を失った事がないから、わかんないんだけど、一緒に働いていると、時々遠くをみちやう涼子さんはかわいそうって思うの」

「うん、代わりにボクが、って思うけど、いつ涼子さんの心が開くのか、わかんないけど」

話に夢中になっていると、電車は北千住に到着した。日比谷線に乗り換えて秋葉原で乗り換え、御茶ノ水で降りることに、2人はした。

やがてこれから2人に長い付き合いになるだろう編集部のデスクに到着した。部屋に入ると社長が、机に向かって忙しそうに編集作業をやっていた。

「こんにちは、ワンダースケープの青島と南野桜子です」

「おう、来たか、まずはメシでも食おう、うちの洋食屋でいいかな」

「はい、結構です」

「あの一南野桜子です、よろしくお願いします」

「おう、絵は見たよ。いいね高校生、最近の右アリスの事情に詳しいから、メシでも食って話して話の中に企画を探すってのがオレの仕事に対するシスなんだよね、ま付き合ってくれ」

「はい、ワタシ、業界は初めてなので、結構緊張してます」

「まあそのうち慣れるよ、行こう」

そういうと三人は近所の洋食屋に向かった。歩いて5分の距離だが、かなり人気のない区画にひっそりとその洋食屋はあった。メニューはランチで、結構なボリュームでしかも安かった。

「ここだ、2人ともランチでいいよな」

「はい、ランチですね」

「まあ座ろう」

三人はテーブル席に座って、ランチを三人前頼んだ。

社長はお絞りで手を拭きながらビジネスライクに話す。

「そうだな、南野クンの絵を見て、まずはカットから入ってもらおうって思ったのが一点。あとは出版社の雑誌の企画に使えないか、考えてるんだよ」

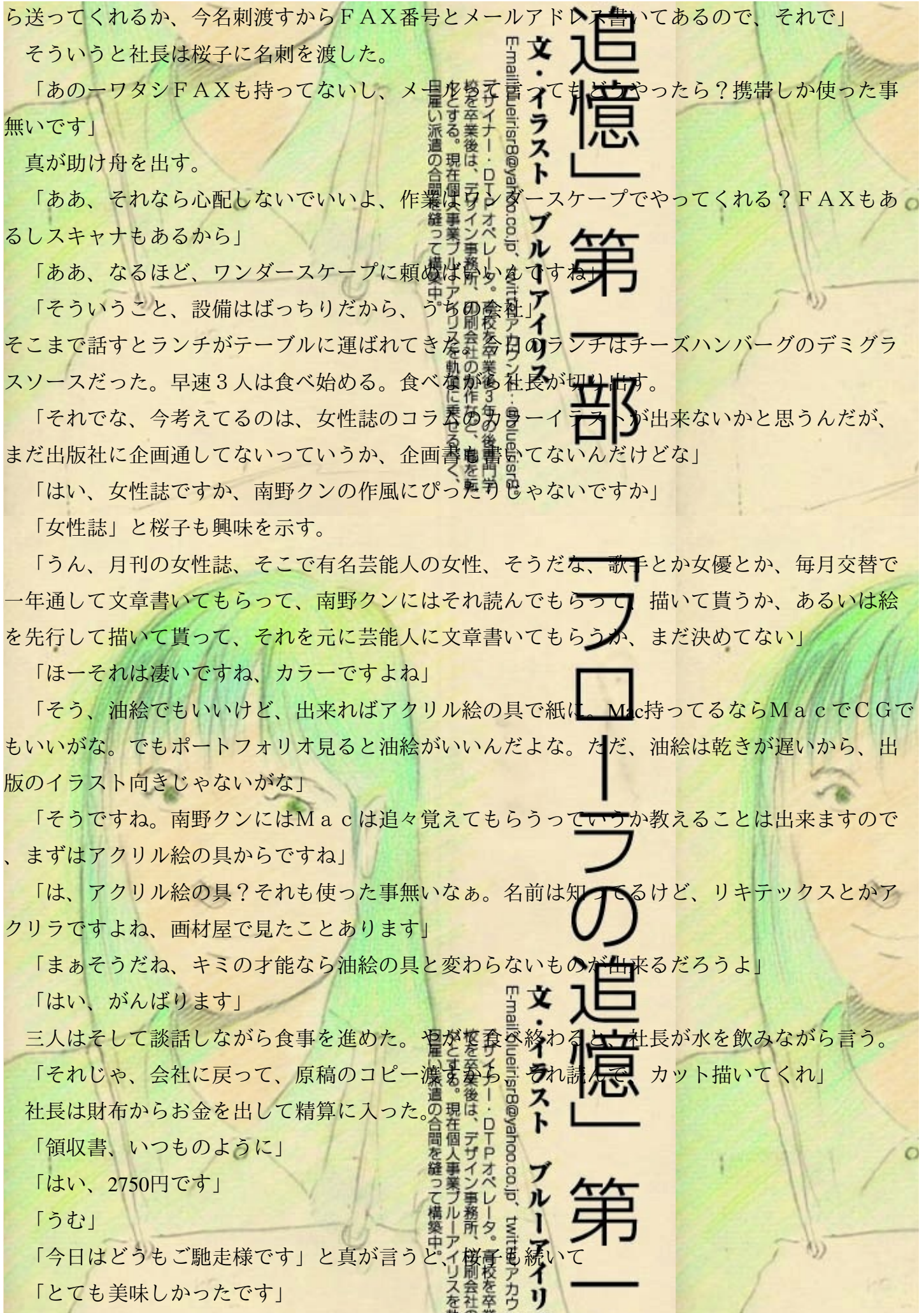
「おー、早速仕事発生ですか、カットですか、モノクロですね、南野クン描ける？」

「モノクロは描いた事があまり無いです。やっぱりマンガと同じで紙にペンでしょうか」

「そうだね、紙にペンと黒インクで書いてもらうかな、一点2000円で月に一回、雑誌のレギュラーページの一ページ目に乗せるんだけどね」

「はい」

「じゃメシ食い終わったら、原稿渡すから、まずは一点描いて、FAXでもメールでもいいか



ら送ってくれるか、今名刺渡すからFAX番号とメールアドレス書いてあるので、それで」

「あの一ワタシFAXも持ってないし、メールも送ってないよ。携帯しか使った事無いです」

「あ、それなら心配しないでいいよ、作業はデスクトップでやってくれる？FAXもあるしスキャナもあるから」

「あ、なるほど、ワンダースケープに頼めばいいですね」

「そういうこと、設備はばっちりだから、うちのランチはチーズハンバーグのデミグラスソースだった。早速3人は食べ始める。食べ終わって、社長が切り出す。

「それでな、今考えてるのは、女性誌のコラムのカラーイラストが出来ないかと思うんだが、まだ出版社に企画通してないっていうか、企画書も書いてないんだけどな」

「はい、女性誌ですか、南野クンの作風にぴったりのイラストはないですか」

「女性誌」と桜子も興味を示す。

「うん、月刊の女性誌、そこで有名芸能人の女性、そうだな、歌手とか女優とか、毎月交替で一年通して文章書いてもらって、南野クンにはそれ読んでもらって、描いて貰うか、あるいは絵を先行して描いて貰って、それを元に芸能人に文章書いてもらうか、まだ決めてない」

「ほーそれは凄いですね、カラーですよ」

「そう、油絵でもいいけど、出来ればアクリル絵の具で紙に。Mac持ってるならMacでCGでもいいがな。でもポートフォリオ見ると油絵がいいんだよな。ただ、油絵は乾きが遅いから、出版のイラスト向きじゃないがな」

「そうですね。南野クンにはMacは追々覚えてもらうっていうか教えることは出来ますので、まずはアクリル絵の具からですね」

「は、アクリル絵の具？それも使った事無いなあ。名前は知ってるけど、リキテックスとかアクリラですよ、画材屋で見たことあります」

「まあそうだね、キミの才能なら油絵の具と変わらないものが出来るだろうよ」

「はい、がんばります」

三人はそして談話しながら食事を進めた。やがて終わると、社長が水を飲みながら言う。

「それじゃ、会社に戻って、原稿のコピー渡し。それ読んで、カット描いてくれ」

社長は財布からお金を出して精算に入った。

「領収書、いつものように」

「はい、2750円です」

「うむ」

「今日はどうもご馳走様です」と真が言う。

「とても美味しかったです」

E-mail:juerisr@yahoo.co.jp, twitter:アカリ
文・イラスト ブルーアイリ
デザイナー・DTPオペレーター。学校を卒業後、デザイン事務所、印刷会社で働く。現在個人事業ブルーアイリスを営んでいる。派遣の合間を縫って構築中。

追憶 第一部 アクリラの追憶 第一部

「ああ、またちよくちよくこういう形で打ち合わせは増えてくるから、二人ともオレに馴染んでくれ。わはは」そう笑いながら、社長は外に出ていき、そして会社に戻ると原稿のコピーを受け取り、出来た作品の納品はメールに添付の形で納品する段取りにした。桜子の銀行の口座番号を書いてギャラの支払いの手続きもそこで確認した。

2人は挨拶をすると、会社を出て、帰路についた。桜子はまだ狐につままれたような面持ちで帰りの電車に乗った。真は仕事が成立した喜びを隠せないでいた。帰りの電車の中で桜子は真に問いかける。

「あの一、ほんとにこれでよろしいんでしょうか、いえ、絵を描くのはいやじゃないけど、こうして杵を貰って絵を描くのは初めてです、まあお金になるからいいのかなあ」

「うん、いいんじゃないでしょうか、そんなに学業にもフローラのバイトにも支障ないだろうから、お願いがあります。あなたにイラストレーターになって欲しいんです」

「そうストレートに言われちゃうとなあ。困るけど当分は仕事ありますねえ」

「がんばって」

2人は帰りも急行に乗って春日部駅まで同行した。数日中に桜子はカットを仕上げて、ワンダースケープを訪問しなくてはならない。別れ際、その事を確認すると 2人はそれぞれの家路に帰っていった。

題名 初仕事、打ち合わせは楽しかった 9月18日

＜取引先の女子高生を説き伏せてイラストレータータタとす。東大卒業後、デザイナーとしてデビューさせる。自分の叶わなかった夢を代わりに実現してくれる、そんな才能との出逢いがホクにはうれしい。自分はアクセクとデザイナーをやるが、彼女ははじめから違う。東京の一流どころの編集者に一発で認められるなんて、自分にとっては嬉しい事。さて、仕事が忙しければ、スキャナーで読み込んで入稿用のデータ作りを応援しなくちゃな＞

<m aosima @snow white涼子さん、今日は祝日なんでヒマです。遊びに行きます>

<snow whiteお待ちしております>

<sakurako_m@m_aosima真さんひまなんですね。ワタシは忙しいです>

<m aosima@sakurako mああ、もう一本仕事増えたうは、ごめんねつきあわせちゃって>

その日は秋晴れの空の青さが染み渡るいい天気だった。今日は秋分の日で秋の彼岸の日だった。真は涼子目当てにフローラへ立ち寄った。最近の春日部のツイッター仲間とのユーストリーム放送のあるミーティングへ涼子を連れ出そうという目論見もあった。バイク、緑色のVT250スパダは静かにフローラの前で止まった。ヘルメットを脱いで、バイクのシートの上に置いてあいさつをする。午前中の静かな時間だった。

「こんにちは」

「いらっしやいませ、ブログ見てますよ、桜子のデビュー決まったんですよね」と涼子が答

える。手には花束を握り、今ブーケを創ってるらしかった。

「そうですね、自分の夢は絵描きになる事だったんですが、南野クンに先を越されました。っていうか、自分の楽しみで営業したんですけどね、まあ才能があるって事で」

「いらっしやい、青島さん」と桜子も奥から出てきた。

「こんにちは、一発目のカット、結構評価よかったようだよ、社長から電話貰った、イイヨ
って」

「まああのくらいなら描けます、毎月2000円は稼げるからいいや」

「青島さん、最近インターネットで検索を覚えて、花言葉のページを見つけたんです」と涼子がゆっくり話だした。

「インターネットって便利ですよ、こういふ至急後援の必要な情報が一瞬で手に入りますからね、青島さんの動向もブログでチェックできるから困りません」

と言われ青島は冷や汗を書く。理子とのキスは書いてないのだが、ヨソのオンナとバイクでツーリングした自分のことを涼子はどう思っているかが気になる。また心の奥が縮こまる感触を真は味わっていた。

「えーと、そうですね22歳独身のオトコの赤裸の告白なんですけど、まあ引き続き見てやってください。なんか面白いです、話す前から話す事が分かってるってのは、自分には新鮮です」

「バイクでツーリング、銚子まで、ての読みまで、何もなかったの、オンナの人と一緒に、2人きり、なになかったんですかあ？」と桜子が目を細めて聞いてきた。真は一瞬ホントのことを言うか迷ったが、ごまかすことにした。

「何も無かったよ。海を見てきれいだと思い、~~早稲田~~天丼食べて帰ってきただけだよ、キミを裏切るなんて、ボクにはできないなあ」などと茶化して言った。

「ほーほーそうですか、なんか怪しい、怪しすぎる真さん、そんなところにワタシも引かれちゃうんだけど。同い年の男の子より年上の方が頼りがいあるって感じ」

「まあまあそのくらいにして、結婚式場のテーブルフラワー5点作るの手伝って」と涼子がさ
えぎった。

「はい、エーと皿5枚用意して、オアシスを切って置いて」と準備できましたと桜子。

「はい、じゃあ挿していくから」と涼子は以前に比べると大分手馴れた手つきでテーブルフラワーを作っていく。

「涼子さん、大分仕事慣れてきましたね、素人目にもはつきり分かりますよ」

「ええ、今は花を生けるのだけが楽しみですからね。そうそう、真さんには言っていなかったけどワタシ結婚はしたけど、結婚式は挙げてないんですよ、入籍だけ。お金無かったので、なにせ高校卒業したばかりでしたから」

「あーそうなんですか、でも葬式の生花よりは、祝い花のほうがいいんじゃないですか」

「そうですね、葬式の生花は基本男の人がやるんで、女タシはもっぱら花はいじらないで、事務やってました、北千住で」

「あ、そうなんですね、それは知りませんでした。自分には花は興味なかったんですけど、ココ

たわよ」

「キスをした。へー青島さん、何も無かったってウソだったのね。へー」

桜子は冷ややかな目で青島を見た。

「う、す、すみません、だっていきなりだったもので、クチビルを奪われたのはボクなんです」

「奪うなんて。22歳にもなったならキスの一つも出来ないでどうするの？と理子は笑いながら言った。涼子はその話を聞いて動揺はしなかった。落ち着いて手を動かしながらテーブルフラワーのアレンジメントを続けていた。理子は涼子に一瞥をくると話を続けた。

「そうね、涼子さん、まだ青島さんとは進展してないみたいだし、ワタシ宣言するわ、青島君をモノにするのは、ワタシ、よくって？」

そう宣言されると、涼子は手を止めて理子をちょっと見て、静かに話し出す。

「イエ、ワタシは未だに亡くした人のことが忘れられないし、青島さんはパソコンやインターネットのことを教えてくれるいい人以上のことは今は考えていないんですよ、だから、好きにやってください。選ぶのは青島さんなんだから」

「あら、余裕っていうか、のんびり構えていいんじゃないって事ね」と理子は腕を組みながら言った。

桜子が割り込む。

「ちょ、ちょっと待って。ワタシも青島さんなんです。ですからワタシはアナタのライバルですね」と桜子は青島を見てそういう。

青島はため息をついた。

「はあ」

理子は青島を見て少しいらだちながら、

「青島クン、もてるのね、いいわ、ワタシ、あの心をワタシに振り向かせてみるわ、絶対」

そこまで言われて真は天を見上げる。真はオナチの苛立ち、嫉妬、はやる気持ちを会話から感じ取っていた。オナチの怖さをかいま見て、やるせない気持ちになった。

「あの、もういいじゃないですか。自分は確かに彼女なしなんだけど、今は涼子さんが好きで、でも、涼子さんは元カレが忘れられなくて、南野クンは好きっていうか、その才能をボクは買ってるし、理子さんは……」

「ワタシはどうなの、どう思うのよ？ワタシのこと」

「あの一いや、バイク仲間なんですけど」

「それだけ」

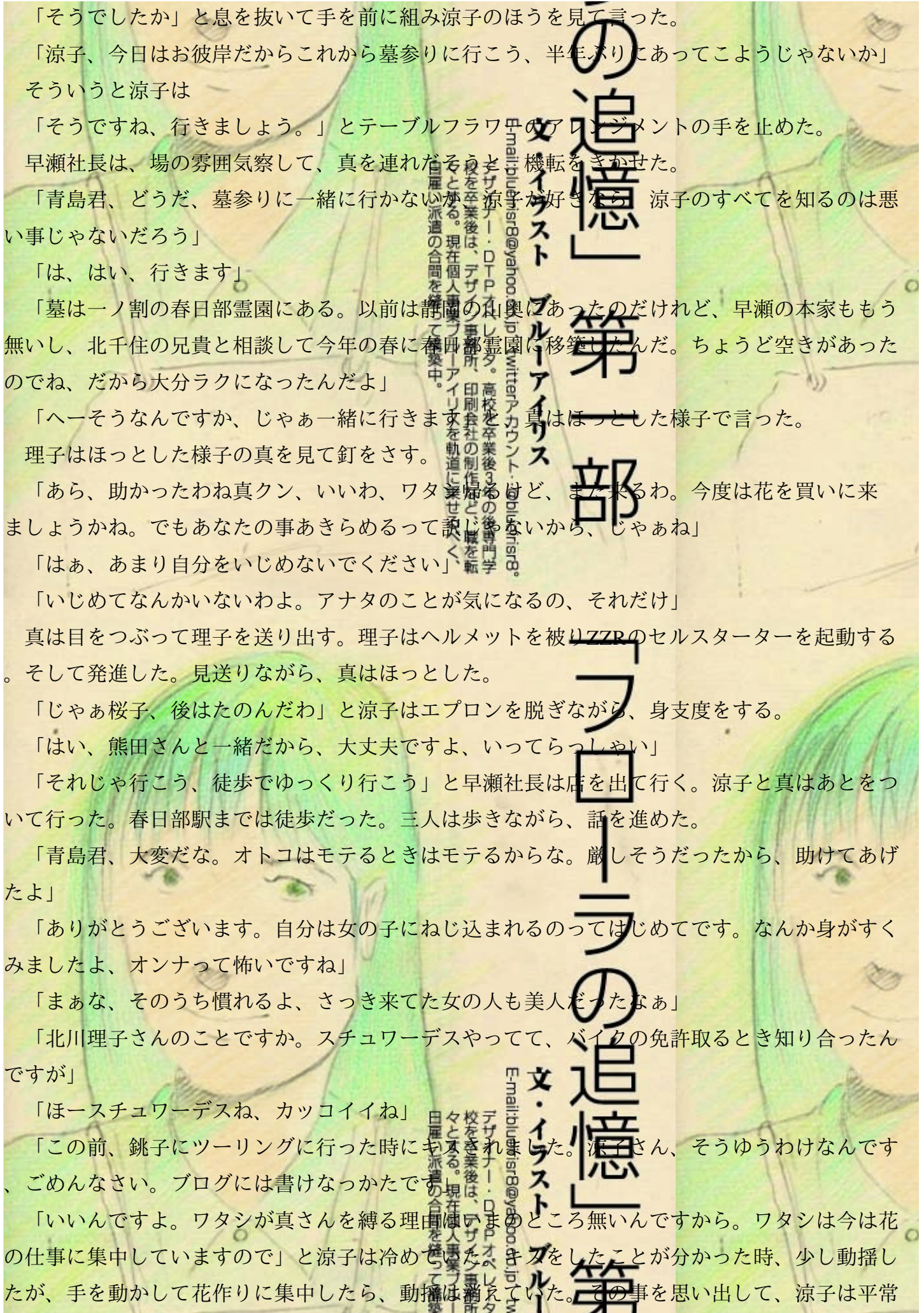
二の句がつけない真だった。この硬直した空気を真はどうしようもなかった。真の内面は地獄落ちしていた。そこへ、奥から店の様子を見に出た早瀬社長が助け船をだす。

「いらっしやい、美人さん。青島君の彼女かな？青島君もてるなあ」

「まだ、彼女未満なんです、でもキスはしましたけどね」

文・イラスト ブルーアイリス
Email: blueiris@yaho.co.jp, twitter: aca...@blueiris
至サイナー・DTPオペレータ。高校を卒業後3年の後専門学校を卒業後は、デザイン事務所、印刷会社の制作など、十職を兼る。現在の人事業ブルーアイリスを軌道に乗せるべく、フリー派遺の合同を縫って構築中。

「フローラの追憶」第一部



「そうでしたか」と息を抜いて手を前に組み涼子のほうを見て言った。

「涼子、今日はお彼岸だからこれから墓参りに行こう、半年ぶりにあってこようじゃないか」

そういうと涼子は

「そうですね、行きましょう。」とテーブルフラワーのアレンジメントの手を止めた。

早瀬社長は、場の雰囲気察して、真を連れだして機転をきかせた。

「青島君、どうだ、墓参りに一緒に行かないか」涼子のすべてを知るのは悪い事じゃないだろう」

「は、はい、行きます」

「墓は一ノ割の春日部霊園にある。以前は静園の山奥にあったのだけれど、早瀬の本家ももう無いし、北千住の兄貴と相談して今年の春に春日部霊園に移築したんだ。ちょうど空きがあったのでね、だから大分ラクになったんだよ」

「へーそうなんですか、じゃあ一緒に行きま」

理子はほっとした様子の真を見て釘をさす。

「あら、助かったわね真くん、いいわ、ワタシはほっとした様子で言った。

「はあ、助かったわね真くん、いいわ、ワタシはほっとした様子で言った。

「はあ、あまり自分をいじめないでください」

「いじめてなんかいないわよ。アナタのことが気になるの、それだけ」

真は目をつぶって理子を送り出す。理子はヘルメットを被りZZRのセルスターターを起動する。そして発進した。見送りながら、真はほっとした。

「じゃあ桜子、後はたのんだわ」と涼子はエプロンを脱ぎながら、身支度をする。

「はい、熊田さんと一緒だから、大丈夫ですよ、いってらっしゃい」

「それじゃ行こう、徒歩でゆっくり行こう」と早瀬社長は店を出て行く。涼子と真はあとをついて行った。春日部駅までは徒歩だった。三人は歩きながら、話を進めた。

「青島君、大変だな。オトコはモテるときはモテるからな。厳しそうだったから、助けてあげたよ」

「ありがとうございます。自分は女の子にねじ込まれるのって初めてです。なんか身がすくみましたよ、オンナって怖いですね」

「まあな、そのうち慣れるよ、さっき来てた女の人も美人だったなあ」

「北川理子さんのことですか。スチュワーデスやってて、バイクの免許取るとき知り合ったんですが」

「ほースチュワーデスね、カッコイイね」

「この前、銚子にツーリングに行った時に涼子さんと会った。涼子さん、そうゆうわけなんです、ごめんなさい。ブログには書けなかったです」

「いいんですよ。ワタシが真さんを縛る理由が、真さん、そうゆうわけなんです。ワタシは今は花の仕事に集中していますので」と涼子は冷めて、少し動揺したが、手を動かして花作りに集中したら、動揺は消えていた。その事を思い出して、涼子は平常

追憶 第一部

文・イラスト

E-mail:bluebird@yahoo.co.jp

心を取り戻したのだった。

「さて駅に着いたぞ、切符を買おう、一ノ割駅。早瀬社長は切り出す。

三人は切符を買い改札を抜け一番線のホームで待つ。三人は乗り込んだ。

「静岡の墓ですか、遠かったんですね」

「うん、本家も無いけど、墓は動かせなかったからね。涼子も甥の墓参りには静岡まで行ってたんだよ」

「涼子さん、大変でしたね」と真は落ち着いている涼子に話しかける。

「ええ、ワタシ、命日には静岡まで、行ってました。今年の春から春日部に移築したから大分ラクになりましたよ」

ほどなく電車は一ノ割駅に着いた。

「さて、霊園まではちょっと歩くけど、行こうか」

駅前から細い道を藤塚橋の交差点まで歩き、橋を超えコンビニのある信号を右に曲がる。左手に保育所と香取神社を見ながら、霊園まではあと一キロぐらいあるだろうか。

「ひなびたいいところだろう」

「そうですね」

やがて春日部霊園が見えてきた。ココには霊園が三つある、かなり古くからある霊園なのだった。三人は霊園の正門から入り、一番古利根川沿いの一画にある古びた墓の前に立った。

「さあ、ここが早瀬家の墓だよ、ちょっと水汲んで」と言っ
て早瀬社長は正門脇の水道に向かった。墓にかける水を汲むためだ。真は涼子と模索したが、シンミリしている涼子にかける言葉はなかった。考えた末に言葉をだした。

「涼子さん、亡くなった旦那さんってどうい

そう聞かれて、涼子はうつむいた。

「どんな人だったか。優しい人でした、と

「優しい人でしたか、そうですか」

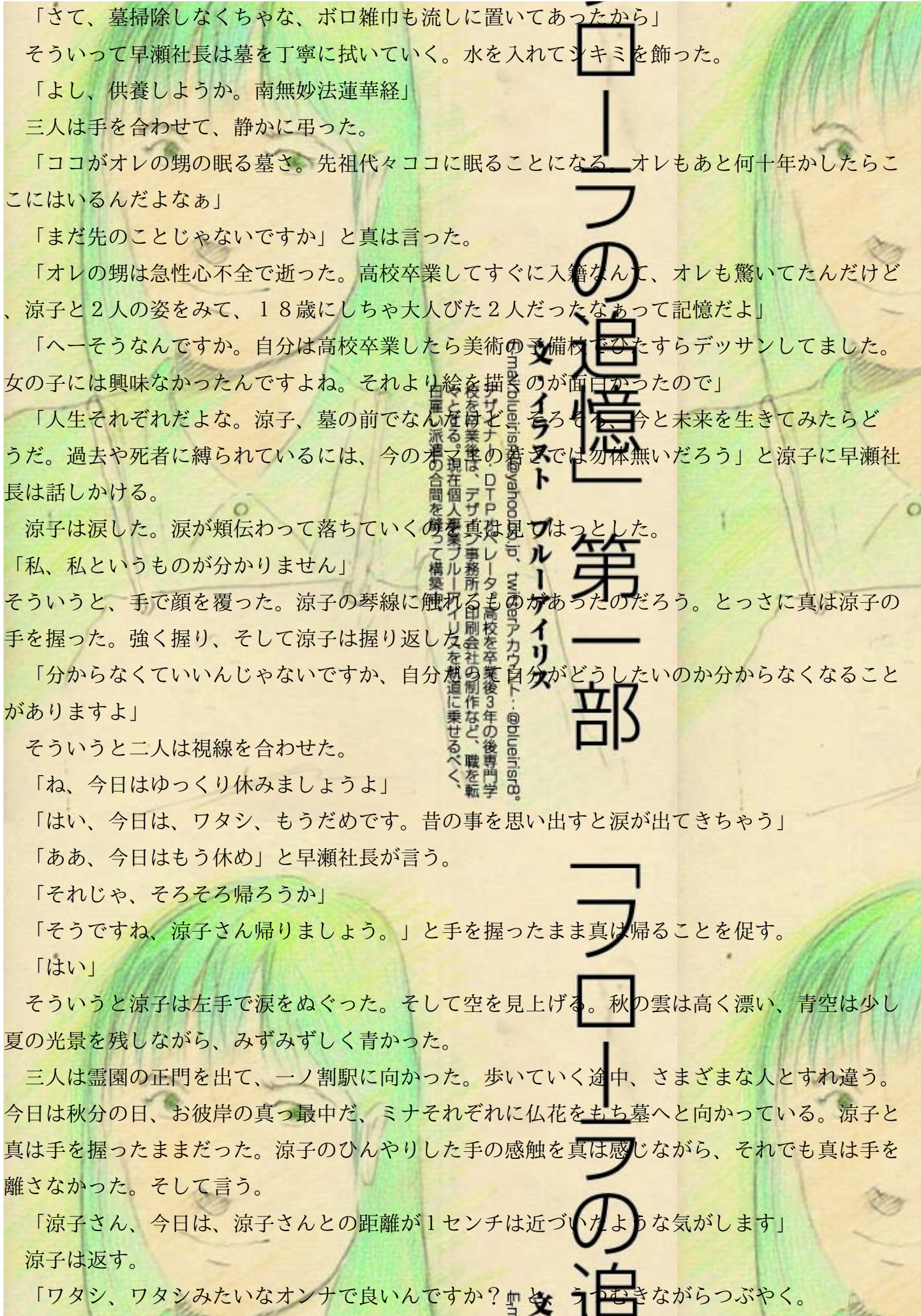
「青島さんも随分やさしい人ですけど、ワタシは6歳で恋に落ちて、夢中で高校生活を送って卒業して入籍して、ってワタシの青春はめま

「ボクなんか、高校生の頃はぼんやりしてま

「わたし……」と涼子が言いかけた時、早瀬社長がオケに水を入れシキミを携えて、墓に戻ってきた。

「よし、準備できた、涼子、線香に火をつけてくれ」

「はい、わかりました、ライター貸してください」と涼子は持参した線香の一束に火をつけていた。



「さて、墓掃除しなくちゃな、ボロ雑巾も流しに置いてあったから」
そういつて早瀬社長は墓を丁寧に拭いていく。水を入れてシキミを飾った。
「よし、供養しようか。南無妙法蓮華經」
三人は手を合わせて、静かに弔った。
「ココがオレの甥の眠る墓さ。先祖代々ココに眠ることになる。オレもあと何十年かしたらここにはいるんだよなあ」
「まだ先のことじゃないですか」と真は言った。
「オレの甥は急性心不全で逝った。高校卒業してすぐに入籍なんて、オレも驚いてたんだけど、涼子と2人の姿をみて、18歳にしちゃ大人びた2人だったなあって記憶だよ」
「へーそうなんですか。自分は高校卒業したら美術の予備校でひたすらデッサンしてました。女の子には興味なかったんですよ。それより絵を描くのが面白かったの」
「人生それぞれだよな。涼子、墓の前でなんでもしろ、今と未来を生きてみたらどうだ。過去や死者に縛られているには、今のオレたちでは勿体無いだろう」と涼子に早瀬社長は話しかける。
涼子は涙した。涙が頬伝わって落ちていくのを見つめた。
「私、私というものが分かりません」
そういつと、手で顔を覆った。涼子の琴線に触れるものがあったのだろう。とっさに真は涼子の手を握った。強く握り、そして涼子は握り返した。
「分からなくていいんじゃないですか、自分はどうしたいのか分からなくなることがありますよ」
そういつと二人は視線を合わせた。
「ね、今日はゆっくり休みましょうよ」
「はい、今日は、ワタシ、もうだめです。昔の事を思い出すと涙が出てきちゃう」
「ああ、今日はもう休め」と早瀬社長が言う。
「それじゃ、そろそろ帰ろうか」
「そうですね、涼子さん帰りましょう。」と手を握ったまま真は帰ることを促す。
「はい」
そういつと涼子は左手で涙をぬぐった。そして空を見上げる。秋の雲は高く漂い、青空は少し夏の光景を残しながら、みずみずしく青かった。
三人は霊園の正門を出て、一ノ割駅に向かった。歩いていく途中、さまざまな人とすれ違う。今日は秋分の日、お彼岸の真つ最中だ、ミナそれぞれに仏花をもち墓へと向かっている。涼子と真は手を握ったままだった。涼子のひんやりした手の感触を真は感じながら、それでも真は手を離さなかった。そして言う。
「涼子さん、今日は、涼子さんとの距離が1センチは近づいたような気がします」
涼子は返す。
「ワタシ、ワタシみたいなオンナで良いんですか？ ねえ、うっむきながらつぶやく。」

maquiesist@yahoo.jp, twitter: @blueiris8.
ザザナ・DTP、レータ、高校を卒業後3年の後専門学
校を卒業後、デザイン事務所、印刷会社の制作など、職を転
々とする。現在は個人事業主としてフリーランスを営むべく、
白屋派遣の合間を縫って構築中。

「オレの追憶」第一部

「いいんじゃないですか、ボクは涼子さんのこと太事に思っています。涼子さんの中で過去は決して消えるものじゃないだろうけど、ボクは待っています。あなたとの心の距離が0センチメートルになるまで、ボクは待ちます」

2人は結局一ノ割の駅の券売機で切符を買い、手を握ったまま歩いてきた。早瀬社長は涼子の中に新しい心の動きがかすかに動いているのを感じて嬉しく思っていた。ただ、その事は早瀬社長は今はそっと秘めておこうと思い、電車に乗るまで、無言でいた。

春日部駅について、ゆっくりフローラに戻る三人だった。帰る途中真は、今日の用事でもう一

「涼子さん、そうだ、言うの忘れてたけど、毎度後30分くらいでミーティングがあるんだけど、一緒に参加しませんか？ ユーストリームで実況中継作るとちょっと恥ずかしいんですが、まあ5人くらいしか見ないインターネットテレビ放送なんですけどね」

涼子は驚いて当惑した顔で言った。

「ええ、まあ一回くらいなら出てもいいですけど、テレビに出るんですか？ワタシ」

「ええ、でもまだ出来たばかりで誰も見ない番組ですけど、ツイッターでリンク貼っても見るのは春日部のツイッター仲間くらいなものですよ。春日部の花娘代表で是非ご一緒したいんですけど」

「はわかりました、真さん一緒に行ってくれるんですね」

「もちろん、一緒ですよ」

「おおーっと、面白そうな話だな。フローラの宣伝にもなるから、涼子出て見れ。今と未来に生きろ、オンナに生まれたならな」と無言だった早瀬社長がエールを送る。

「今と未来に生きる。そうですね、オンナですものね」

「まあいいよ、今日は涼子は仕事上がっていい。あとは桜子と熊田がやるから」

「えーっと、ほんとと涼子さんをバイクに乗せて走り回りたいですが、まだ免許とって間もないのでタンデム禁止なんです。今日は一人で吉川とか旧庄和の田んぼ道走ってきます」

「そうですか。ああ、あとテレビの放映っていつやるんですか？日にちが知りたいです」

「ああ、ミーティングは来週の金曜日です。丸和不動産の三階の応接室でやりますね。金曜日の夕方迎えに来ますので、その時はよろしくお願ひします。涼子さんみたいな美人が来ればみんな沸き立つ事受けあいですので、楽しみです」

「ええ、それじゃ今日は桜子と熊田さんにおいでしてから帰ります」

「涼子さん、今まで聞かなかったけど、どこに住んでるんですか、すみません、興味があったので聞いちゃいます」

「南桜井の、江戸川のほとりのワンルームです。実家は足立区なんで、まあ東武線で通ってもよかったんですけど、通勤時間が苦痛なので春日部にアパート借りたんですよ」

「そうなんです、自分最近手紙に凝ってて、高校の同級生とかによくハガキを送ることをやっています。インターネットのメールもいいけど、手紙の味わいもまたいいものですよ、ですから、あとで住所教えてください」

「手紙ですか、いいですよ。そういえばワタシも毎年賀状も出さないで3年経っちゃいました。高校卒業してすぐ入籍して、夫が無くなってあわよく三年過ぎしちゃいましたからね」

「過去は過去ですよ、オンナなら今と未来に生きないと。天国の旦那さんもそう思ってるじゃないかな」

「そうですね、ああ、フローラについた、それでは」

そういうと涼子は店に入っていく、桜子と熊田にあいさつを入れて、その長い髪をリボンでまとめて少しはしゃぐように店を出てきた

「それじゃ、今日はこれで帰ります。ちょっとララガーデンによって、洋服でも見て帰りますわ。真さん、それじゃまた今度」

「ええ、また来週。当日に携帯にメール入れますから」

「はい、分かりました、それじゃ」

そういうと涼子は横断歩道を渡り、郵便局の脇を抜けララガーデンへむけて歩いていった。その背中を見送りながら真は自分も動く準備をした。店前に停めてあったバイクにキーを挿し、ヘルメットを被り、バイクにまたがったところで、早瀬社長が大きな声で言った。

「青島君、涼子のこと頼んだよ、アイツの時計を動かせるのは、きっとキミしかいない。影ながら応援するぞ」

そういわれて、真は背筋にピンと気合が入るのが分かった、そして答える。

「はい、分かりました」

そういうと真はアクセルを空け、ゆっくり車を出た。前方には涼子の後姿が見え、バイクのミラーにはフローラと早瀬社長の姿が見え、ゆっくりアクセルを空け信号は青だったので思い切りよくバイクを発進させた。次第に遠くへ暮れに掛かっていた。夕暮れまではあとわずかだった。

題名 秋分の日、墓参り 9月23日

＜今日は好きなあの人に会いにフローラへ行ってきた。アクシデントはあったけれど、概ね今日はいい日だった。彼女の過去を知り、未来へ導くためにボクは生きているんだ。そう思うと胸が熱くなってくる。これは恋なんだ。墓参りの帰り、ボクは彼女の手を握ったまま離さなかった。彼女のひんやりした手を握り、未来を思った。＞

翌24日、ワンダースケープの三人は仕事が終わって三人でラウンドアバウトで飲んでいた。真は恵子と墨田に秋分の日に自分の身に起きた出来事をすべて報告した。恵子は電気ブランをあおりながら、真に食いついた。

「ふーん、それで、手を握ったと。それが進展だと、アンタはいいたいわけね」

「ええ、手を握りましたよ。新鮮です。心と心の距離が一センチ近づいたって感じです」

「まあ涼子さんの身上を聞けば結構難しい人みたいだから、いいな、真、よくやったよ」と墨

田がフォローを入れる

「ありがとうございます。いつか彼女との距離がゼロセンチに近づくように頑張ってみます」
「心の距離か。一度すれ違うと取り戻すのが難しいが、まあゆっくりやれや」
「はい、フローラの社長さんにも期待されています、ですので頑張ります」
「でもさ、真クン、未だに童貞なんだよね」と酔った勢いで恵子が突っ込む。
「はい、でもそんなことは今はどうでもいいです。彼女との心の距離が近づけばそれでボクは救われます」

「好きにやって頂戴、マスター、このボウヤの何か一冊プレゼントしてやって」
「はいよー」

スローなバラードが流れてきた。そう、真は未だ童貞のままなのだった。

文・イラスト ブルーアイリス
E-mail:blueiris8@yahoo.co.jp, twitter:アカント...@blueiris8
デザイナー・DTPオペレータ。高校を卒業後3年の後専門学校を卒業後は、グラフィック事務所、印刷会社の制作など、職を転々とする。現在個人事業ブルーアイリスを軌道に乗せるべく、日雇い派遣の合図を縫って構築中。

参加者データ・クレジット

「来週」

文 姉崎あきか

ライター・記者・書評家。金融関係のオシロイが多い。駆け出しライター。書籍の代筆、ウェブサイトのキャッチコピー、業界新聞などを手がける。自分の名前で本を出すのが夢。ジ

文・イラスト ブルーアイリス
E-mail:blueiris8@yahoo.co.jp, twitter:アカント...@blueiris8
デザイナー・DTPオペレータ。高校を卒業後3年の後専門学校を卒業後は、グラフィック事務所、印刷会社の制作など、職を転々とする。現在個人事業ブルーアイリスを軌道に乗せるべく、日雇い派遣の合図を縫って構築中。

ブリ映画とJポップが好き。写真の勉強中。愛犬のシズモモが宝物。E-mail:akika_54@yahoo.co.jp、twitterアカウント@akika_a。

イラスト

たかはしいちこ

URL <http://strawberry-11.p1.bindsite.jp/>

メール ichiko.taka@gmail.com

「専門学校卒業後、イラストグループ展を中心に活動中。
今春より、イラスト入り旅行エッセイも執筆開始。」

表紙イラスト

mm（ミリ）

URL : <http://miriyellow.web.fc2.com/>

長崎在住。少年少女を中心にレトロでポップなイラストを描く。

「フローラの追憶 第一部」

文・イラスト ブルーアイリス・中島英樹

URL:<http://www.blueiris.jp> メールblueiris8@yahoo.co.jp

ブルーアイリス
Twitterアカウント: @blueiris8
高校を卒業後3年の後専門学校
事務所、印刷会社の制作など、職を転
がってイラストを軌道に乗せるべく、
縫って建築中。

第一部

フローラの追

文・

デジタルパブリッシング DPの基礎講座概要(受講開始時期未定)

一ヶ月、日曜日の4時間、

5万円(前金制)

- 小説は書けるけど、同人誌のデータの作り方が分からない。
- ホームページ、今まで機会が無かった。
- 名刺、どこにどうやって発注すればいいの? さっぱり分かりません。と言う人にお勧めです。

カリキュラム

- 1、イラストレーターで名刺を作ってみよう
- 2、Golive5.0(ホームページビルダー)でホームページを作ろう
- 3、一太郎+花子(イラストレーター)で電子書籍を作ろう
- 4、一太郎+花子(イラストレーター)で印刷データを作ろう

受講資格

小説を世に出したい方、日曜日に埼玉県春日部市までたどり着ける方、MIXIがフェイスブックやられている方、なによりも「やってみたい」と言うモチベーションのある方

応募・問い合わせの連絡先(メール)

中島英樹(ブルーアイリス)

blueiris8@yahoo.co.jp

ニッケルイエローでは 広告を募集しています

この電子書籍をご覧になられた方で
広告を出稿されたいお客様が
いらっしゃいましたら是非ご連絡下さい。



Blueiris Graphic Arts Studio

ブルーアイリスグラフィックアートスタジオ

●illustration ●e-publishing ●manga

<http://www.blueiris.jp>

blueiris8@yahoo.co.jp

(お問い合わせはお気軽にメール下さい)

代表

中島 英樹

(ブルーアイリス)

奥付・編集後記



表紙イラスト ME(ミリ)

<http://milyellow.web.fc2.com/>

長崎在住。少女少女を中心に
レトロでポップなイラストを
描く。

編集後記

みなさんこんにちは。このテキストを打っているのが夏の到来に天気も真つ青な夏空の下、必死にレイアウトデザインをやっています。イラストレーターから送られてきたJ2Hファイルが開けない、J2Hの何とかが開けるようになったけど、安心して作業に打ち込むには、このMacintosh8600/200は古すぎるでしょう。でもアフローチは業界の先端に追いつきたい、今日このごろです。ニッケルイエローVol.2は2012年11月を予定しています。フロアの追憶の第二部を連載開始。その他、様々な作家さんの作品を載せていきたいです。